平安京右京五条四坊十二町
西京極遺跡

— 西院月双町の調査 —

2010年

古代文化調査会

平安京右京五条四坊十二町
西京極遺跡

— 西院月双町の調査 —

2010年

古代文化調査会

例　言

1．本書は、古代文化調査会が京都市右京区西院月双町において、三交不動産株式会社によるマンション建設に伴い実施した平安京右京五条四坊十二町・西京極遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、三交不動産株式会社より委託を受けた古代文化調査会の家崎孝治が担当し、上村憲章が補助した。

3．調査にあたっては、京都市文化市民局文化財保護課の指導を受けた。

4．本書の編集・執筆は家崎がおこなった。

5．図面及び遺物整理は、浅井 淳、板谷桃代、上垣雅子、須貝淑恵、水谷明子が分担し、製図は板谷、水谷が担当した。

6．本書で使用した方位及び座標の数値は世界測地系（新測地系）平面直角座標系 VI による。

7．本書で使用した地図は、京都市都市計画局発行の 2500 分の 1 の地図（西京極）、国土地理院発行の 25000 分の 1 の地図（京都西南部）を調整し、使用した。

8．土壌及び土器・瓦類の色調の表記は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。

9．遺構番号はＡ・Ｂ区でそれぞれ付し、遺物番号は掲載順の番号として実測図・写真ともに共通している。

10．発掘調査及び遺物整理に際して、下記の方々の御指導・御協力を得ることができた。記して感謝の意を表します。（所属・敬称略、五十音順）

網　伸也　家原圭太　伊藤淳史　伊藤俊文　宇野隆志　馬岡清一　馬瀬智光
岡本浩志　梶川敏夫　加藤紀彦　金村順吉　北崎仁志　北田栄造　清水惣一
杉森　実　菅田　薫　高橋俊三　玉村登志夫　千葉　豊　坪田　剛　冨井　眞
西森正晃　西山良平　沼田政行　橋長正和　長谷川行孝　平方幸雄　平野哲也
藤原武士　古市直邦　堀　大輔　南　孝雄　宮原健吾
（株）明輝建設　（株）礎　（株）大高建設　（財）京都市埋蔵文化財研究所
三交不動産（株）（有）京都編集工房

本　文　目　次

平安京右京五条四坊十二町・西京極遺跡

Ⅰ　調査の経過……1
　1　調査に至る経緯……1
　2　調査経過……1

Ⅱ　遺　　跡……5
　1　A区の遺構……5
　2　B区の遺構……19

Ⅲ　遺　　物……23
　1　A区の土器・陶磁器類……23
　2　B区の土器・陶磁器類……40
　3　その他の出土遺物……42

Ⅳ　ま　と　め……47

図　版　目　次

図版1　遺跡　第1面全体図
図版2　遺跡　第2面全体図
図版3　遺跡　A区北　第1面遺構実測図
図版4　遺跡　A区北　第2面遺構実測図
図版5　遺跡　A区南　第1面遺構実測図
図版6　遺跡　A区南　第2面遺構実測図
図版7　遺跡　A区南　第3面溝841実測図
図版8　遺跡　B区　第1面遺構実測図
図版9　遺跡　B区　第2－1面遺構実測図

図版 10　遺跡　B 区　第 2－2 面遺構実測図
図版 11　遺跡　A 区北　竪穴住居 172・171　A 区南　竪穴住居 712 実測図
図版 12　遺跡　A 区南　竪穴住居 711・816・830 実測図
図版 13　遺跡　A 区北　竪穴住居 402 実測図
図版 14　遺跡　A 区北　竪穴住居 260 実測図
図版 15　遺跡　A 区北　竪穴住居 333・346 実測図
図版 16　遺物　A 区北　竪穴住居 304 実測図
図版 17　遺物　A 区北　竪穴住居 352・322・350 実測図
図版 18　遺跡　A 区北　竪穴住居 303・316 実測図
図版 19　遺跡　A 区北　竪穴住居 339・345・366　A 区南　竪穴住居 796 実測図
図版 20　遺跡　A 区南　竪穴住居 777・806・730 実測図
図版 21　遺跡　A 区南　竪穴住居 788・802 実測図
図版 22　遺跡　A 区南　竪穴住居 743・746 実測図
図版 23　遺跡　A 区南　竪穴住居 750・840・751 実測図
図版 24　遺跡　B 区　竪穴住居 42・43 実測図
図版 25　遺跡　B 区　竪穴住居 39・40・49 実測図
図版 26　遺跡　B 区　竪穴住居 41 実測図
図版 27　遺跡　A 区北　建物 1 実測図
図版 28　遺跡　A 区北　建物 3 実測図
図版 29　遺跡　A 区北　建物 2・柵 4・21 実測図
図版 30　遺跡　A 区北　建物 6　A 区南　建物 12 実測図
図版 31　遺跡　A 区南　建物 15 実測図
図版 32　遺跡　A 区南　建物 16　B 区　建物 1 実測図
図版 33　遺跡　1　調査地遠景（北西から）
　　2　A 区北　第 1 面北半部（北東から）
図版 34　遺跡　1　A 区北　第 1 面南半部（東から）
　　2　A 区北　第 2 面南半部（東から）
図版 35　遺跡　1　A 区北　第 2 面全景（北東から）
　　2　A 区北　第 2 面北半部（北東から）
図版 36　遺跡　1　A 区南　第 1 面東半部（北西から）
　　2　A 区南　第 1 面中央北部（北から）
図版 37　遺跡　1　A 区南　第 1 面西半部（北東から）
　　2　A 区南　第 1 面中央部（北から）
図版 38　遺跡　1　A 区南　第 2 面東半部（北西から）
　　2　A 区南　第 2 面東部（北西から）

図版 39　遺跡　1　A 区南　第 2 面西半部（北東から）
2　A 区南　第 2 面中央部（北から）
図版 40　遺跡　1　A 区南　第 3 面溝 841（北西から）
2　A 区南　第 3 面溝 841（北西から）
図版 41　遺跡　1　B 区　第 1 面全景（北から）
2　B 区　第 1 面北半部（北から）
図版 42　遺跡　1　B 区　第 2 面全景（北から）
2　B 区　第 2 面北半部（北から）
図版 43　遺跡　1　A 区　竪穴住居 712 炭化材出土状況（東から）
2　A 区　竪穴住居 712（東から）
3　A 区　竪穴住居 712 壁柱出土状況（北東から）
4　A 区　竪穴住居 816（南西から）
5　A 区　竪穴住居 711（東から）
6　A 区　竪穴住居 171（北東から）
7　A 区　竪穴住居 830（東から）
8　A 区　竪穴住居 176・306（北東から）
図版 44　遺跡　1　A 区　竪穴住居 260（北東から）
2　A 区　竪穴住居 402（北東から）
3　A 区　竪穴住居 304・322・352（北東から）
4　A 区　竪穴住居 345・366（東から）
5　A 区　竪穴住居 303（東から）
6　A 区　竪穴住居 339（北西から）
7　A 区　竪穴住居 796（北東から）
8　A 区　竪穴住居 777（北東から）
図版 45　遺跡　1　A 区　竪穴住居 730（北東から）
2　A 区　竪穴住居 788（北西から）
3　A 区　竪穴住居 802（北西から）
4　A 区　竪穴住居 743（南西から）
5　A 区　竪穴住居 746（南東から）
6　A 区　竪穴住居 750（北西から）
7　A 区　竪穴住居 840（北西から）
8　A 区　落ち込み 414（東から）
図版 46　遺跡　1　A 区　縄文土器 No.9 地点出土状況（北から）
2　A 区　溝 841 土器出土状況（南東から）
3　A 区　溝 179 土器出土状況（北東から）

4　A区　竪穴住居 777 土器出土状況（北から）
5　A区　柱穴 119 遺物出土状況（北東から）
6　A区　竪穴住居 303 紡錘車出土状況（南から）
7　A区　柱穴 256 土器出土状況（南西から）
8　A区　柱穴 266 土器出土状況（南から）
図版 47　遺跡　1　A区　カマド 285（竪穴住居 260）（南東から）
2　A区　カマド 285 断ち割り状況（東から）
3　A区　カマド 790（竪穴住居 777）（南西から）
4　A区　カマド 400（竪穴住居 304）（南東から）
5　A区　カマド 410（竪穴住居 303）（南東から）
6　A区　竪穴住居 746 カマド（東から）
7　A区　土壙 426（南東から）
8　A区　竈形土器出土状況（北東から）
図版 48　遺跡　1　A区　柱穴 201（建物 3）（南から）
2　A区　柱穴 215（建物 3）（南から）
3　A区　柱穴 270（建物 3）（南から）
4　A区　建物 15 拡張区（南から）
5　A区　柱穴 650（建物 15）（南から）
6　A区　柱穴 652（建物 15）断ち割り（南から）
7　A区　柱穴 650（建物 15）断ち割り（南から）
8　A区　柱穴 654（建物 15）断ち割り（南から）
図版 49　遺跡　1　B区　竪穴住居 42（東から）
2　B区　竪穴住居 40（北西から）
3　B区　竪穴住居 39・49（北西から）
4　B区　竪穴住居 41（北西から）
5　B区　土壙 74（西から）
6　B区　土壙 60（竪穴住居 42）（北から）
7　B区　土壙 46（竪穴住居 39）（西から）
8　B区　柱穴 73（竪穴住居 42）断面（東から）
図版 50　遺物　B区　土壙 74・A区　縄文土器・溝 841・竪穴住居 171 出土遺物
図版 51　遺物　A区　竪穴住居 260・304・339・777・土壙 426 出土遺物
図版 52　遺物　A区　土壙 426・溝 179 出土遺物
図版 53　遺物　A区　溝 179・795・317・柵 21 出土遺物
図版 54　遺物　A区　柱穴 119・建物 1・3・15・溝 534・320 出土遺物
図版 55　遺物　A区　溝 795・179・247・246・540・841・土壙 180・254・395・建物 12・竪穴

住居 743・303・260・730・746・柱穴 119・包含層・B 区　竪穴住居 42 出土遺物
図版 56　遺物　A 区　包含層・溝 179・841・327・柱穴 107・土壙 825・B 区　竪穴住居 40・39 出土遺物

挿　図　目　次

図 1　調査地点位置図……1
図 2　調査地位置図……2
図 3　平安京条坊と調査地位置図……2
図 4　四行八門と調査位置関係図……2
図 5　A 区北　東壁断面実測図……4
図 6　A 区南　北壁（東部）・東壁断面実測図……6
図 7　A 区北　溝 412・落ち込み 414 実測図……7
図 8　A 区北　落ち込み 414 断面実測図……7
図 9　A 区南　土壙 713 実測図……8
図 10　A 区北　土壙 426 実測図……14
図 11　A 区北　溝 317・327・332 断面実測図……14
図 12　A 区北　柱穴 256（柵 21）実測図……15
図 13　A 区北　柱穴 119 実測図……15
図 14　A 区北　柱穴 266（建物 3）実測図……15
図 15　B 区　土壙 74 実測図……19
図 16　B 区　西壁・北壁断面実測図……20
図 17　A・B 区　出土縄文土器拓影・実測図……24
図 18　A 区北　落ち込み 414 出土遺物実測図……25
図 19　A 区南　溝 841 出土遺物実測図……25
図 20　A 区北　土壙 180 出土遺物実測図……25
図 21　A 区北　竪穴住居 171・172・176・333 出土遺物実測図……26
図 22　A 区北　竪穴住居 260・304・350・339・352・303・316・322・346 出土遺物実測図…28
図 23　A 区南　竪穴住居 750・777・746・788 出土遺物実測図……29
図 24　A 区北　土壙 426 出土遺物実測図……31
図 25　A 区北　溝 179 出土遺物実測図……32

図 26　A 区南　溝 795 出土遺物実測図……33
図 27　A 区北　溝 317・332・柵 21・柱穴 119・A 区南　建物 19 出土遺物実測図……34
図 28　A 区北　建物 1・3・5・8・柵 11・A 区南　建物 12・13 出土遺物実測図……36
図 29　A 区南　建物 15・16・17・22・柵 18 出土遺物実測図……37
図 30　A 区南　溝 534・502・A 区北　溝 320・246・247・283 出土遺物実測図……39
図 31　B 区　竪穴住居 39・40・42・41・建物 1・溝 3 出土遺物実測図……41
図 32　土製品実測図……42
図 33　軒瓦拓影・実測図……43
図 34　金属製品実測図……43
図 35　石鏃・臼玉・管玉実測図……44
図 36　石製品実測図 1 ……45
図 37　石製品実測図 2 ……46

平安京右京五条四坊十二町・西京極遺跡

Ⅰ　調査の経過

1　調査に至る経緯

調査地は、京都市右京区西院月双町９他である。当該地は周知の遺跡・平安京跡の右京五条四坊十二町及び弥生時代から古墳時代の集落跡である西京極遺跡にあたる。2008 年の夏、当地に三交不動産株式会社によるマンション建設の計画がなされた。施主は京都市文化財保護課より当該地が発掘調査の必要性がきわめて高い地域である旨を受け、試掘調査を経ずに発掘調査を実施することとした。京都市の指導の下、施主との協議の結果、当調査会が発掘調査をおこなうことになり、調査は 2008 年９月より開始することとなった。

2　調査経過

当該地は、平安京右京五条四坊十二町に相当し、西側が無差小路、東側が山小路、北側が高辻小路、南側が五条大路に囲まれたところで、調査対象地は十二町の中央南半部にあたる。この十二町においては、北東側の隣接地で 1984 年試掘調査[註1]がおこなわれ、弥生から古墳時代の竪穴住居跡、奈良から平安時代の掘立建物跡などの重層する遺構を検出し、右京域における顕著な複合遺跡の存在が初めて明らかとなった。この試掘調査地においては当時発掘調査の指導が為され

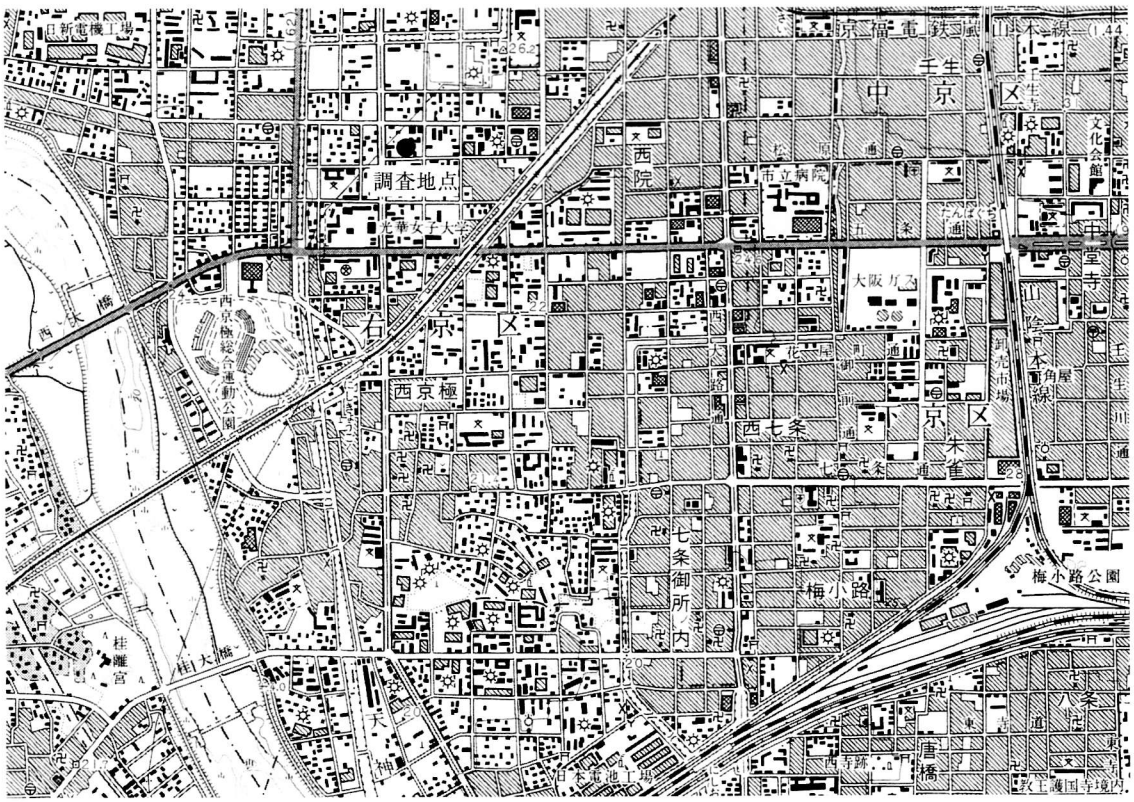


図１　調査地点位置図（1/25,000）

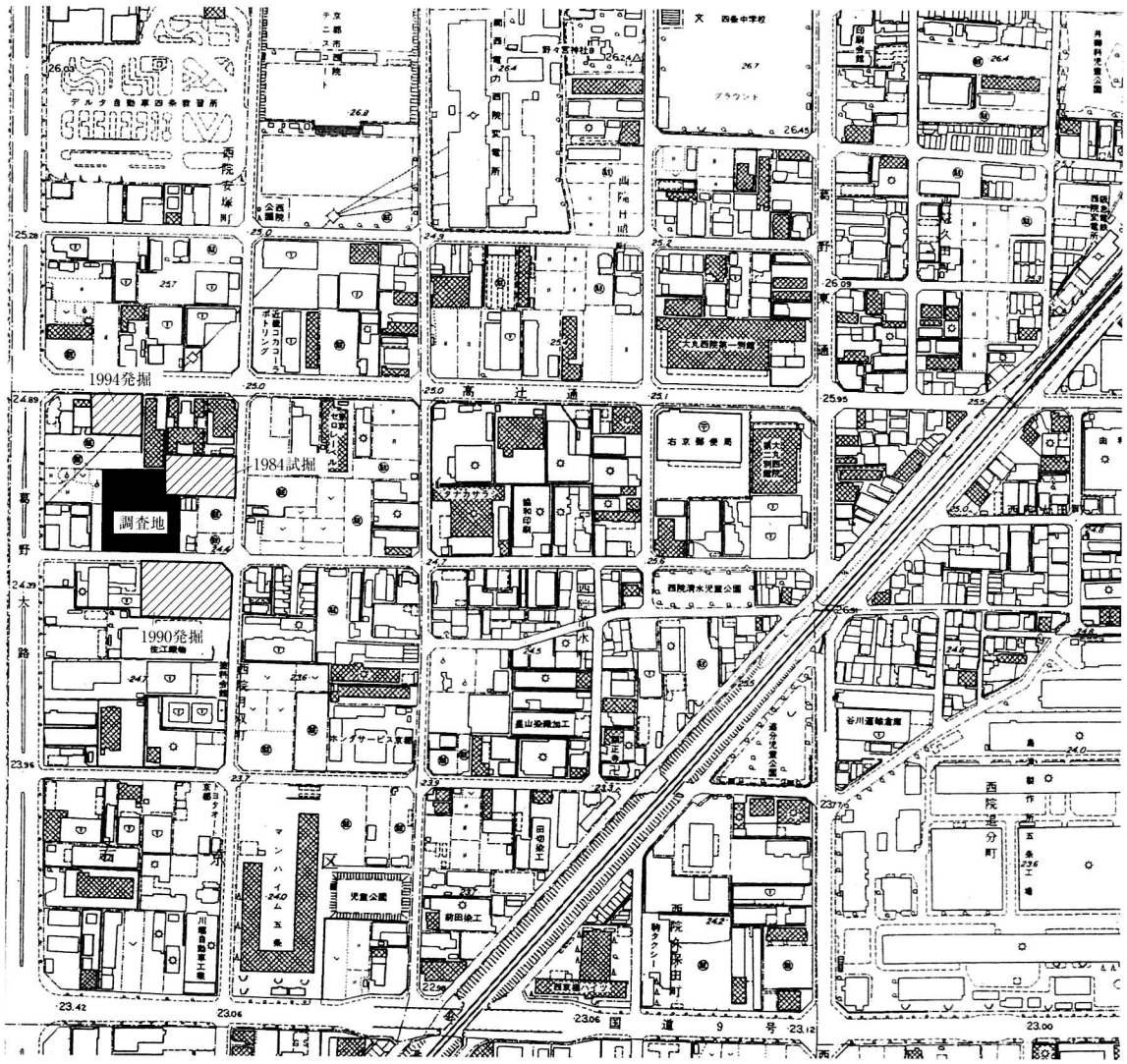


図2　調査地位置図(1/5,000)

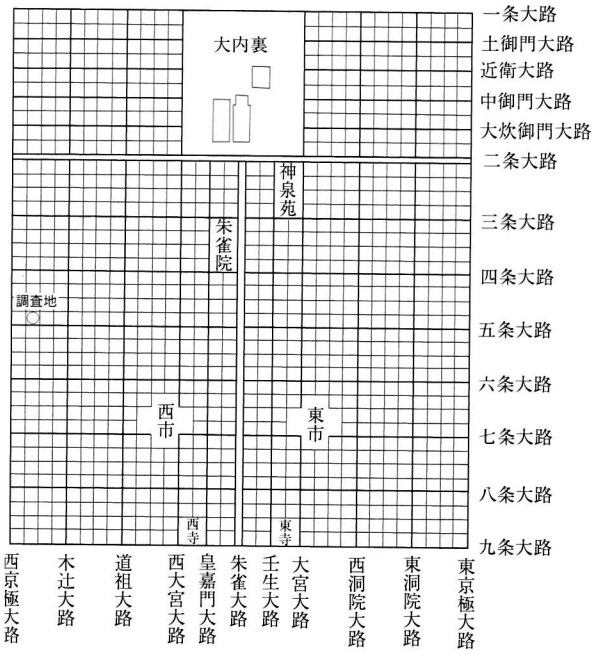


図3　平安京条坊と調査地位置図

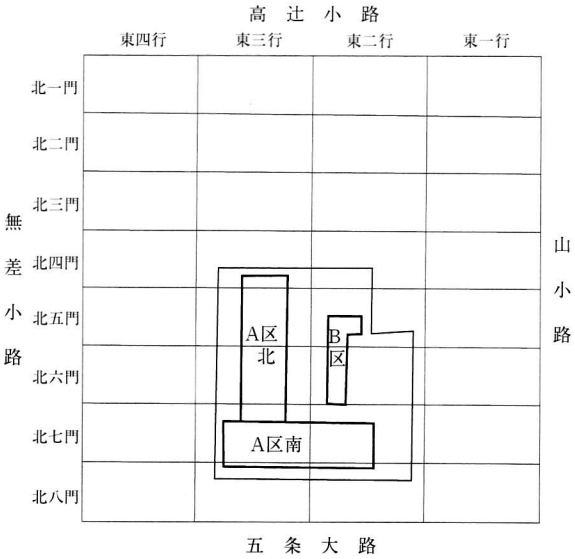


図4　四行八門と調査位置関係図(1/2,000)

たが、建物の基礎掘削深度を遺構面より浅く変更することにより現状保存となり、調査が未済のままとなっている。1990年には南側の道路を隔てた隣接地・右京六条四坊九町において発掘調査[註2]がおこなわれ、縄文時代後期の土器、弥生から古墳時代の住居跡、平安時代の五条大路の路面と南側溝、轍跡などを検出している。1994年には、同じ十二町内の北隣接地で発掘調査[註3]がおこなわれ、弥生時代後期の竪穴住居跡や方形周溝墓と共に奈良時代の建物跡群を検出したとされている。これまで西京極遺跡では10カ所以上の発掘調査がおこなわれ、弥生から古墳時代の集落跡がきわめて高密度で検出され、太秦地域の拠点集落としての実態が徐々に明らかになりつつある。

今回の調査においては、A区、B区2カ所の調査区を設定し、A区を北半と南半に分け、反転して調査をおこない、それぞれA区北、A区南とした。実際の調査は2008年9月20日からA区北調査区より開始した。盛り土及び近現代の耕作土を機械力によって除去したのち調査に着手した。A区北は11月22日まで実施し、弥生中期から奈良時代前期の竪穴住居、溝、土壙、掘立柱跡など、奈良から平安時代の掘立柱建物、溝、土壙跡などを検出した。A区北の埋め戻しをおこなったのち、A区南及びB区の表土剥ぎを11月26日から開始し、両区とも同時に調査に着手した。A区南においては弥生中期から古墳時代の竪穴住居、溝、土壙、掘立柱跡など、奈良時代から平安時代の掘立柱建物、溝、土壙跡などを検出し、B区においては弥生から古墳時代の竪穴住居、土壙、掘立柱跡など、奈良から平安時代の掘立柱建物、溝、土壙跡などを検出した。A区南・B区の調査は2009年1月21日までおこなった。調査面積はA区北=461㎡、A区南=475㎡、B区=135㎡の合計1071㎡である。またA区南においては掘立柱建物跡の広がりを知るため11㎡の拡張区を設定し確認調査をおこなった。

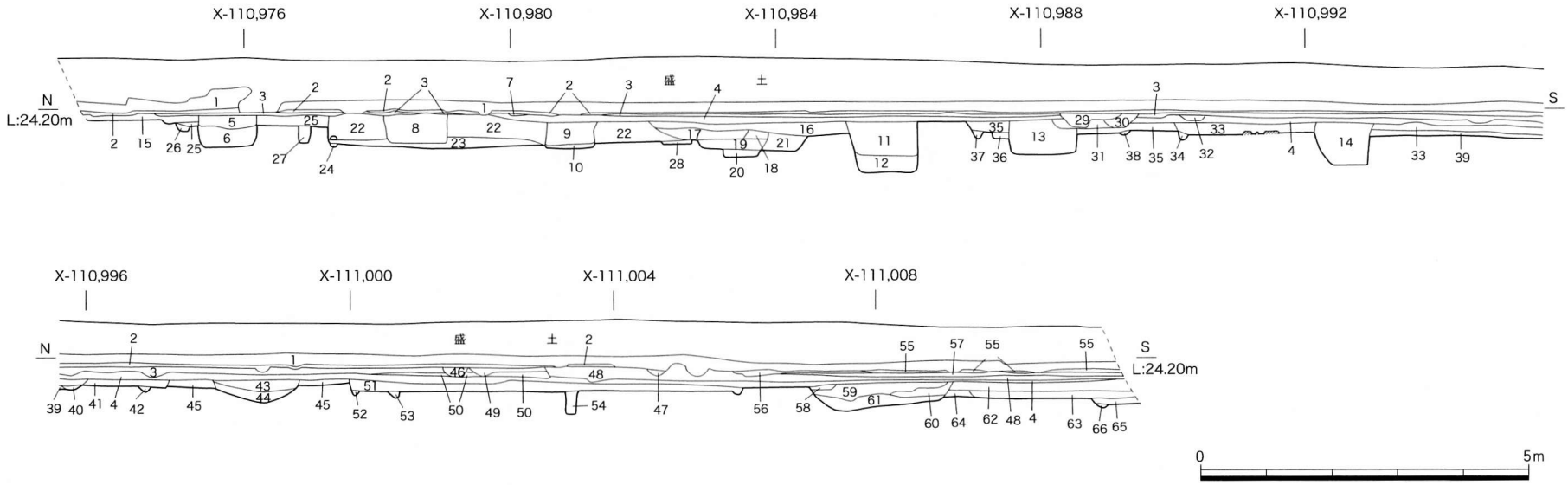
調査の方法としては、(財)京都市埋蔵文化財研究所が作成した平面直角座標系Ⅵによる平安京の復原モデル60を使用し、調査区の北東角を原点(X=－110,972m、Y=－25,480m)とする、東西方向にアラビア数字を南北方向にアルファベットを記号として付し、4mメッシュのグリッドを基本とする遺構遺物の記録をとる方法をおこなった。十二町における築地四隅の座標値(新測地系)は次のとおりである。なお、モデル60においては、造営尺=29.84708cm、造営の振れ=－0°14′03″の数値が与えられている。

北西	X=－110,918.30m	北東	X=－110,927.82m
	Y=－25,569.74m		Y=－25,450.35m
南西	X=－111,037.68m	南東	X=－111,037.20m
	Y=－25,569.25m		Y=－25,449.86m

註1 『昭和59年度 京都市内遺跡試掘立会調査報告』京都市文化観光局 1985

註2 『平安京右京六条四坊九町・五条大路』(研究報告第8集)京都文化博物館 1991

註3 「平安京右京五条四坊」(『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』)(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996



1 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥(耕土)
2 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
3 10YR5/2灰黄褐色砂泥(炭混)
4 2.5Y5/4黄褐色砂泥(炭混)
5 2.5Y6/1黄灰色砂泥(炭混)(柱穴178)
6 2.5Y6/2灰黄色砂泥(炭混)(柱穴178)
7 2.5Y5/3黄褐色砂泥(炭混)
8 2.5Y5/1黄灰色砂泥(炭混)(柱穴174)
9 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥(炭混)(柱穴202)
10 2.5Y5/1黄灰色砂泥(柱穴202)
11 2.5Y5/3黄褐色砂泥(炭混)(柱穴287)
12 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥(柱穴287)
13 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥(炭混)(柱穴13)
14 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥(炭混)(土壙381)
15 2.5Y5/4黄褐色砂泥
16 2.5Y5/4黄褐色砂泥(炭混)
17 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥(炭混)(溝179)
18 2.5Y5/1黄灰色砂泥(炭混)(溝179)
19 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥(炭混)(溝179)
20 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥(炭混)(溝179)
21 2.5Y5/6黄褐色砂泥(炭混)
22 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥(炭混)(竪穴171)
23 10YR4/6褐色砂泥
24 10YR4/6褐色砂泥
25 2.5Y6/4にぶい黄色砂泥(竪穴172)
26 2.5Y5/3黄褐色砂泥
27 2.5Y5/4黄褐色砂泥
28 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥(炭混)
29 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥(炭・φ1～3cmの礫少量混)
30 2.5Y5/1黄灰色砂泥(炭混)
31 2.5Y5/3黄褐色砂泥(炭混)
32 2.5Y6/1黄灰色砂泥(炭混)
33 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥(炭混)(竪穴33)
34 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥(炭混)
35 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥(炭混)(竪穴314)
36 2.5Y5/4黄褐色砂泥(炭混)(竪穴315)
37 2.5Y5/3黄褐色砂泥(炭混)
38 2.5Y5/1黄灰色砂泥
39 10YR3/2暗褐色砂泥
40 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
41 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥(竪穴322)
42 2.5Y5/3黄褐色砂泥
43 2.5Y5/3黄褐色砂泥(炭混)(溝320)
44 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥(炭混)(溝320)
45 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥(炭混)
46 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥(炭混)
47 2.5Y5/3黄褐色砂泥
48 2.5Y6/2灰黄色砂泥(炭混)
49 2.5Y5/3黄褐色砂泥(炭混)
50 2.5Y5/1黄灰色砂泥(炭混)
51 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥(炭混)(竪穴345)
52 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
53 2.5Y5/3黄褐色砂泥(竪穴366)
54 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
55 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥
56 2.5Y6/3にぶい黄色砂泥(粘質)
57 7.5YR5/6明褐色砂泥
58 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥(炭混)(溝332)
59 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥(炭混)(溝332)
60 2.5Y5/3黄褐色砂泥(炭混)(溝332)
61 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥(溝332)
62 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
63 10YR4/4褐色砂泥(竪穴730)
64 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
65 10YR3/2暗褐色砂泥(竪穴777)
66 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥

図5　A区北　東壁断面実測図(1/100)

Ⅱ　遺　跡

調査地は北から南に緩やかな傾斜をもち、A 区北調査区北端部の地表面の標高 24.9m、A 区南調査区の南端部で標高 24.4m を測り、およそ 0.5m の比高差をもっている。基本層序は、敷地全体に厚さ 0.5 ～ 0.7m 程の盛土があり、その下に近現代の耕作土が北端で 0.2m、南にかけて中世以降の耕作土が加わり、南端で 0.5m の厚さとなる。A 区北端部では近現代の耕作土を除去した直下標高 24.0m で平安時代の遺構を、南端部では中世以降の耕作土を除去した標高 23.6m 程で平安時代の遺構を検出した。A 区南調査区の南西端部及び B 区調査区の北東部においては一段地形が下がる。耕作に伴う改変によるものと考えられる。

遺構には縄文時代後期から中世のものがあり、遺構の総数は 925 基を数える。それらの内、大半のものが弥生時代後期から平安時代前期のもので、遺構としては、竪穴住居、掘立柱、溝、土壙跡などがある。

1　A 区の遺構

縄文時代

A 区南の弥生時代のベースである黄褐色砂泥層から縄文時代後期の遺物が出土した。平安時代の掘立柱跡を断ち割り時に比較的まとまって出土し、以後注意深く各遺構断面等を観察した結果、A 区南調査区全体で 9 地点（図版 6）から縄文土器を検出した。出土した土器はいずれも磨消縄文土器で、縄文時代後期初頭の中津式土器に比定される[註1]。各縄文土器が出土した標高は 23.19 ～ 23.57m のばらつきがあり、当初土器群が遺構に伴うものかどうか判断できなかったが、B 区において同時期の埋甕遺構を検出し、西京極遺跡における縄文時代後期の遺構の存在が初めて明らかとなった。9 地点における出土は包含層に伴うものとみられるが、西京極遺跡において今後留意すべき問題として取り組む必要がある。なお、南隣接地の調査[註2]においては縄文時代晩期の遺物を含む土壙を検出しており、また縄文時代後期とみられる土器片が包含層や耕作土などから出土している。

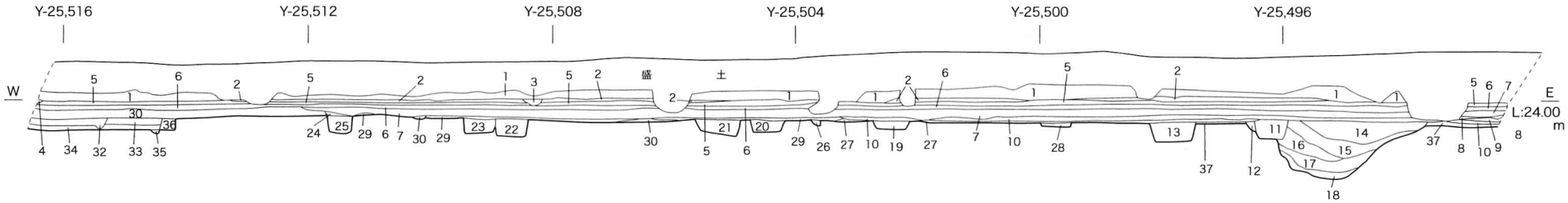
弥生時代中期から古墳時代前期

落ち込み 414（図 7・8・図版 45 の 8）

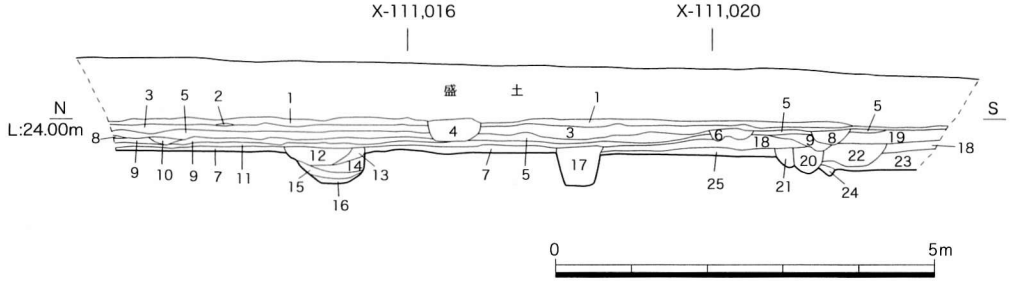
A 区北竪穴住居跡 350 の下層で検出したものである。長径 4m、短径 2.5m、深さ 0.5m の平面楕円形の掘形をもち、堆積土は 6 層程に分層できるが、第 1・2 層に多く遺物を含む。堆積土はレンズ状の堆積を為し、自然の湿地状を呈する。

溝 841（図版 7・40・46 の 2）

A 区南の東半部に位置する。北東から南東に蛇行する大溝である。幅 2.1 ～ 3.4m、深さ 0.6m 程の規模をもつ。掘形は U 字形を呈する。溝底の高低差は全域にわたってほとんど認められな



1 2.5Y5/3黄褐色砂泥(耕土)
2 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥
3 2.5Y5/4黄褐色砂泥
4 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥
5 2.5Y5/3黄褐色砂泥(炭鉄分混)
6 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂(マンガン混)
7 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥(炭・マンガン混)
8 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥(炭混)
9 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥(マンガン混)
10 7.5YR4/4褐色砂泥(マンガン混)
11 10YR3/4暗褐色砂泥(炭・焼土混)(柱穴839)
12 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥(炭混)(柱穴817)
13 7.5YR5/4にぶい褐色砂泥(炭・焼土混)(柱穴659)
14 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(焼土混)(溝841)
15 10YR4/4褐色砂泥(炭混)(溝841)
16 10YR4/4褐色砂泥(炭多量混)(溝841)
17 10YR3/3暗褐色砂泥(やや粘質・炭混)(溝841)
18 10YR5/6黄褐色砂泥(粘質)(溝841)
19 7.5YR4/4褐色(炭・焼土混)(柱穴794)
20 10YR4/4褐色砂泥(炭・焼土混)(柱穴793)
21 10YR4/6褐色砂泥(炭・焼土混)(柱穴792)
22 10YR4/6褐色砂泥(炭・焼土混)(柱穴631)
23 10YR4/4褐色砂泥(柱穴632)
24 10YR3/4暗褐色砂泥(マンガン混)(柱穴622)
25 10YR4/2灰黄褐色砂泥(柱穴622)
26 10YR4/6褐色砂泥
27 10YR4/6褐色砂泥
28 7.5YR4/4褐色砂泥(炭・焼土混)(柱穴740)
29 10YR3/4暗褐色砂泥
30 7.5YR3/4暗褐色砂泥
31 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
32 10YR4/4褐色砂泥(竪穴730)
33 7.5YR4/3褐色砂泥(焼土混)(竪穴777)
34 10YR3/2黒褐色砂泥
35 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
36 10YR4/4褐色砂泥
37 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥(炭・マンガン混)



1 2.5Y5/3黄褐色砂泥(炭・鉄分混)
2 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
3 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥(マンガン混)
4 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(炭混)
5 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥(炭・マンガン混)
6 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥(炭混)
7 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥(炭・マンガン混)(竪穴840)
8 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥(炭混)
9 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥(マンガン混)
10 2.5Y5/3黄褐色砂泥
11 7.5YR4/4褐色砂泥(マンガン混)
12 10YR4/6褐色砂泥(溝795)
13 10YR5/6黄褐色砂泥(溝795)
14 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥(炭混)(溝795)
15 10YR4/6褐色砂泥(溝795)
16 10YR4/4褐色砂泥(マンガン混)(溝795)
17 10YR4/6褐色砂泥(炭混)(溝534)
18 7.5YR4/4褐色砂泥(炭・マンガン混)
19 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
20 7.5YR4/4褐色砂泥(炭混)
21 10YR4/4褐色砂泥
22 10YR4/6褐色砂泥(炭混)
23 7.5YR4/4褐色砂泥(竪穴751)
24 10YR4/4褐色砂泥
25 10YR4/4褐色砂泥(炭混)(竪穴840)

図6　A区南　北壁(東部)・東壁断面実測図(1/100)

いが、北端部でのみ 0.25m 程低くなっている。溝の屈曲部西側の北岸付近において多量の土器類が集積した状態で出土した。溝の堆積土は 5 ～ 6 層に分かれ、第 3 層から多くの土器類が出土したが、それより下層及び溝底では遺物の出土量がきわめて少ない。

土壙 180（図版 2・4・35）

A 区北の北東隅部近くに位置し、竪穴住居 172 に切られる。長辺 2.1m、短辺 1.6m の方形を呈し、深さ 0.45m を測る。底部は平坦である。埋土は 3 層に分層でき、ほぼ水平堆積を呈する。長軸が北に対して西へ 45° 程の振れをもつ。

土壙 713（図 9・図版 2・6・39 の 1）

A 区南の西部に位置する。東西長 1.3m、南北長 0.95m の方形を呈し、深さ 0.2m を測る。掘形側面が焼けて赤色化しており、底には厚さ 0.05m 程の炭層が堆積する。土壙内からは少量の土器が出土したのみで、性格は不明である。

竪穴住居 172（図版 2・4・11・35 の 2）

A 区北の北東端近く、東壁沿いに位置する。南部を竪穴住居 171 に削平を受ける。一辺 3m 以上の方形を呈し、東側が調査区外となり全形を知り得ない。北に対して東へ 45° の振れをもつ。検出面より床面までの深さ 0.15m を測り、壁溝が巡る。壁溝は床面で幅 0.2m、深さ 0.1m 弱を測る。主柱穴を 1 カ所検出した。主柱穴 264 の柱根跡は径 0.18m、深さ 0.26m を測り、径 0.38m の掘形は断ち割りにおいて確認した。

竪穴住居 171（図版 2・4・11・35・43 の 6）

A 区北の北東部、竪穴住居 172 の南部を切り込んで成立する。古墳時代の溝 179 に南辺上部を削られる。東側は調査区外となり、竪穴住居 172 と雁行形を為している。確認できた一辺は 4.5m 程で、隅丸方形を呈する。検出面より床面までの深さ 0.4m あり、壁溝が巡る。南端では壁より 0.15m 内側に溝を掘る。壁溝は床面で幅 0.15m、深さ 0.05m を測る。主柱穴 203 を 1 カ所検出した。径 0.38m 程の円形の掘形をもち、柱根跡は径 0.14m、長さ 0.8m を測り、先にいく程細

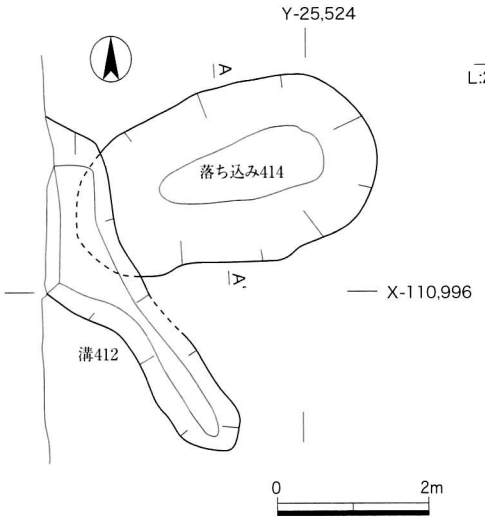


図7　A区北　溝412・落ち込み414実測図(1/100)

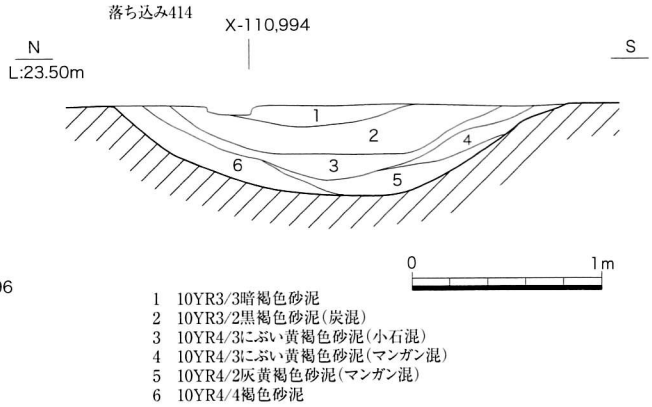


図8　A区北　落ち込み414断面実測図(1/40)

くなる杭状を呈する。床面より 0.1m 程浮いたところで数箇所土器が集中して出土した。いずれも完形に近い個体が土圧により押しつぶされた状況を呈する。

竪穴住居 176（図版 2・4・35・43 の 8）

A 区北の北西隅部に位置する。北及び西側は調査区外となり全形を知り得ない。近代以降の建物基礎により大半が削平されていたが、部分的に床面までの深さ 0.3m を確認した。壁溝検出部はほぼ床面まで削平を受けていたが、壁溝の幅 0.15m、深さ 0.05 ～ 0.1m を測り、方形を呈する。主柱穴を 1 カ所検出した。主柱穴 265 は径 0.35m の円形の掘形をもち、柱根跡は径 0.15m、深さ 0.3m を測る。住居跡の中央部を北西から南東部方向に古墳時代後期の溝 179 が切り込む。

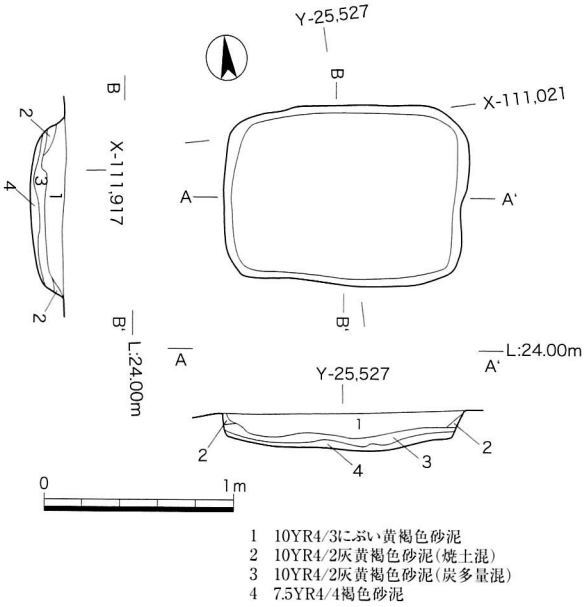


図9　A区南　土壙713実測図（1/40）

竪穴住居 306（図版 2・4・43 の 8）

竪穴住居 176 の壁溝の外側に 0.3 ～ 0.4m 離れたところで一部壁溝のみを検出した。竪穴住居 176 と重複し、住居跡のコーナー部のみを 1 カ所検出した。方形を呈し、床面までの深さ 0.1m で、壁溝の幅 0.15m、深さ 0.1m を測る。

竪穴住居 816（図版 2・6・12・39 の 1・43 の 4）

A 区南西端部に位置する。西半部が調査区外となる。竪穴住居 711 に重複する。床面までの深さ 0.14m、壁溝は幅 0.12 ～ 0.2m、深さ 0.05m を測る。主柱穴 820 は径 0.25m の掘形をもち、柱根跡は径 0.13m、深さ 0.3m を測る。掘形は断ち割りにおいて確認した。

竪穴住居 711（図版 2・6・12・39 の 1・43 の 5）

竪穴住居 816 に重複する。壁溝のみ検出した。壁溝は幅 0.2m、深さ 0.05 ～ 0.15m を測る。方形を呈する。主柱穴を 1 カ所検出した。主柱穴 725 は径 0.3m の掘形をもち、柱根跡は径 0.14m、深さ 0.24m を測る。南辺部の壁溝に沿って焼土を含む浅い落ち込みを検出した。一辺 0.5 ～ 0.7m の方形で、深さ 0.14m 程を測る。底部は平坦で焼土を多く含む。

竪穴住居 712（図版 2・6・11・39 の 1・43 の 1 ～ 3）

A 区南の南西隅部に位置する。西及び南側が調査区外となる。床面まで深さ 0.08m を測る。床面全体に焼土、炭、炭化材が散乱し、焼失住居の状況を呈する。壁溝は幅 0.15 ～ 0.2m、深さ 0.15m を測る。北に対して西へ 10° 程の振れをもつ。北側の壁溝内に壁柱を 3 カ所検出した。その内 2 基は原位置に立ったまま炭化した状態で出土した。壁柱は径 0.04m、残存高 0.15m を測る。主柱穴（752、753）は 2 カ所確認した。いずれも径 0.25 ～ 0.3m の掘形をもち、柱根跡は径 0.2m、深さ 0.3m 程を測る。

古墳時代中期から古墳時代後期

竪穴住居 830（図版 2・6・12・43 の 7）

A 区北と南の境界付近に位置する。竪穴住居 303 に切られる。長辺 4.2m、短辺 3.6m の方形を呈し、ほぼ北に軸をもつ。床面までの深さ 0.03 ～ 0.08m、壁溝は幅 0.14m、深さ 0.08m を測る。主柱穴（831 ～ 834）を 4 カ所検出した。いずれも径 0.3m 前後の掘形をもち、柱根跡は径 0.15m、深さ 0.3 ～ 0.4m を測る。土壙 426 はこの住居に付随する施設である可能性がある。

竪穴住居 260（図版 2・4・14・35・44 の 1・47 の 1 と 2）

A 区北の北半中央部に位置する。長辺 7.6m、短辺 6m の方形の大型住居である。北に対して西へ 45° の振れをもつ。床面までの深さ最大 0.28m を測る。床面での壁溝の幅 0.15m、深さ 0.1m 程を測る。主柱穴は 1 カ所検出した。主柱穴 288 は径 0.4m の掘形をもち、柱根跡径 0.17m、深さ 0.2m を測る。中央部（396）及び北西部の壁溝に沿って 2 カ所（285、398）焼土の集積がある。カマド 285 は移動式の竈を据えた痕跡と考えられる。焼土 396 のそばに土壙 305 がある。長軸 0.85m、短軸 0.63m の方形を呈し、深さ 0.32m を測る。底部は平坦で、貯蔵穴とみられる。床面の 1 カ所から臼玉が 5 個体出土した。西側コーナーの外側に壁溝の痕跡を検出した。竪穴住居 260 の壁溝と重複する状況から判断して、住居跡の作り替えがあったことを示す。

竪穴住居 402（図版 13・44 の 2）

竪穴住居 260 下層において検出した。長辺 4.5 ～ 5.5m、短辺 4.3m を測り、北コーナー部がやや張り出す。壁溝は幅 0.15m、深さ 0.05m を測る。主柱穴は 4 カ所検出した。主柱穴 406・409・419 は径 0.3m の掘形をもち、柱根跡は径 0.15m、深さ 0.15m を測る。407 は径 0.5m、柱根跡 0.17m、深さ 0.25m を測る。北西部の壁溝に沿って焼土塊（403）を検出した。作り付けのカマドが破壊された様な状況を呈し、非常に堅い焼土塊と地山が赤変しているのが認められた。この住居跡を包むように溝 413 を検出した。幅 0.3m、深さ 0.1m 程を測る。性格は不明である。

竪穴住居 304（図版 2・4・16・35・44 の 3・47 の 4）

A 区北の中央部に位置し、一部が調査区の東壁外となる。長辺 5.7m、短辺 4.5m で北東部がやや開き気味になる。床面までの深さ 0.1 ～ 0.2m で、壁溝は幅 0.18m、深さ 0.05m を測る。床面全体に炭化物の広がりが認められ、一部炭化材が残存する。主柱穴は 3 カ所（367、378、382）検出した。柱穴 382 は炭化した柱根が原位置を保った状態で出土した。径 0.35m の掘形をもち、柱根は径 0.15m、深さ 0.1m を測る。柱穴 367 は径 0.38m の掘形をもち、柱根跡は径 0.15m、深さ 0.47m、柱穴 378 は径 0.4m の掘形をもち、柱根跡は径 0.15m、深さ 0.32m を測る。北西部の壁溝に沿って焼土の広がりがある。住居跡の西隅部で長軸 0.4m、短軸 0.25m の平滑な平坦面をもつ川原石 1 個体を検出した。この竪穴住居の北側に壁溝のみを検出した竪穴住居 314・315 がある。平安時代の柱穴により大半が削平を受けている。

竪穴住居 322（図版 2・4・17・35 の 1・44 の 3）

竪穴住居 304 の南に位置し、切り合い関係にある。半円形の壁溝を検出した。復原径 3.7m 程を測る。床面までの深さ 0.1m、壁溝は幅 0.15 ～ 0.25m、深さ 0.08m を測る。主柱穴を 2 カ所検

出した。柱穴 353 は径 0.15m、深さ 0.15m、柱穴 368 は径 0.48m の掘形をもち、柱根跡 0.15m、深さ 0.27m を測る。

竪穴住居 352（図版 2・4・17・35 の 1・44 の 3）

竪穴住居 304 の西に位置し、切り合い関係にある。長辺 3m 以上、短辺 2.3m を測る。床面までの深さ 0.12m で、壁溝は幅 0.15 ～ 0.23m、深さ 0.06m を測る。床面で 2 カ所の柱穴（294、390）を検出した。いずれも径 0.45m の掘形をもち、柱根跡は径 0.15m、深さ 0.2m 程を測る。

竪穴住居 333（図版 2・4・15・35 の 1）

A 区北の中央部西寄りに位置する。溝 317 及び竪穴住居 350 などにより大半が削平を受けている。長辺 5.3m、短辺 3m 以上の長方形を呈する。部分的に床面まで 0.1m 残存する。壁溝は幅 0.15m、深さ 0.07m を測る。主柱穴 388 は径 0.35m の掘形をもち、柱根跡は径 0.13m、深さ 0.2m を測る。短軸の北東面の側溝に沿って焼土 399 の広がりが認められる。

竪穴住居 350（図版 2・4・17・35 の 1）

A 区北の中央部西壁沿いに位置する。竪穴住居 333・346 と切り合い関係にある。一辺 3.5 ～ 4m の方形を呈する。床面までの深さ 0.15m、壁溝の幅 0.16m、深さ 0.1m を測る。主柱穴は 3 カ所検出した。柱穴 383・387 は径 0.2m、深さ 0.09m、柱穴 386 は径 0.45m の掘形をもち、柱根跡 0.2m、深さ 0.25m を測る。

竪穴住居 346（図版 2・4・15・34 の 2・35 の 1）

竪穴住居 350 の南に位置し、切り合い関係にある。一辺 4m 弱の方形を呈する。壁溝のみ残存する。壁溝は幅 0.15 ～ 0.2m、深さ 0.05m を測る。北東辺の壁溝において壁柱を 2 カ所検出した。主柱穴 394 は径 0.35m の掘形をもち、柱根跡 0.15m、深さ 0.1m を測る。1 カ所焼土の広がりを認めた。

竪穴住居 345（図版 2・4・19・35 の 1・44 の 4）

A 区北の南部東壁沿いに位置する。竪穴住居 366 と重複する。楕円形状を呈する。床面までの深さ 0.1 ～ 0.15m、壁溝は幅 0.12m、深さ 0.08m を測る。主柱穴 422 は径 0.2m、深さ 0.18m を測る。東半部は調査区外となる。

竪穴住居 366（図版 2・4・19・35 の 1・44 の 4）

竪穴住居 345 の床面で壁溝のみ検出した。壁溝の幅 0.15 ～ 2m、深さ 0.1m を測る。柱穴 364 は径 0.25m、柱根跡は径 0.1m、深さ 0.24m を測る。

竪穴住居 303（図版 2・4・18・34 の 2・35 の 1・44 の 5・46 の 6・47 の 5）

A 区北の南部に位置する。長辺 4.2m、短辺 2.8 ～ 3m の長方形を呈する。長軸が北に対して東へ 30 ～ 40° の振れをもつ。床面までの深さ 0.08m、壁溝は幅 0.18m、深さ 0.05 ～ 0.12m を測る。主柱穴を 3 カ所（312、420、421）検出した。柱穴はいずれも径 0.35m 程の掘形をもち、柱根跡は径 0.2m、深さ 0.3 ～ 0.35m を測る。北西の壁溝中央部に沿って焼土の高まりがあるが、粘土による竈を築成した状況を認めることはできなかった。焼土混じりの高まりを除去したところ、支柱石が原位置を保った状態で検出した。支柱石を中心として床面が赤変しており、竈があったこ

とを示す。東隅部近くの床面において滑石製の紡錘車を1個体検出した。北東及び北西部の壁溝の外側に重複する様な掘り込みがあるが、壁溝等は検出できなかった。

竪穴住居316（図版2・4・18・34の2・35の1）

竪穴住居303の北側に位置し、切り合い関係にある。一辺4.3m程の方形を呈する。北に対してやや西に振れる。床面までの深さ0.04m弱残存する。壁溝は幅0.14m、深さ0.04～0.08mを測る。主柱穴401を1カ所検出した。径0.32mの掘形をもち、柱根跡は径0.17m、深さ0.25mを測る。西側に1カ所焼土が認められる。

竪穴住居339（図版2・4・19・35の1・44の6）

A区北の中央部西壁沿いに位置する。新旧の作り替えが認められる。旧期は南北長3.1m、東西長1.1m以上の方形で、西部の大半が調査区外となる。新期の住居跡は南部を0.6m程縮小する。ほぼ北に軸をもつ。床面までの深さ0.15m、壁溝は幅0.15m、深さ0.1mを測る。主柱穴は都合3カ所検出した。いずれも径0.2m前後、深さ0.05～0.1mを測る。床面において須恵器杯の完形品が出土した。北側の壁溝沿いに1カ所焼土が認められる。

竪穴住居796（図版2・6・19・39・44の7）

A区北と南の境界辺りに位置する。東部が調査区外となり、方形を呈し一辺3.9mを確認した。床面までの深さ0.1～0.15m、壁溝は幅0.15m、深さ0.06mを測る。主柱穴（814、815）を2カ所検出した。いずれも径0.44mの掘形をもち、柱根跡は径0.17m、深さ0.6mを測る。北東部の壁溝近くに焼土の分布が認められる。

竪穴住居777（図版2・6・20・39・44の8・46の4・47の3）

竪穴住居730の南半部を切り込んで成立する。長辺4.2m、短辺3.5mを測る。長軸が北に対して西へ40°の振れをもつ。床面までの深さ0.15m、壁溝の幅0.14m、深さ0.08mを測る。床面全体に厚さ0.06～0.09mの貼床を施す。主柱穴（798、799、809）は3基検出した。いずれも径0.3～0.35mの掘形をもち、柱根跡は径0.2m、深さ0.32～0.36mを測る。北東部の壁溝に沿って焼土の集積が認められ、焼土塊が集中する部分を慎重に残して精査したが、馬蹄形には検出したものの、粘土による築成は認ることができなかった。すべて床面まで除去したところ床面が熱を受けて赤変した状況を認めた。南東部の壁溝上で完形品の土器類が数点出土した。いずれも壁溝埋土より上層（住居内埋土第2層）に位置する。

竪穴住居806（図版2・6・20・39）

竪穴住居777の東南部に接して位置する。一辺3.4m以上で、方形となろう。壁溝のみ検出した。壁溝は幅0.16m、深さ0.04mを測る。北隅部に焼土の分布を認めた。

竪穴住居730（図版2・6・20・39・45の1）

竪穴住居777の北部を切り込み、竪穴住居796に重複する位置関係にある。一辺2.7～3.2mの方形を呈する。床面までの深さ0.12m、壁溝の幅0.12m、深さ0.05mを測る。主柱穴（731、732、733）は3カ所検出した。いずれも径0.3mの掘形をもち、柱根跡は径0.18m、深さ0.34～0.39mを測る。

竪穴住居 788（図版 2・6・21・38 の 1・39 の 2・45 の 2）

A 区南の中央部に位置する。長辺 5.1m、短辺 3.1 ～ 3.3m を測り、やや歪んだ長方形を呈する。長軸が北に対して東へ 45° の振れをもつ。床面までの深さ 0.1m で、厚さ 0.05m 程の貼床を施す。壁溝は幅 0.13m、深さ 0.1m を測る。主柱穴（782、811、810）は 3 カ所検出した。いずれも径 0.25m の掘形をもち、柱根跡は径 0.15m、深さ 0.25 ～ 0.32m を測る。北西の長軸の壁溝に沿って焼土が分布し、その東側に炭化物の広がりを認めた。南半中央部の床面に土器溜まりを検出した。貼床を除去したところ不定形な浅い落ち込み 838 を検出した。長さ 4.4m、幅 1.8m、深さ 0.1m を測る。

竪穴住居 802（図版 2・6・21・38 の 1・45 の 3）

竪穴住居 788 の北東部に位置する。壁溝のみ検出した。北半部が調査区外となる。確認できた一辺 4m を測り、方形を呈する。壁溝は幅 0.15m、深さ 0.05m を測る。主柱穴を 1 基検出した。

竪穴住居 743（図版 2・6・22・38・45 の 4）

A 区南の南東隅部に位置する。長辺 3.5m 以上、短辺 2.9m を測り、長方形を呈する。長軸が北に対して西へ 30° の振れをもつ。床面までの深さ 0.2m、壁溝の幅 0.12m、深さ 0.06m を測る。主柱穴（744、745）を 2 カ所検出した。いずれも径 0.4m の掘形をもち、柱根跡の径 0.18m、深さ 0.35m を測る。南東部の壁溝に沿って 0.1m 程の焼土混じりの高まりを認めた。それを除去したところ床面が径 0.2m の範囲で赤変しているのを確認した。また柱穴 744 の南側において焼土及び鉄製品を検出した。

竪穴住居 746（図版 2・6・22・38・45 の 5・47 の 6）

竪穴住居 743 の西側に位置し、壁溝の一部が切られている。南半部が調査区外となる。確認できた一辺 3.5m を測る。やや東に軸が振れる。床面までの深さ 0.12m、壁溝の幅 0.15m、深さ 0.08m を測る。主柱穴（754、755）は 2 カ所検出した。径 0.28m の掘形をもち、柱根跡は径 0.15 ～ 0.18m、深さ 0.3m を測る。西側の壁溝に沿って焼土混じりの高まりがある。焼土を除去したところ竪穴住居 743 と同様に径 0.25m の範囲で床面が赤変しているのを確認した。いずれもカマドをおいた跡と考えられる。

竪穴住居 750（図版 2・6・23・38・45 の 6）

竪穴住居 746 の北側に位置する。長辺 4.8m 前後、短 3.4m を測り、長方形を呈する。長軸が北に対して東へ 20° の振れをもつ。床面までの深さ 0.13m、壁溝の幅 0.15m、深さ 0.08m を測る。主柱穴（767、768）は 2 基検出した。径 0.3m の掘形をもち、柱根跡の径 0.18m、深さ 0.25 ～ 0.3m を測る。北東隅部に焼土混じりの 0.1m 程の高まりが残存する。南半部にも一部焼土の広がりを認めた。北側の壁溝に沿って内側に壁溝の痕跡を検出した。東西幅 0.3m、南北は 1.7m 残存する。壁溝の幅 0.15 ～ 0.2m、深さ 0.05m を測る。壁溝の在り方からみて、竪穴住居 750 を作り替える前の住居跡と考えられる。

竪穴住居 840（図版 2・6・23・45 の 7）

A 区南の東端部に位置する。東半部が調査区外となる。床面までの深さ 0.02 ～ 0.1m を測る。

一辺3.2m以上の方形を呈する。壁溝は幅0.14m、深さ0.02mを測る。主柱穴700を1カ所検出した。柱穴は径0.25mの掘形をもち、柱根跡は径0.14m、深さ0.3mを測る。西側コーナー部ちかくに焼土の広がりと床面の赤変を確認した。

竪穴住居751（図版2・6・38）

竪穴住居840の南辺部に位置する。大半が調査区外となり、壁溝のみ1m弱確認した。床面までの深さ0.2m、壁溝は幅0.18m、深さ0.1mを測る。

土壙426（図10・図版2・4・6・37の1・39の1・47の7と8）

竪穴住居830の西半部、壁溝を掘り込んで成立する。平安時代の掘立柱柱穴により削平を受ける。長径2m、短径1.2m前後の楕円形に近い掘形をもち、深さは0.5mを測る。底面及び側壁面の一部が赤変する。また焼土塊と炭化物を北半部寄りで検出した。掘形内よりほぼ完形品の須恵器杯身と杯蓋が3セットと竈形土器の庇部の大形片が出土した。

溝179（図版2・4・35・43の8・46の3）

A区北の北端部に位置する。北東隅から南東方向のU字溝である。調査区を斜めに横切る。幅0.8～1.6m、深さ0.4mを測る。南端部付近において集中して土器類が出土した。

溝795（図版2・6・38・39）

A区南に位置する。調査区の東端から西端全域わたって弧を描くように東西調査区外にのびる。掘形は幅1m弱、深さ0.4m前後を測り、U字構である。溝底の標高は東端部で23.16m、西端部で23.13mを測る。南の屈曲する辺りで多くの土器類が集中して出土した。

溝317（図11・図版2・4・35の1）

A区北の中央部に位置する。調査区西壁外に延びる。北西から南東方向の溝である。幅0.65～0.9m、深さ0.25～0.35mを測り、長さ6m以上のU字構である。南端部で立ち上がる。竪穴住居350を切り込んで成立する。埋土の第1層より円筒埴輪片が出土している。

溝327（図11・図版2・4・34の2・35の1）

A区北の南部に位置し、調査区西壁外に延びる。北東から南西方向の溝である。長さ5m以上、幅1.3～1.6m、深さ0.45mを測る。U字構である。北端部で立ち上がる。竪穴住居346を切り込む。溝底より磨製石斧が1点出土している。

溝332（図11・図版2・4・34の2・35の1）

A区北の南部、東壁沿いに位置する。北西から南東方向の溝である。長さ7m以上、幅1.5m前後、深さ0.45mを測り、U字構である。北端部で立ち上がる。竪穴住居345を切り込む。

柵4（図版1・3・29・33の2）

A区北の北部に位置する。3間分検出した。座標北に対して西へ40°の振れをもつ。各柱間1.8mを測る。一辺0.5～0.6mの方形の掘形をもち、柱根跡は径0.23m、深さ0.5m前後を測る。

柵21（図12・図版1・3・29・33の2・46の7）

柵4の南1.5mに並行したところに位置する。各柱間3.3mを測る。一辺0.6mの方形にちかい掘形をもち、柱根跡は径0.25～0.3m、深さ0.45mを測る。柱穴256の掘形より土師器の台付壺

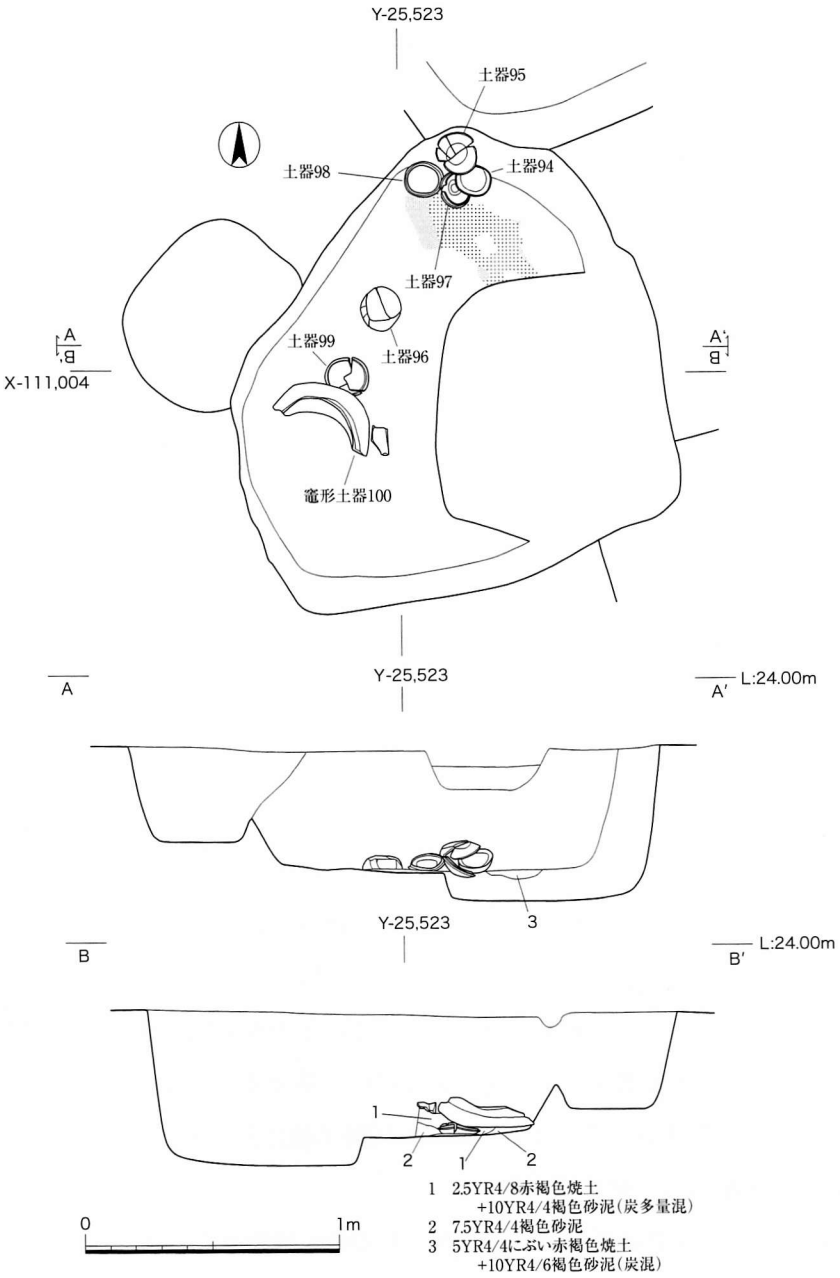


図10　A区北　土壙426実測図(1/30)

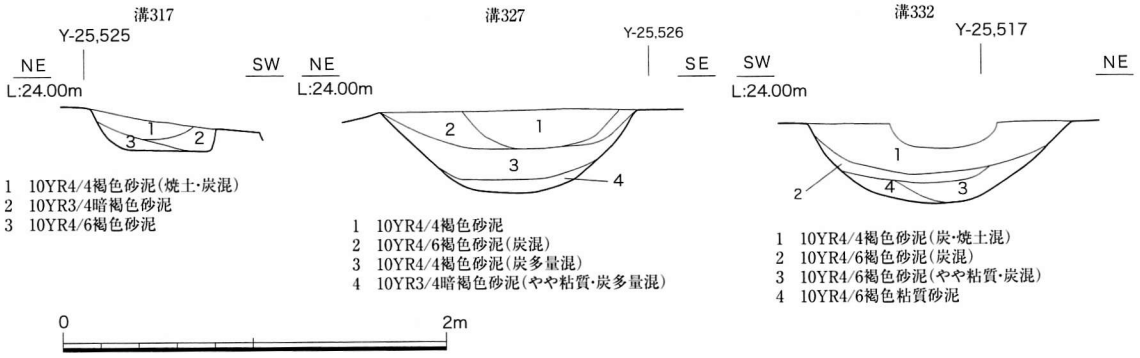


図11　A区北　溝317・327・332断面実測図(1/40)

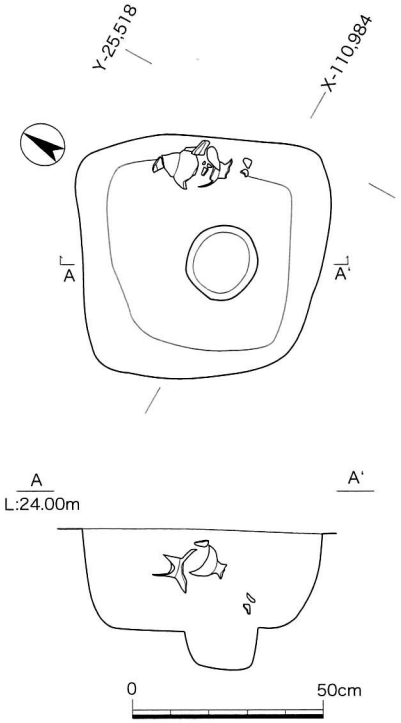


図12　A区北　柱穴256(柵21)実測図(1/20)

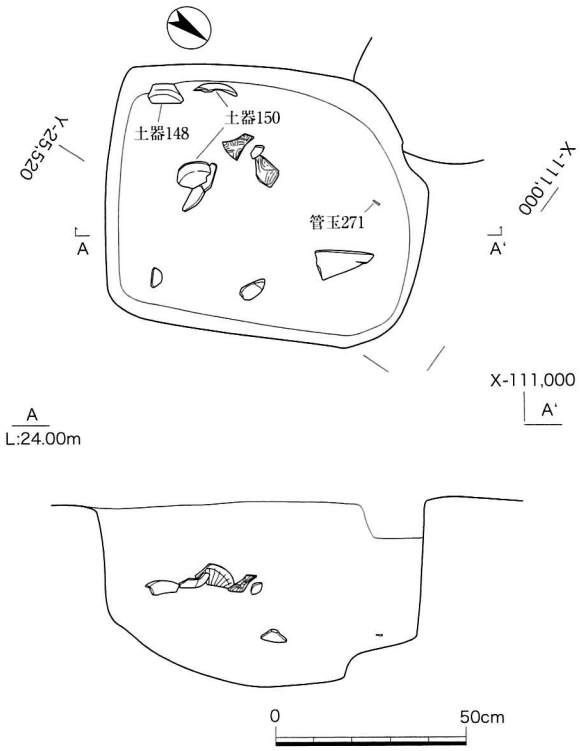


図13　A区北　柱穴119実測図(1/20)

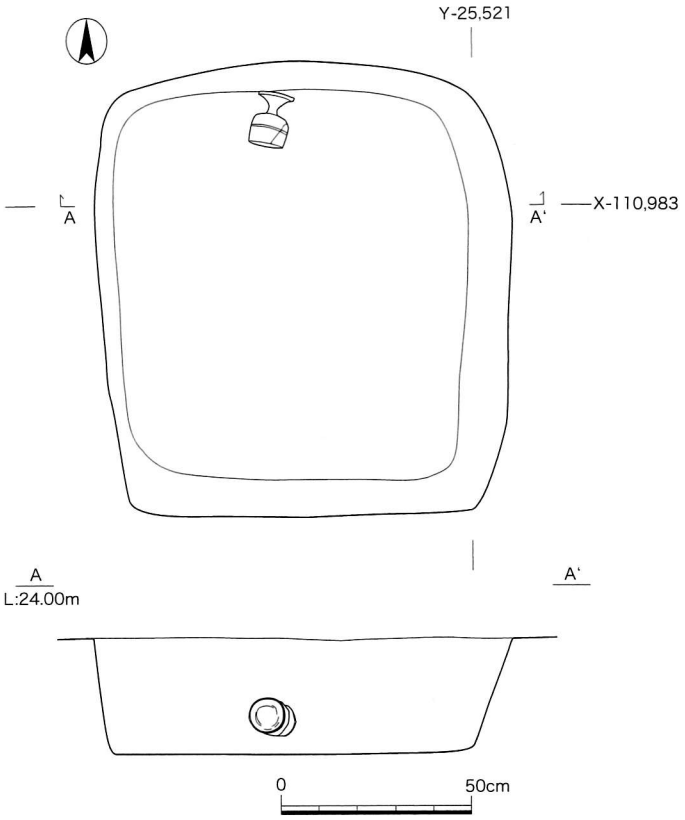


図14　A区北　柱穴266(建物3)実測図(1/20)

が1個体出土した。

柱穴119（図13・図版1・3・34・35の1・46の5）

A区北の南部に位置する。長辺0.8m、短辺0.65mの方形の掘形をもち、深さ0.5mを測る。長軸が座標北に対して西へ25°の振れをもち、柵4などと同様な振れをもつ。掘形より数点の土器類と共に管玉が1点出土している。掘形の底部に柱根跡が明瞭に残る。

建物19（図版1・5・36の1）

A区南の東部南半に位置する。柱穴は1間（1.8m）幅で、4間（11m）分検出した。一辺0.4～0.6mの方形を呈し、柱根跡は径0.2m、深さ0.2mを測る。柱間は北より3.5、2.8、4.6、2.0mを測る。軸線は座標北に対して西へ65°の振れをもつ。2列の柵とした方が妥当かも知れない。

奈良時代から平安時代

建物1（図版1・3・27・33の2）

A区北の北部に位置する。南北4間、東西2間分検出したが、建物の北及び西部が調査区外となり建物の全形は不明である。南北の柱間は9尺（2.7m）の等間、東西の1間目の柱間が11尺（3.3m）、2間目が8尺（2.4m）を測る。掘形は一辺0.6m前後の方形を呈し、深さ0.16～0.35m、柱根跡は径0.25mを測る。建物の軸線は座標の北に対して東へわずかな振れをもつ。

建物2（図版1・3・29・33の2）

建物1に重複したところに位置する。南北2間、東西1間分検出した。建物1と同じく北及び西部が調査区外となり全形を知り得ない。東西の柱間9尺（2.7m）、南北の柱間は11尺（3.3m）、15尺（4.5m）を測る。掘形は一辺0.8mの方形を呈し、深さ0.25mを測る。建物は座標北に対して東へ5°の振れをもつ。

建物3（図14・図版1・3・28・33の2・46の8・48の1～3）

A区北の北部に位置する。南北5間、東西2間分検出した。建物の東部は調査区外となる。北庇の柱間が9尺（2.7m）の他は桁行、梁間ともに8尺（2.4m）を測る。掘形は一辺1～1.2mの方形を呈し、深さ0.3m前後を測る。柱根跡は径0.4m程あり規模が大きい。北庇付き南北棟で、あるいは東庇が付く可能性がある。建物の軸線は座標北とほとんど一致する。柱穴266の掘形より須恵器の完形品が1個体出土した。古墳時代の台付杯で、下層の竪穴住居260の遺物が混入したものと考えられる。建物3は建物15と一体のものであろう。

建物5（図版1・3・33の2）

A区北の中央部に位置する。南北3間、東西2間以上の北庇付き東西棟である。建物の西側は調査区外となる。身舎及び庇の梁間は各7尺（2.1m）、桁行の柱間は10尺（3.0m）を測る。掘形は径0.6mの円形、一辺0.9mの方形のものなどが混在する。建物は座標北に対して西へ5°の振れをもつ。

建物6（図版1・3・30・33の2）

建物5と一部重複する。南北2間東西1間分検出した。建物の西側は調査区外となる。各柱間

は7尺(2.0～2.2m)前後を測る。掘形は径0.4～0.5m、深さ0.3m、柱根跡は径0.2mを測る。総(束)柱の倉庫となろうか。座標北に対して西へ4°の振れをもつ。

柵7（図版1・3・33の2・34の1）

建物5と重複する。南北方向の柵列である。長さ9.5mにわたって検出した。柱間は1.5m、2.4m、2.1m、3.5mを測る。一辺0.5m程の方形の掘形をもち、深さ0.3mを測る。座標軸に対しての振れは北に対して東へわずかに振れる。北端と南端で左右に延びて行く可能性がある。

建物8（図版1・3・34の1）

A区北の南部に位置する。南北2間のみ検出した。建物の西側は調査区外となり、全形は不明であるが、東西棟であろう。柱間は8尺（2.4m）等間である。一辺0.7～1.0mの方形の掘形をもち、柱根跡は径0.25m、深さ0.3mを測る。座標北に対して東へ数度振れる。

建物9（図版1・3・34の1）

建物8の東に位置する。南北2間、東西1間のみ検出した。南北の柱間7尺（2.1m）等間、東西柱間11尺（3.3m）を測る。一辺0.6～0.8mの方形の掘形をもち、柱根跡は径0.2m、深さ0.25m程を測る。北へ5m程離れた柱穴と繋がり、L字形の柵列になる可能性がある。座標北に対して東へわずかに振れる。

建物10（図版1・3・33の2）

建物5の東側に位置する。南北2間で建物は東の調査区外に延び全形は不明である。南北の各柱間13尺（3.6m）を測る。柱穴は径0.8m前後の円形で、柱根跡は径0.25m、深さ0.2m程を測る。建物は座標北に対して西へ6°程振れる。

柵11（図版1・3・34の1）

A区北の中央部からA区南へ延びる。25mの長さにわたって14基の柱穴を検出した。柱穴の大きさから南北に分かれる可能性がある。径0.25～0.35mの掘形をもち、柱根跡は径0.15m、深さ0.15m程を測る。柱間は0.7～3.0mの間でアトランダムである。北部の柵はわずかに西に振れをもつが、南部の柵はほぼ座標北を示す。耕作に伴うものとみられる。

建物12（図版1・5・30・37）

A区南の西部に位置する。2間2間の総（束）柱建物である。各柱間1.9mを測る。一辺0.6～0.8mの方形の掘形をもち、柱根跡は径0.2～0.3m、深さ0.35m程を測る。建物は座標北に対して東へわずかな振れをもつ。

建物13（図版1・5・37）

A区南の南西隅部に位置する。東西2間のみ検出した。建物の南が調査区外に延びる。南北棟であろう。柱間は8尺（2.4m）の等間である。一辺0.6mの方形の掘形をもち、柱根跡は径0.2m程、深さ0.2mを測る。建物の軸線は座標北に対してほぼ一致する。

建物15（図版1・5・31・36・37の1・48の4～8）

A区南の東半部に位置する。南北2間、東西6間以上、あるいは南北3間の南庇付き東西棟である。身舎の梁間及び桁行の柱間寸法は10尺（3.0m）の等間である。身舎の柱穴は一辺1m

前後の方形の掘形をもち、柱根跡は径 0.35 ～ 0.4m と大きく、深さ 0.4m を測る。いずれも掘形底部に柱根跡が明瞭に残り実際の柱の径を知ることができる。南庇列の柱穴は一辺 0.7m 前後の方形を呈し、柱根跡は径 0.2m、深さ 0.3m を測る。身舎に比べ規模が小さく、これらは庇ではなく塀跡となる可能性がある。建物の軸線は建物 3 と同じく座標北に対してほぼ一致する。

建物 16（図版 1・5・32・36 の 1）

A 区南の東端部ちかくに位置し、建物 15 と切り合い関係にあり、建物 16 が古期である。2 間 3 間の南北棟である。各柱間は 2.0 ～ 2.1m を測る。一辺 0.65m 前後の方形の掘形をもち、柱根跡は径 0.2m、深さ 0.2 ～ 0.3m を測る。建物は座標北に対して東へ 10° 程の振れをもつ。

建物 17（図版 1・5・36 の 1）

A 区南の東部北壁沿いに位置する。建物 15 と重複する。東西 4 間分検出した。身舎 2 間に東西庇が付く。B 区柱穴 33 に繋がる可能性が高く、その時の身舎の桁行 8.1m を測る。つまり身舎 2 間 3 間の梁間･桁行ともに柱間は 9 尺（2.7m）の等間となる。東西庇の柱間は 3.4m 前後である。柱穴は一辺 0.5 ～ 0.7m の方形の掘形をもつ。座標北に対して東へわずかに振れる。

柵 18（図版 1・5・36 の 1）

A 区南の東部に位置し、建物 15 と重複関係にある。南北方向の柵列である。5m 分検出した。溝 534 に削平された柱穴を想定すると各柱間 1.7m を測る。一辺 0.6m 程の方形の掘形をもち、柱根跡は径 0.2m、深さ 0.2m を測る。柵列は座標北に対して東へわずかに振れる。

建物 22（図版 1・5・36 の 1）

A 区南の東南隅部に位置する。柱穴 695 の 1 カ所のみ検出したもので、建物は調査区外の東及び南に広がるものとみられる。柱穴は一辺 1m の方形を呈し、柱根跡は径 0.35m、深さ 0.5m を測り、建物 15 と同規模を呈する。

土壙 718（図版 1・5・36 の 1）

A 区南の東南隅部に位置する。東西長 1.24m、南北長 0.75m の方形を呈し、深さ 0.2m を測る。直角にちかい掘形をもち、底部は平坦である。埋土は 3 層程に分層でき水平堆積を示す。掘形内には何ら施設は認めることができなかった。出土遺物は少なく、性格不明である。

溝 320（図版 1・3・34 の 2）

A 区北の中央部南よりに位置する。東西溝である。幅 0.8 ～ 1.3m、深さ 0.3 ～ 0.35m を測り、U 字構である。堆積土は 2 層程に分層できるが、いずれも砂泥層で、溝底に砂層の堆積は認められない。B 区の溝 3 に繋がる。A 区西端の溝底の標高 23.6m、B 区東端で 23.67m を測る。

溝 534（図版 1・5・36・37）

A 区南の中央部を東西に貫く。幅 0.65 ～ 0.9m、深さ 0.3 ～ 0.5m を測る。西端での溝底の標高 23.13m、東端で 23.14m を測り、高低差がほとんど認められない。堆積土も溝 320 と類似し出土遺物からも、溝 320 とはほぼ同時期に開鑿されたものと考えられる。各溝の心心 18m 弱を測る。

溝 246・247・283・502（図版 1・3・5・34 の 1・37）

A 区北の南部から A 区南に位置する。いずれも南北溝である。幅 0.4 ～ 0.6m、深さ 0.15m 前

後の掘形をもつ、U字構である。4条の溝は並行関係にあり、座標北に対して西へやや振れる。各溝の心心は等しく4mを測る。東西溝320・534と切り合い関係にあり、南北溝群の方が新期である。いずれも耕作に伴う溝と考えられる

2　B区の遺構

縄文時代

土壙74（図16・図版2・10・24・49の5）

調査区の南部に位置する。竪穴住居42の床面下において検出した。埋甕遺構である。掘形は径0.6m、深さ0.15mを測る。掘底に数mmから1cmの小石を敷き、その上に土器を斜めに据える。土器は土圧などにより押し潰された状態を示す。検出面である竪穴住居42床面の標高は23.54mを測る。西京極遺跡における縄文時代後期の遺構の発見は初めてのものであり、南隣接地の調査での縄文時代晩期とみられる土壙の検出と合わせて、西京極遺跡における縄文時代の遺構の存在が確実なものとなった。

弥生時代後期から古墳時代前期

竪穴住居43（図版2・10・24・42）

B区の中央部に位置する。竪穴住居41・42と重複し、最古期に属する。北辺の壁溝のみ検出した。壁溝は幅0.2m、深さ0.05mを測る。北辺長4.2mを測り、座標北に対して東へ60～70°の振れをもつ。土壙58は深さ0.07mの浅いもので、底部に焼土が認められ、炉跡と考えられる。

竪穴住居42（図版2・10・24・42・49の1と6と8）

B区の南半部に位置する。竪穴住居41・43と重複し、竪穴住居41より古期、竪穴住居43より新期である。調査区の東西幅いっぱいに検出したもので、座標の東西にほぼ平行した掘形をもつ。西端でやや曲がり、コーナー部近くであることを示す。南辺部が平安時代の溝3の掘形に重複する。床面までの深さ0.12m、床面での壁溝の幅0.14m、深さ0.08mを測る。主柱穴は2カ所検出した。柱穴73は径0.3mの掘形をもち、柱根跡は検出面で径0.2m、深さ0.7mの下部で径0.1mを測り、先細りである。柱穴71は径0.43mの掘形をもち、柱根跡は径0.17m、深さ0.5mを測る。南辺部に袋状の土壙60を検出した。長径1.1m、短径0.8mの楕円形を呈し、深さ0.55mを測る。周辺の一部に小石を敷き詰めて整地する。

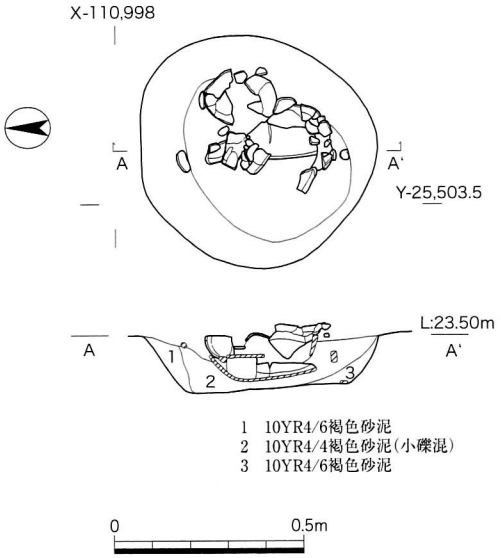
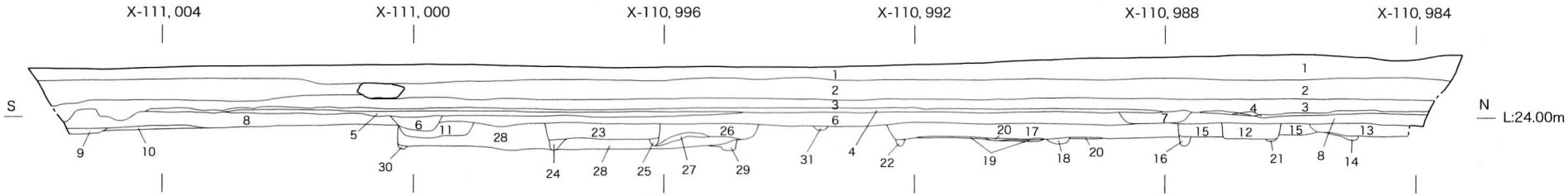
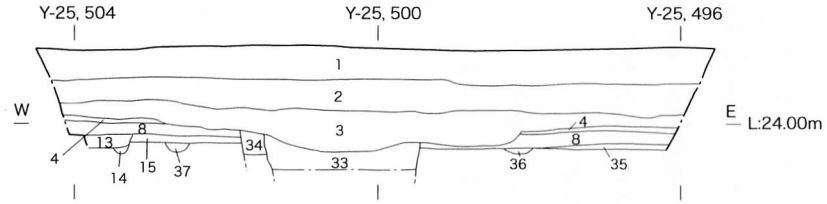


図15　B区 土壙74実測図(1/20)



1 盛土
2 コン砕盛土
3 10YR5/2灰黄褐色砂泥(耕土)
4 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥(床土)
5 10YR5/3にぶい黄褐色+7.5YR3/4暗褐色砂泥
6 7.5YR4/3褐色砂泥(炭混)
7 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥(径0.5～3cm大の礫少量混)
8 10YR4/4褐色砂泥(炭混)
9 10YR3/4暗褐色砂泥
10 7.5YR3/4暗褐色砂泥
11 7.5YR4/4褐色砂泥(炭混)(溝3)
12 7.5YR4/4褐色砂泥(炭混)(柱穴11)
13 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(炭混)(竪穴49)
14 10YR4/6褐色砂泥
15 10YR4/6褐色砂泥(炭混)(竪穴39)
16 7.5YR4/4褐色砂泥
17 10YR3/4暗褐色砂泥(炭混)(竪穴40)
18 10YR4/4褐色砂泥
19 10YR5/6黄褐色砂泥(住居址床面)
20 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥(炭多量混)
21 7.5YR4/6褐色砂泥
22 10YR4/6褐色砂泥
23 7.5YR4/3暗褐色砂泥(炭混)(竪穴41)
24 7.5YR4/3褐色砂泥
25 7.5YR3/4暗褐色砂泥
26 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(炭混)
27 7.5YR3/3暗褐色砂泥(焼土多量混)
28 10YR4/6褐色砂泥(炭混)(竪穴42)
28 7.5YR4/4褐色砂泥(炭混)
29 7.5YR4/3褐色砂泥
30 7.5YR4/3褐色砂泥
31 7.5YR4/3褐色砂泥(竪穴43壁溝)



33 10YR7/4 にぶい黄橙色粘土、10YR5/1 褐灰色粘土混
34 7.5YR4/4 褐色 +10YR5/2 灰黄褐色砂泥、土師器片含む
35 10YR4/2 灰黄褐色 +7.5YR3/4 暗褐色砂泥
36 7.5YR4/2 灰黄褐色砂泥
37 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、土師片混

図16　B区　西壁・北壁断面実測図(1/100)

また掘形側面に粘質土を貼り付けた状況を呈する。貯蔵穴と考えられる。床面の北西部と中央部に炭化物の薄い広がりがある。土壙72は深さ0.1m程の浅い凹み状を呈し、底部に炭化物の堆積と焼土が認められ、炉跡と考えられる。

竪穴住居49（図版2・9・25・42の2・49の3）

B区の北西隅部に位置し、壁溝部のみを認めた。竪穴住居39の床面下で検出した。床面までの深さ0.07m、壁溝の幅0.15m、深さ0.1mを測る。

竪穴住居40（図版2・9・25・42・49の2）

B区の北部に位置する。西半部が調査区外となる。竪穴住居39と一部重複する。確認できた一辺4.6mを測り、方形を呈する。床面までの深さ0.25m、壁溝の幅0.16m、深さ0.1mを測る。主柱穴69は径0.5m、深さ0.43mを測る。床面は薄い貼床を施す。東辺の中央部壁溝に沿って焼土の広がりを認めた。また、西壁沿いに径0.5m、深さ0.1mの浅い落ち込みがあり、一部焼土があり、炉跡とみられる。

竪穴住居39（図版2・9・25・42・49の3と7）

B区の北端部に位置する。一辺5mを測り、方形を呈する。床面までの深さ0.13m、壁溝の幅0.15m、深さ0.1mを測る。主柱穴は2カ所検出した。主柱穴の1基は土壙2の壁面にわずかに残存する状態で認めた。西側の主柱穴は、柱を打ち込んだ様な状況を呈する。柱根跡は径0.18m、深さ0.55mを測る。南辺部の壁溝に沿って土壙50を検出した。長軸1.7m、短軸1mの方形に近く、深さ0.45mを測る。貯蔵穴とみられる。また中央部付近に数カ所焼土が分布する。土壙46は長軸0.7m、短軸0.55m、深さ0.06mを測り、焼土が認められ、炉跡と考えられる。

古墳時代中期から古墳時代後期

竪穴住居41（図版2・9・26・49の4）

B区の中央部南寄りに位置する。一辺4m程の方形を呈する。座標北に対して45°の振れをもつ。床面までの深さ0.22m、壁溝の幅0.18m、深さ0.1mを測る。主柱穴を4カ所検出した。いずれも柱穴は径0.2m、深さ0.2mを測る。南東部の壁溝に沿って焼土混じりの高まりがある。明確なカマドの作り付けの痕跡は認められないが、床面まで焼土等を除去したところ、長軸0.6m、短軸0.4m、深さ0.08mの浅い落ち込みを検出した。掘形内には10数cm程の礫が認められた。カマドを据えた施設の一部と考えられる。

奈良時代から平安時代

建物1（図版1・8・32・41）

B区の中央部に位置する。南北3間分検出した。一辺0.75～0.9mの方形の掘形をもち、柱根跡は径0.25～0.3m、深さ0.45mを測る。北と南に庇のつく東西棟と考えられる。庇の柱間は9尺ないし10尺、身舎の柱間1.6尺ないし1.7尺を測る。建物の軸線は座標北に対してほぼ一致し、A区の建物3・15と同時期に想定できる。

柱穴 33（図版 1・8・41 の 1）

B 区の南部に位置する。A 区建物 17 の身舎の柱跡にあたる。掘形は径 0.5m を測り、柱根跡は径 0.2m、深さ 0.4m を測る。

溝 3（図版 1・8・41 の 1）

B 区の南部に位置する。東西溝である。建物 1 の柱穴 28 を切り込む。溝は幅 1.2m、深さ 0.23m を測り、U 字構である。A 区の溝 320 と同一溝である。

註 1　京都大学の千葉豊・冨井眞両氏より現地での実見を賜り、ご教示を得た。

註 2　第 1 章の 2 と同じ。

Ⅲ　遺　物

出土した遺物は整理箱に105箱ある。時代は縄文時代後期から江戸時代のものがある。弥生時代後期から古墳時代のものが大半で、奈良時代から平安時代のものが次に多い。遺物の種類としては、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦類、土製品、石製品、金属製品がある。以下出土した遺物の主要なものについて述べる。なお、弥生土器及び古墳時代以降の土師器については大半のものが表面の剥落が著しく、調整等の図化、観察がきわめて困難であった。

1　A区の土器・陶磁器類

縄文時代

包含層出土土器（図17・図版6・50）

いずれも磨消縄文土器である。胎土は白色砂粒を多く含み、黒褐色を呈する。2・3はNo.2地点出土。2は口縁部がやや波状となる。3は幅5mmの太めの沈線を施す。4・9・10はNo.7地点、いずれも平安時代の溝534の壁面及び底部のベースより出土したものである。4は2条の沈線内に縄文を施す。5～8はNo.5地点出土。6・7はJ字文を施す。これらは縄文時代後期初頭とされる中津式土器の型式に比定できる。

弥生時代中期から古墳時代前期

落ち込み414出土土器（図18）

1～13は器台である。11と12は同一個体とみられる。口縁部端面に二条の凹線文、胴部に14条の凹線文を施し、円孔を4カ所穿つ。外面の口縁部下から胴部にタテ方向のヘラ磨きをおこなう。器壁の内外面に赤色顔料を塗布する。14は甕の底部である。外面タタキ目が残る。

溝841出土土器（図19・図版50）

甕（20･26）、高杯（24）は第1層出土、甕（15･18･19）、高杯（23･25）、底部（27）は第2層、甕（16・17・21・22）は土器溜まり出土である。15は受け口状の口縁部をもつ。16・17は外反する口縁部をもち、端部は丸くおさめる。18は口縁端部を平坦に仕上げ、やや内側が肥厚する。口縁部内外面をヨコナデ調整、肩部外面はハケ目、内面はヘラ削りをおこなう。19は口縁部がやや受け口状になる。20は口縁端部が内側に肥厚する。肩部外面ハケ目、内面はヘラ削りをおこなう。21はくの字状の口頸部をもつ。体部外面にタタキ目の痕跡が認められる。22の底部と同一の可能性がある。26の外面はタタキ目が明瞭に残る。底部外面中央部の凹みに粘土を充填した痕跡が認められる。27は底部外面中央部が凹む。23は口縁部外面に凹線文を施す。口縁端部を面取しやや凹む。24は高杯の脚部である。3孔を施す。外面はタテ方向にハケ目調整を施す。25は低い脚部に3孔を穿つ。台付き壺の脚部である可能性がある。

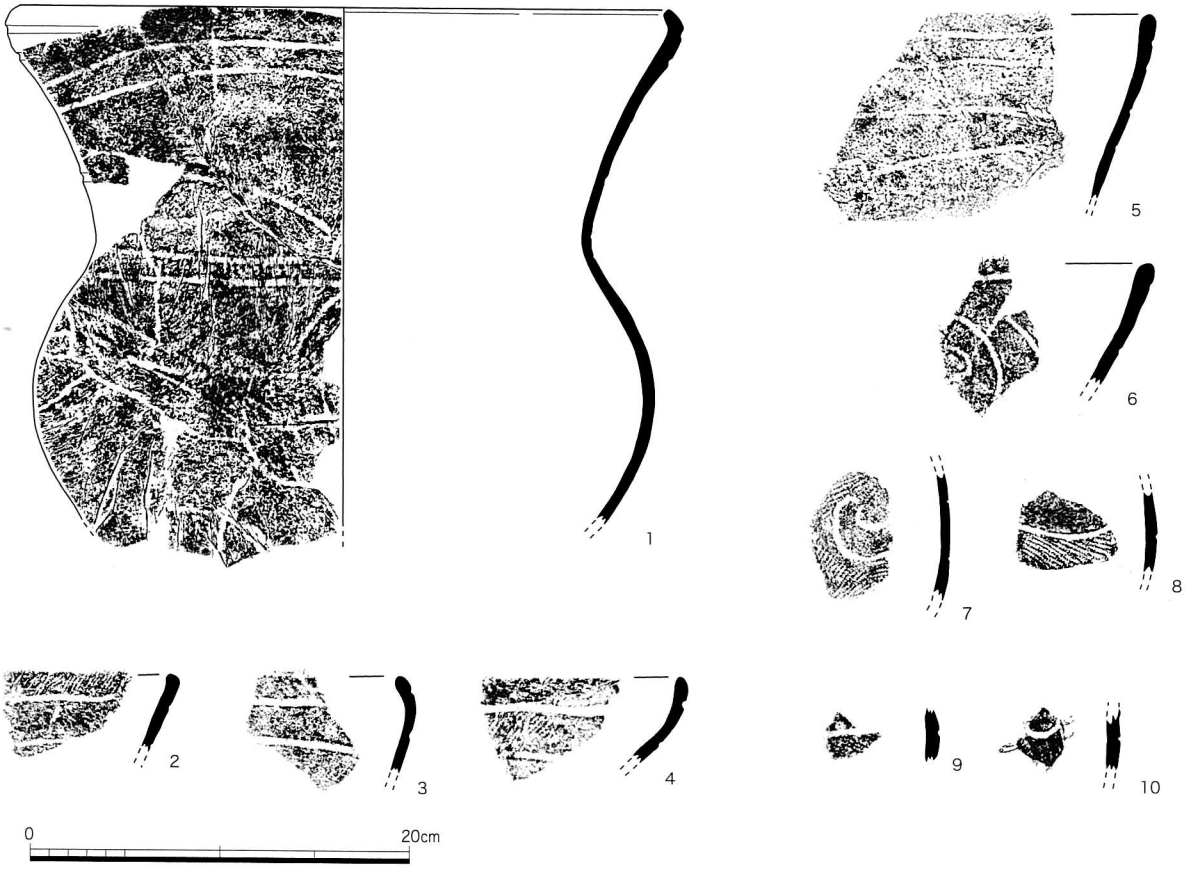


図17　A・B区　出土縄文土器拓影･実測図(1/4)

土壙 180 出土土器（図 20）

28 は高杯の杯部である。口縁部がつよく外反する。29 は器台、4 孔を穿つ。器表の剥落が著しいが孔の上部に凹線文の痕跡が認められる。30 は甕の底部、31 は壺の底部で、径 8cm を測る。

竪穴住居 171 出土土器（図 21・図版 50）

甕（32 ～ 35）、高杯（36 ～ 38）、器台などがある。32 は外反する口縁部をもち、体部内面はハケ目調整をおこなう。体部外面に黒斑が認められる。34 は摩滅が著しいが外面にタタキ目残る。33 と同一個体とみられる。35 は外反する口縁部をもち、端部は丸くおさめる。体部内面はハケ目調整をおこなう。外面の調整は不明。36 は平坦な杯部に外面に稜を作って大きく開く口縁部をもつ。37 は脚部に 3 カ所円孔を穿つ。38 は低い脚部をもち、円孔はない。

竪穴住居 172 出土土器（図 21）

甕（39）はくの字状に外反する口縁部をもち、口縁端部が内側に肥厚する。口縁部内外面をヨコナデ、胎土はきわめて精良で暗褐色を呈する。

竪穴住居 176 出土土器（図 21）

40 は高杯の脚で杯部及び脚裾部を欠く。脚部の内面に絞り目が認められる。41 は甑の底部、径 1cm の円孔を穿つ。

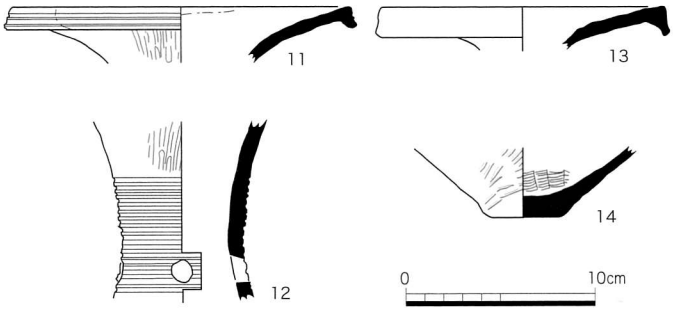


図18　A区北　落ち込み414出土遺物実測図(1/4)

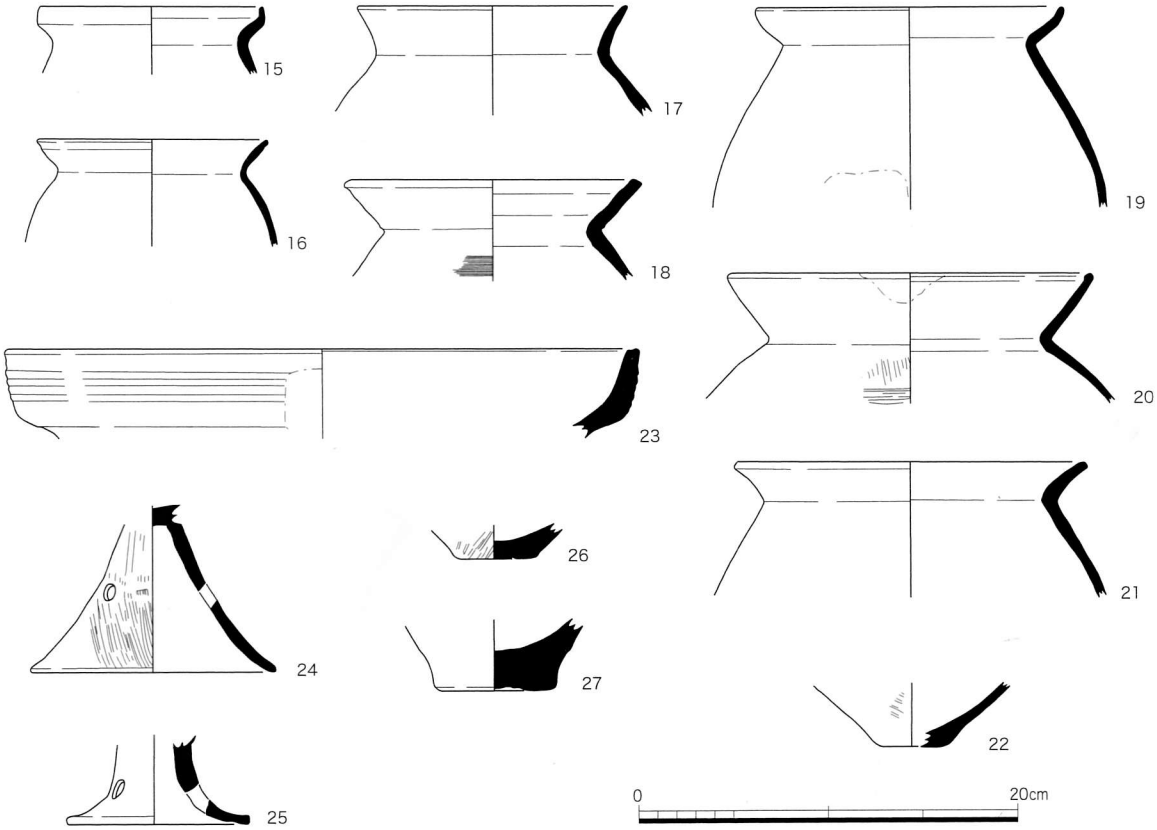


図19　A区南　溝841出土遺物実測図(1/4)

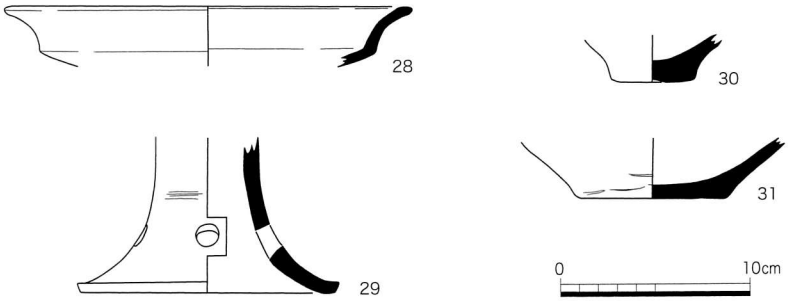


図20　A区北　土壙180出土遺物実測図(1/4)

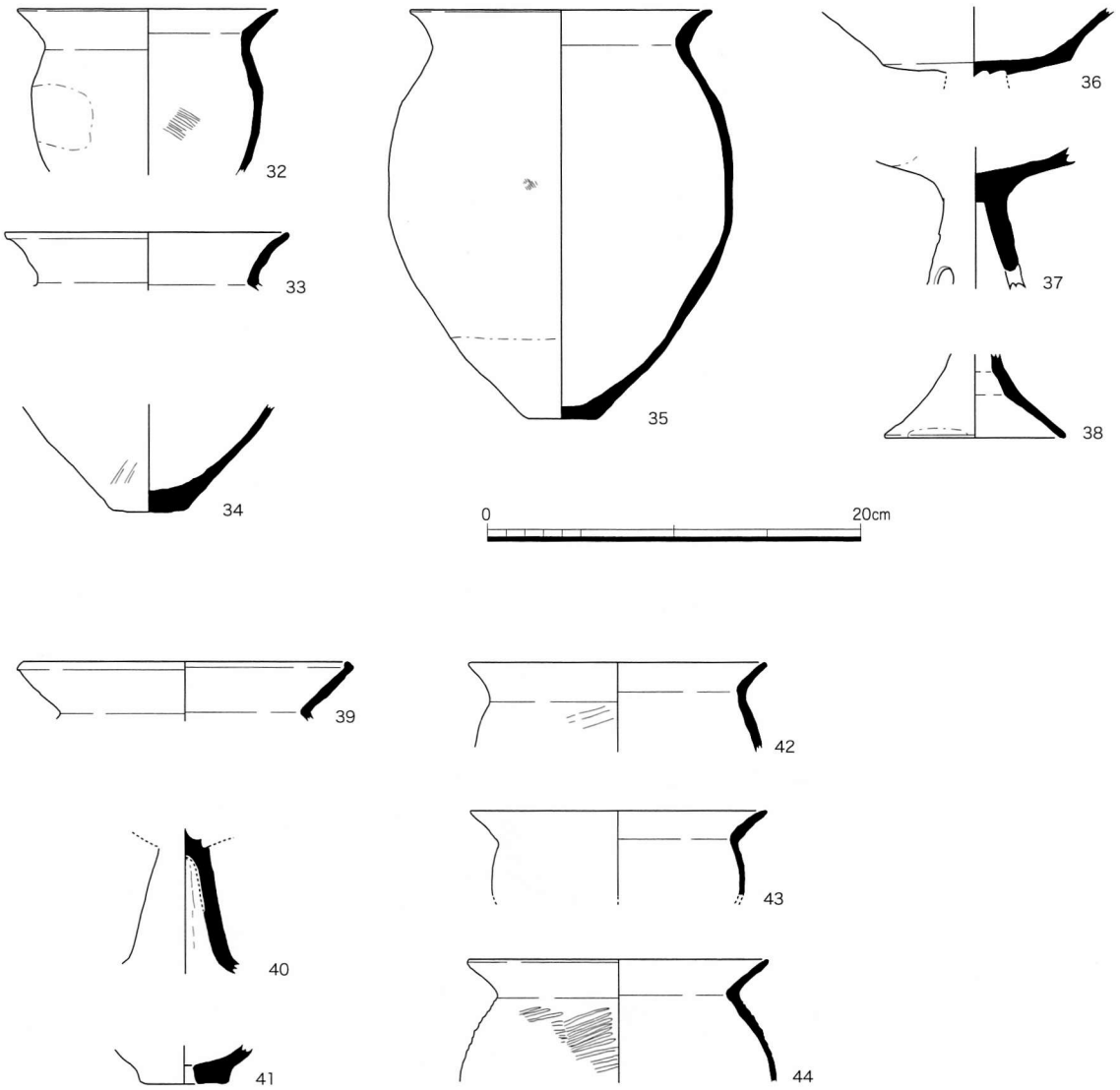


図21　A区北　竪穴住居171(32～38)･172(39)･
176(40･41)･333(42～44)出土遺物実測図(1/4)

古墳時代中期から古墳時代後期

竪穴住居 333 出土土器（図 21）

甕（42 ～ 44）は外反する口縁部をもつ。42 の外面は頸部近くまでタタキ目が認められる。43 の器壁は薄い。44 はくの字状に外反する口縁部をもち体部外面はタタキ目を施す。体部内面はヘラ削りをおこない胎土は暗褐色を呈する。42・44 は混入品である。落ち込み 414 の関係で図示した。

竪穴住居 260 出土土器（図 22・図版 51）

須恵器の杯蓋（45 ～ 50）、杯身（51 ～ 54）、平瓶（55）、甕、土師器の甕（56）などがある。46 はカマド 285 下の壁溝、48 はカマド 285、53 は主柱穴 288 掘形、その他は第 2 層出土である。

杯蓋はいずれも天井部と口縁部とを分ける凹線や稜を認めない。天井部のヘラ削りは1/2以下である。45・47・50は天井部内面に仕上げナデを施し、46は軽くヘラ削り調整をおこなう。47は天井部に一条のヘラ記号がある。杯身のたちあがりは低く内傾する。51・52の受部の上面にヘラによる一条の凹線がある。ヘラ削りの範囲は1/2以下である。54は有蓋高杯で、脚部に4カ所の透かしを認める。55の断面はセピア色を呈する。56は長胴甕で、外反する口縁部をもち、端部を面取する。口縁部の内面ヨコ方向のハケ目、体部の内外面タテ方向のハケ目を施す。

竪穴住居304出土土器（図22・図版51）

須恵器杯蓋（57）、杯身（59）、土師器高杯（58）がある。57は口縁部内面にかえりをもち、天井部をヘラ削りして扁平に仕上げる。宝珠形のつまみが付こう。59は床面で検出したもので、たちあがりはやや内傾し端面の内面に段をもち、受部からの高さは2cmを測る。受部は水平で、体部下半をヘラ削りする。混入品の可能性がある。58は高杯の杯部で、脚部を欠く。杯部の内面に放射状の暗文を施す。

竪穴住居350出土土器（図22）

須恵器杯身（60・61）、蓋、土師器甕（62・63）、高杯などがある。60・61のたちあがりは低く内傾し、受部は上向きである。62は外反する口縁部をもち、端部は内側に肥厚する。内外面ナデ調整を施す。63の外反する口縁部は幅5cm近くある。

竪穴住居339出土土器（図22・図版51）

須恵器杯蓋（64）、杯身（65）、土師器甕がある。64は口縁部内面にかえりをもつ、天井頂部に宝珠形つまみが付こう。65は口縁端部がわずかに外反する。体部と底部の境界部をヘラ削りし、底部外面に粘土紐の継ぎ目を明瞭に残す。

竪穴住居352出土土器（図22）

須恵器杯蓋（66）、杯身（67）、土師器甕がある。66は口縁部内面に小さなかえりをもつ。67の底部外面は粘土紐の継ぎ目を残す。

竪穴住居303出土土器（図22）

土師器杯（68）、甑（69）、須恵器杯蓋などがある。68は表面の剥落が著しく調整等不明である。小片のため口径も少し前後する可能性がある。69は平坦な底部に孔を穿つ。体部・底部内外面はハケ目調整をおこなう。底部外面の一部に黒斑がある。

竪穴住居316出土土器（図22）

須恵器杯身（70）、土師器甕などがある。70はたちあがりが低くやや内傾する。

竪穴住居322出土土器（図22）

土師器甕（71）、須恵器杯身などがある。71は外反する口縁部をもち、端部は平坦面を有する。長胴甕になろう。胎土は精良である。

竪穴住居346出土土器（図22）

須恵器杯身（72）はたちあがりが低く内傾する。受部はやや幅がある。作りが薄くシャープである。

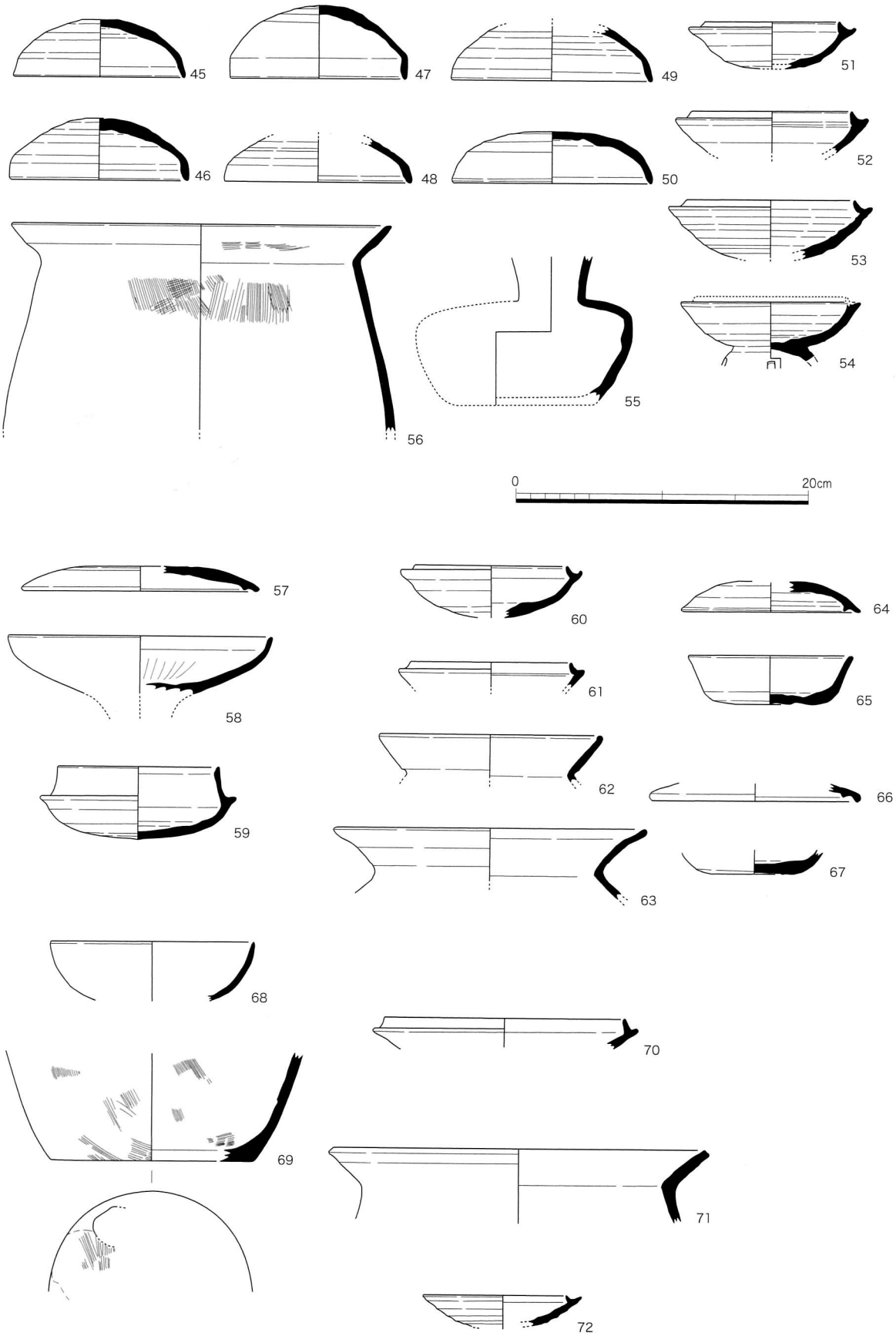


図22　A区北　竪穴住居260(45～56)・304(57～59)・350(60～63)・339(64・65)・352(66・67)・303(68・69)・316(70)・322(71)・346(72)出土遺物実測図(1/4)

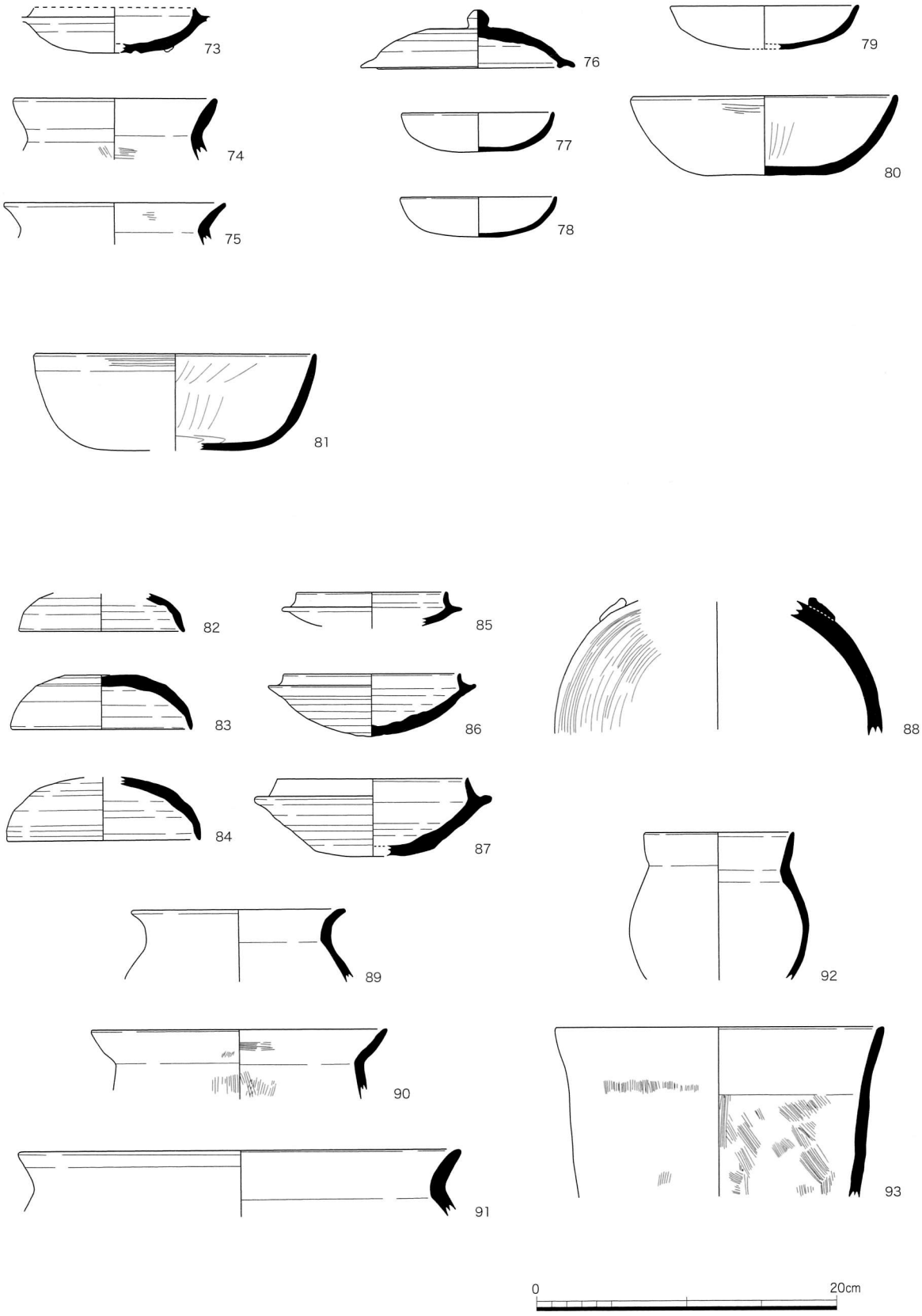


図23　A区南　竪穴住居750(73～75)・777(76～80)・
746(81)・788(82～93)出土遺物実測図(1/4)

竪穴住居 750 出土土器（図 23）

須恵器杯身（73）、器台、土師器甕（74・75）、高杯などがある。73 は水平な受部にたちあがりは低く内傾する。外面に焼成時の粘土が付着する。74 は口縁部が立ち上がり気味に外反する。頸部外面ヨコナデが顕著に残る。体部内外面はハケ目調整を施す。75 の口縁部内面はヨコ方向のハケ目調整を施す。その他に波状文を有する器台片がある。

竪穴住居 777 出土土器（図 23・図版 51）

須恵器杯蓋（76）、杯身、甕、土師器杯（77 ～ 80）、甕、高杯などがある。76・77・80 は壁溝上面より出土した。76 は内面にかえりをもち、口縁端部よりもわずかに下方に突出する。天井部に乳首形のつまみが付く。天井部を 1/2 の範囲でヘラ削りする。77・78 は口径 10cm、器高 2.7cm を測り、小ぶりである。79 は口径 12.5cm、器高 2.9cm を測る。いずれも器表の剥離が著しく調整等は不明である。80 は口径 17.4cm、器高 5.3cm を測る。外面にヘラ磨き、内面に放射状暗文の痕跡をわずかに認める。

竪穴住居 746 出土土器（図 23）

土師器杯（81）、甕、須恵器杯などがある。81 は口径 18.5cm、器高 6.5cm を測る。体部外面ヨコ方向のヘラ磨き、体部内面二段放射線状暗文、底部内面に円弧の暗文を施す。

竪穴住居 788 出土土器（図 23）

須恵器杯蓋（82 ～ 84）、杯身（85 ～ 87）、堤瓶（88）、土師器甕（89 ～ 92）、甑（93）などがある。杯蓋はいずれも天井部と口縁部とを分ける凹線や稜を認めない。天井部のヘラ削りは 1/2 程である。85・86 は水平の受部にたちあがりは低くやや内傾する。87 の受部には 1 条の凹線を認める。89 は口縁端部が外反する。体部内面はヘラ削りをおこなう。90 は口縁部内面はヨコ方向のハケ目、体部内外面はタテ方向のハケ目調整をおこなう。91 の口縁端部は内側を軽く面取する。口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。88 は堤瓶で頸部等を欠く。耳は退化して形を為していない。体部の両面ともカキ目調整を施す。92 は小型の甕である。口縁端部の内側をナデつける。内外面は平滑に仕上げる。胎土は赤褐色を呈する。93 は内外面タテ方向のハケ目を施す。取っ手が付こう。

土壙 426 出土土器（図 24・図版 51・52）

須恵器杯蓋（94 ～ 96）、杯身（97 ～ 99）、竈形土器（100）がある。杯身と杯蓋は 3 セットありほぼ完形品である。蓋は天井部と口縁部の境界が不明瞭で、端部を丸くおさめる。杯身はやや上向きの受部をもち、たちあがりはやや低く、内傾する。底部内面に仕上げナデを施す。ヘラ削りはいずれも 1/2 程で、逆時計回りである。100 は竈形土器の庇部分である。残存幅 45cm 程あり、大形である。庇の出は 8cm ある。庇の上下面はヨコ方向のハケ目調整を施し、上面のハケ目はナデによりほぼ消す。口縁端部はヨコナデにより凹む。庇の取り付け裏部は指押さえ痕が顕著に残る。庇の下面及び裏面は全体に煤が付着し、日常的に使用していた痕跡を示す。

溝 179 出土土器（図 25・図版 52・53）

須恵器杯蓋（101 ～ 103）、杯身（104 ～ 107）、甕（108・109）、土師器甕（110 ～ 112）、高杯

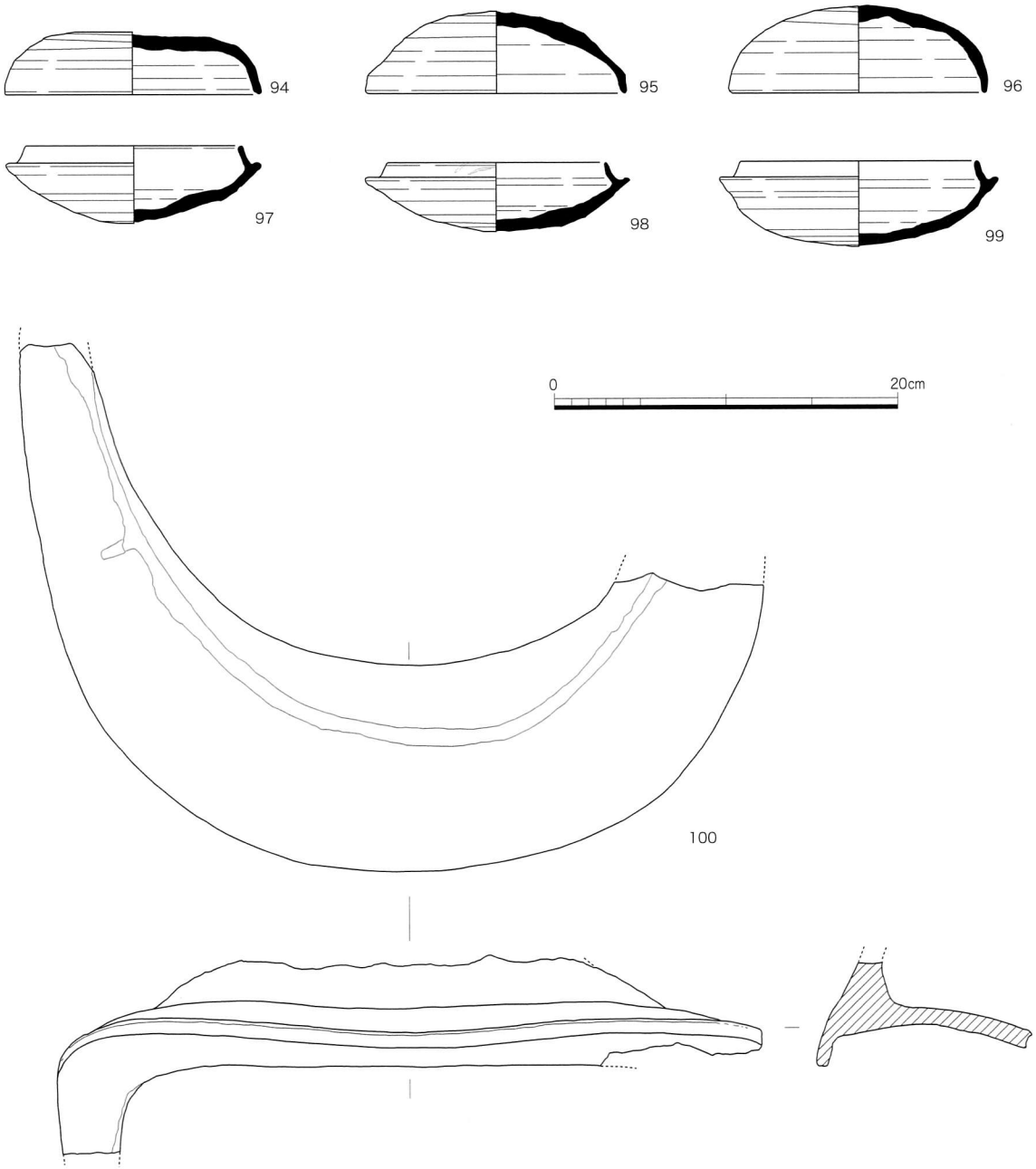


図24　A区北　土壙426出土遺物実測図(1/4)

(113・114) がある。102 は天井部と口縁部との境界は凹線を巡らし、口縁端部は内傾する面を有し、稜を作る。101 は天井部と口縁部との境界は浅い凹み、103 は境界が不明瞭で、共に口縁端部を丸くおさめる。101・103 は仕上げナデを施す。受部は水平 (106) のものとやや上向き (104・105) のものがあり、上面に 1 条の凹線を施す。たちあがりは低く内傾し、端部は丸くおさめる。107 は水平な受部にやや高めの内傾するたちあがりをもち、端部を丸くおさめる。108 は外反する短い口頸部をもつ。肩部内面には同心円文が顕著にのこる。109 は外反する口頸部をもち、端部は外側に肥厚する。肩部が張る器形を呈する。体部内面の同心円文はほとんどナデ消

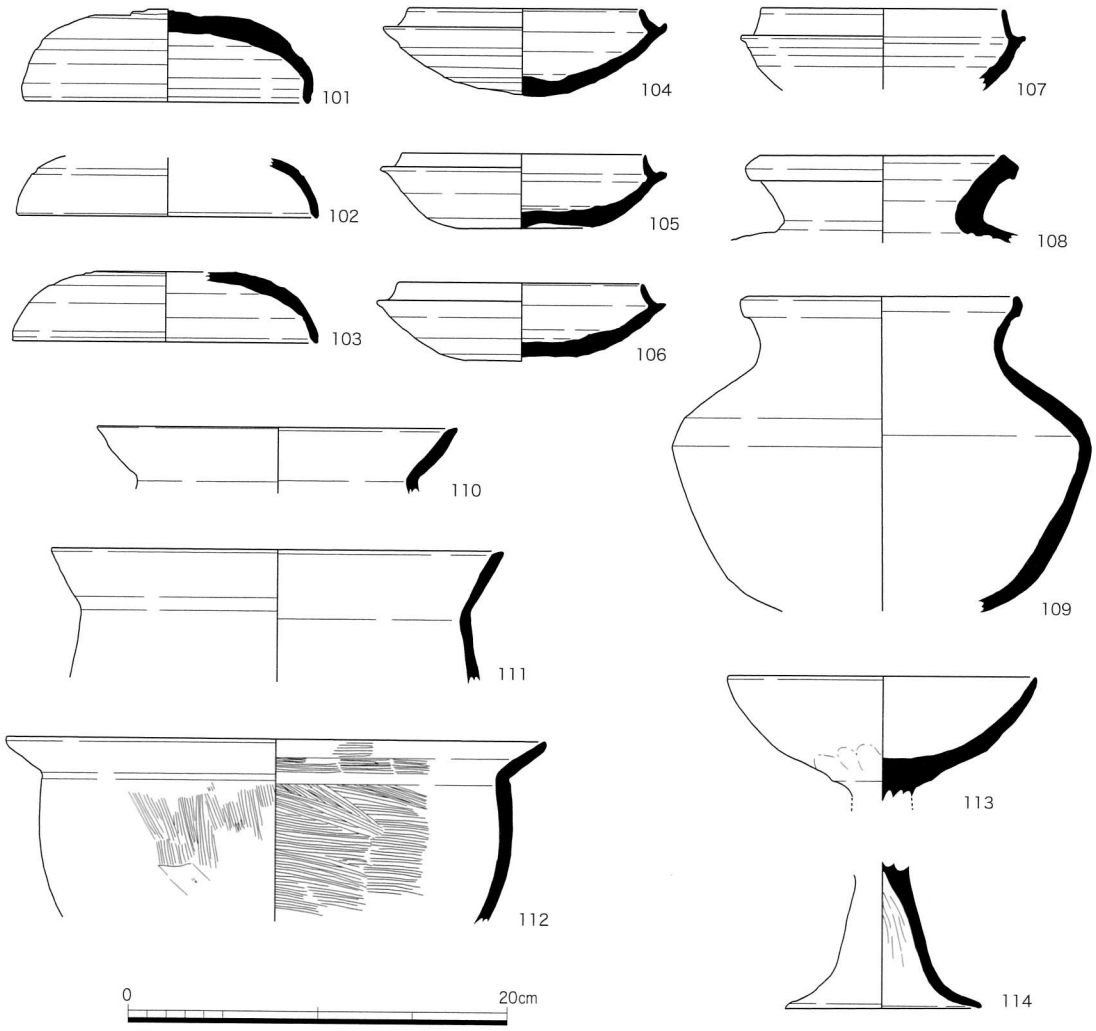


図25　A区北　溝179出土遺物実測図(1/4)

す。110・111は共に外反する口縁部をもち、端部は内側をナデ付け平坦面を作る。112は口縁端部を丸くおさめる。口縁部内面及び体部内外面にはハケ目が顕著に残る。113は高杯でやや深めの杯部をもつ。杯部外面の脚部近く指押さえ調整をおこなう。内面は器表の剥離が著しく調整は不明である。114は脚部内面に絞り目が残る。その他に水晶の剥片が1点出土している。

溝795出土土器（図26・図版53）

須恵器杯蓋（115～120）、杯身（121～126）、高杯（127・128）、瓻（129・130）、甕（131・132）、器台（133）、土師器鉢（甕）（134）、高杯（135～137）などがある。須恵器の杯蓋は天井部と口縁部との境界に浅く広い凹みをもつもの（115）、膨らみをもつもの（119）、凹線や稜をもたないものがある。いずれも口縁端部は丸くおさめる。杯身のたちあがりは低く、内傾し、受部は水平または上向きで、1条の凹線をもつもの（124）がある。いずれも底部を逆時計回りのヘラ削りにより平坦に仕上げる。瓻（129・130）は頸部から上を欠く。肩部に1条（129）あるいは2条（130）のヘラ描き沈線を施し、円孔を1カ所穿つ。体部下半はヘラ削りをおこなう。127は無蓋高杯の杯部である。口縁部と底部を稜と櫛描き列点文によって分ける。脚部を欠くが透

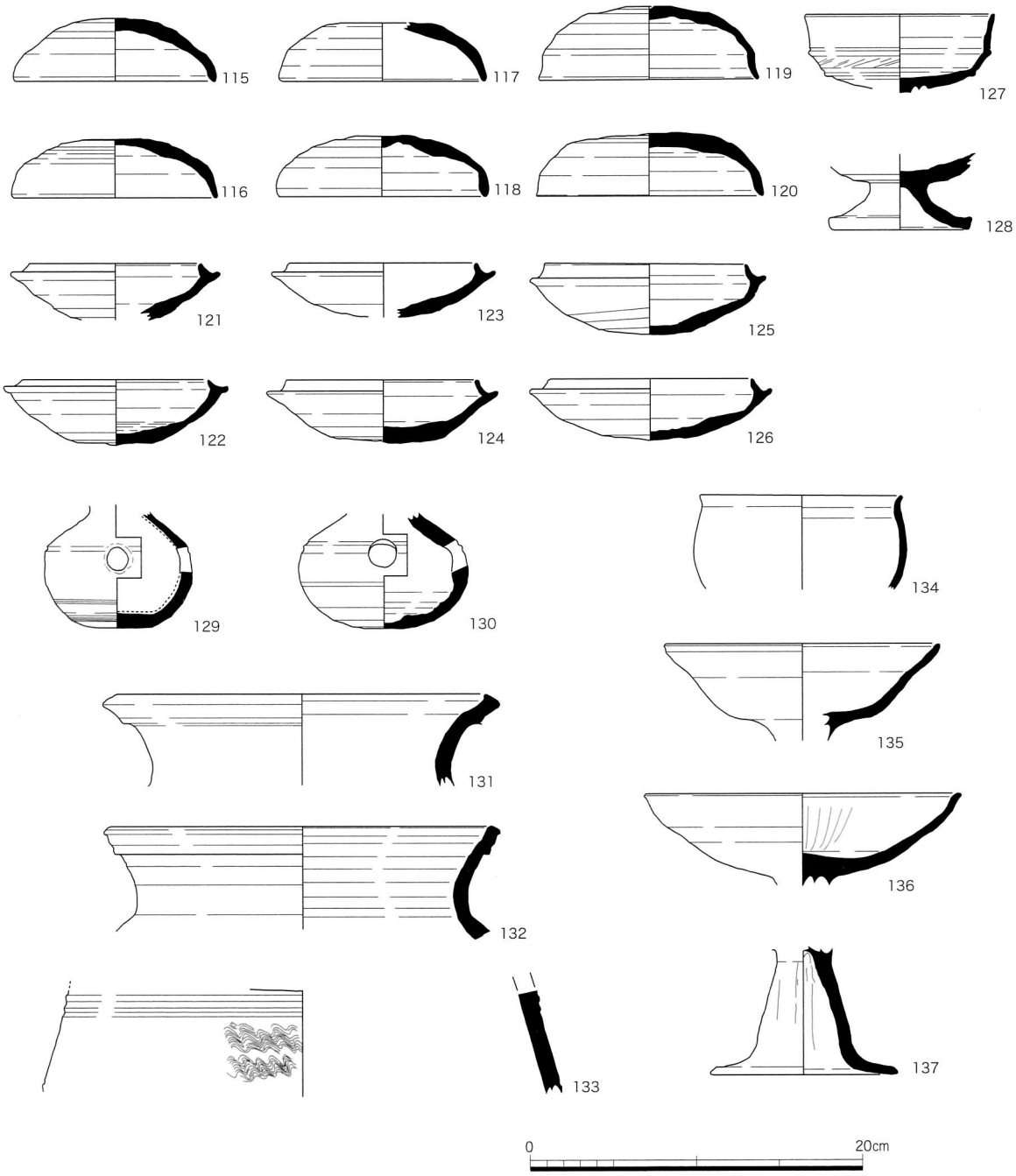


図26　A区南　溝795出土遺物実測図(1/4)

かしを認める。128 は高杯あるいは台付き壺の脚部である。脚部は低く高さ 2.7cm を測り、端部を面取する。甕は外反する口径部をもち、131 の口縁端部は内側に肥厚し、132 は丸くおさめる。133 は器台あるいは高杯の脚部片である。凸帯の間に櫛描き波状文を 2 段に施す。透かしを認めるものの四角か三角かは不明である。134 は小さく外反する口縁部をもつ。器表の摩滅が著しく調整等不明である。135 は大きくひらく口縁部をもち、端部は外側をナデ付け上方に丸くおさめる。136 の口縁端部は外反する。内面に放射状暗文を施す。137 は脚部内面に絞り目を認める。

溝 317 出土土器（図 27・図版 53）

須恵器杯蓋（138・139）、杯身（140）、円筒埴輪（141）がある。杯蓋は口縁部内面にかえりを

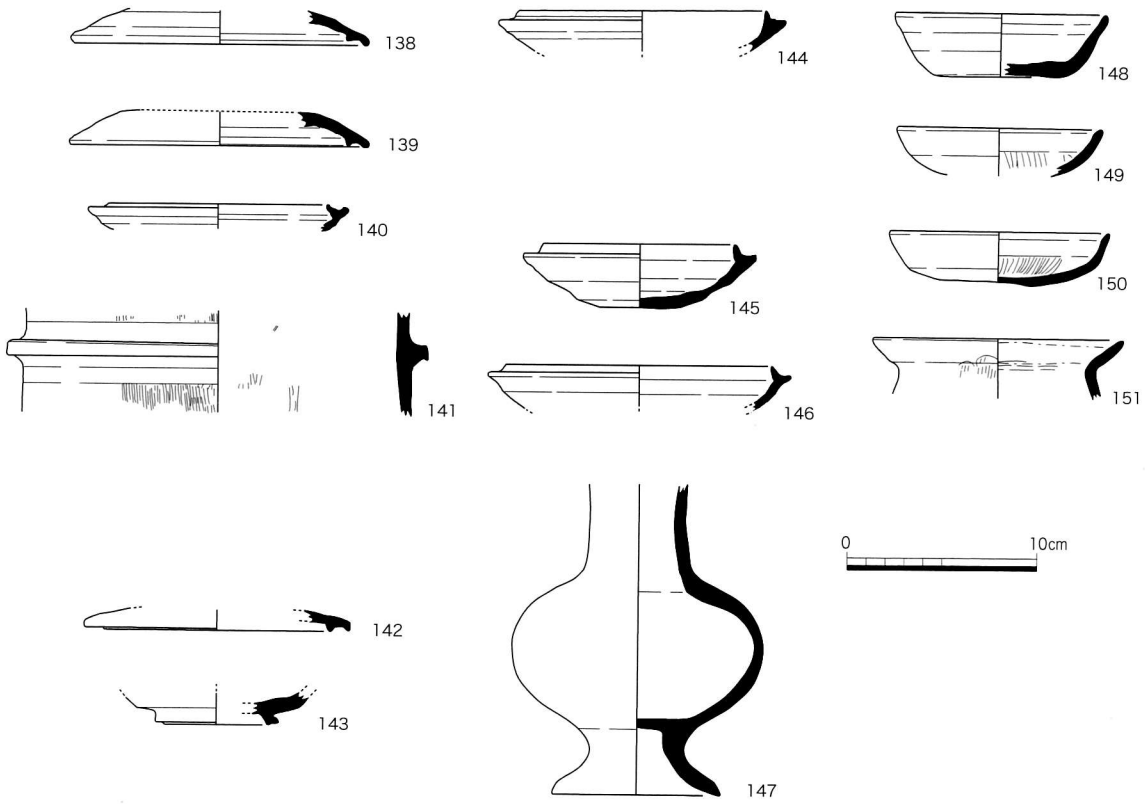


図27　A区北　溝317(138～141)･332(142･143)･柵21(145～147)･
柱穴119(148～151)･A区南　建物19(144)出土遺物実測図(1/4)

もち、かえりの先端は口端部以下に突出しない。140のたちあがりは低く、内傾する。受部には1条の凹線を施す。141は断面台形状の凸帯を施す。内外面タテ方向のハケ目調整をおこなう。

溝332出土土器（図27）

須恵器杯蓋（142)、杯身（143）がある。142は口縁部内面にかえりをもつ。143の高台は低く、外側にふんばる。貼付け輪高台である。

建物19出土土器（図27）

須恵器杯身（144）は柱穴663の掘形より出土。たちあがりは低く、受部の上面にヘラによる1条の凹線をもつ。

柵21出土土器（図27・図版53）

須恵器杯身（145・146）は柱穴255より、土師器壺（147）は柱穴256の掘形より出土である。杯身のたちあがりは低く、内傾する。147は台付き長傾壺である。やや扁平な球形の体部に細長い頸部をもち、底部は外にひらく高台をもち、端部は丸くおさめる。

柱穴119出土土器（図27・図版54）

須恵器杯（148)、土師器杯（149・150)、甕（151)、管玉などが掘形より出土。杯A（148）は底部ヘラ起こしの後ナデ調整を施す。杯C（149・150）は内面に放射状暗文を施す。150は口縁端部がやや外反する。底部外面は指押さえ痕が残る。151の甕は外反する口径部をもつ。口縁部内面はヨコ方向のハケ目調整、頸部外面はタテ方向のハケ目調整の後に指押さえ痕が明瞭に残る。

奈良時代から平安時代

建物１出土土器（図 28・図版 54）

土師器（152 ～ 155）、須恵器（156 ～ 161）などがある。壺Ｅ（152）は柱穴 88 出土。蓋を受ける短いたちあがりをもつ。体部外面に粗いヘラ磨きを施す。椀Ａ（153）は外面をヘラ削りする。柱穴 196 出土。皿Ａ(154)の口縁端部は内側に肥厚する。外面は丁寧なヘラ削りをおこなう。甕（155）は外反する口縁部をもち、端部は内側に肥厚する。155 は柱穴 135、154 は 135 掘形出土。156 は折り返しの受けをもつ蓋、杯（157）とともに柱穴 79 掘形出土。159 は焼きが甘く灰白色を呈する。柱穴 135 出土。158・160・161 は輪高台が付く杯Ｂである。158 は柱穴 148、160 は柱穴 88 掘形、161 は柱穴 196 出土である。8 世紀末から 9 世紀初頭に属する土器群である。

建物３出土土器（図 28・図版 54）

土師器（162・163・166）、須恵器（164・167・168）、灰釉陶器（165）などがある。甕（162）は柱穴 202 の柱当り出土。短く外反する口縁部をもち、口径 8.2cm の小型である。杯Ｂ（163）は柱穴 177 の掘形出土。しっかりした高台をもつ。体部外面ヘラ削りをおこなう。166 は高杯の口縁部で、柱穴 270 掘形出土である。端部は内側に肥厚する。164 は折り返しの受けをもつ須恵器の蓋で、柱穴 270 出土である。鉢（167）は柱穴 177 出土、外方に屈曲する口縁部をもち、灰白色を呈する。165 は灰釉陶器椀、柱穴 177 掘形より出土。体部下半外面をヘラ削りし、内面全体を施釉する。貼り付け輪高台である。黒笹 14 号窯形式である。168 は台付き椀で、柱穴 266 掘形より完存品で出土。体部外面中央に 2 条の凹線がある。脚部の端部は折り返して稜を作る。柱穴 266 は竪穴住居 260（402）と重複関係にあり、168 は竪穴住居跡からの混入品であろう。その他には黒色土器の A タイプ、蛇の目高台の緑釉陶器片がある。9 世紀半ばから後半に属する。

建物５出土土器（図 28）

土師器、須恵器（169・170）がある。蓋（169）は柱穴 392 出土。170 は杯の口縁部片、柱穴 296 出土である。9 世紀後半代のもの。

建物８出土土器（図 28）

土師器、須恵器（171）がある。171 の杯は柱穴 238 掘形出土。低い断面四角形の輪高台をもつ。体部下半高台際までヘラ削りをおこなう。8 世紀末から 9 世紀初に属する。

柵 11 出土土器（図 28）

土師器、須恵器（172）がある。172 の杯は柱穴 140 出土である。焼きが甘く灰白色を呈する。その他に黒色土器 A タイプ片がある。

建物 12 出土土器（図 28）

土師器、須恵器（173）がある。173 の杯は柱穴 509 掘形出土。底部外面に粘土ひもの継ぎ目痕を認める。その他に緑釉陶器片がある。

建物 13 出土土器（図 28）

土師器、須恵器（174）がある。174 は柱穴 538 出土である。高台が体部の境よりやや離れた内側にある。高台は内彎気味である。

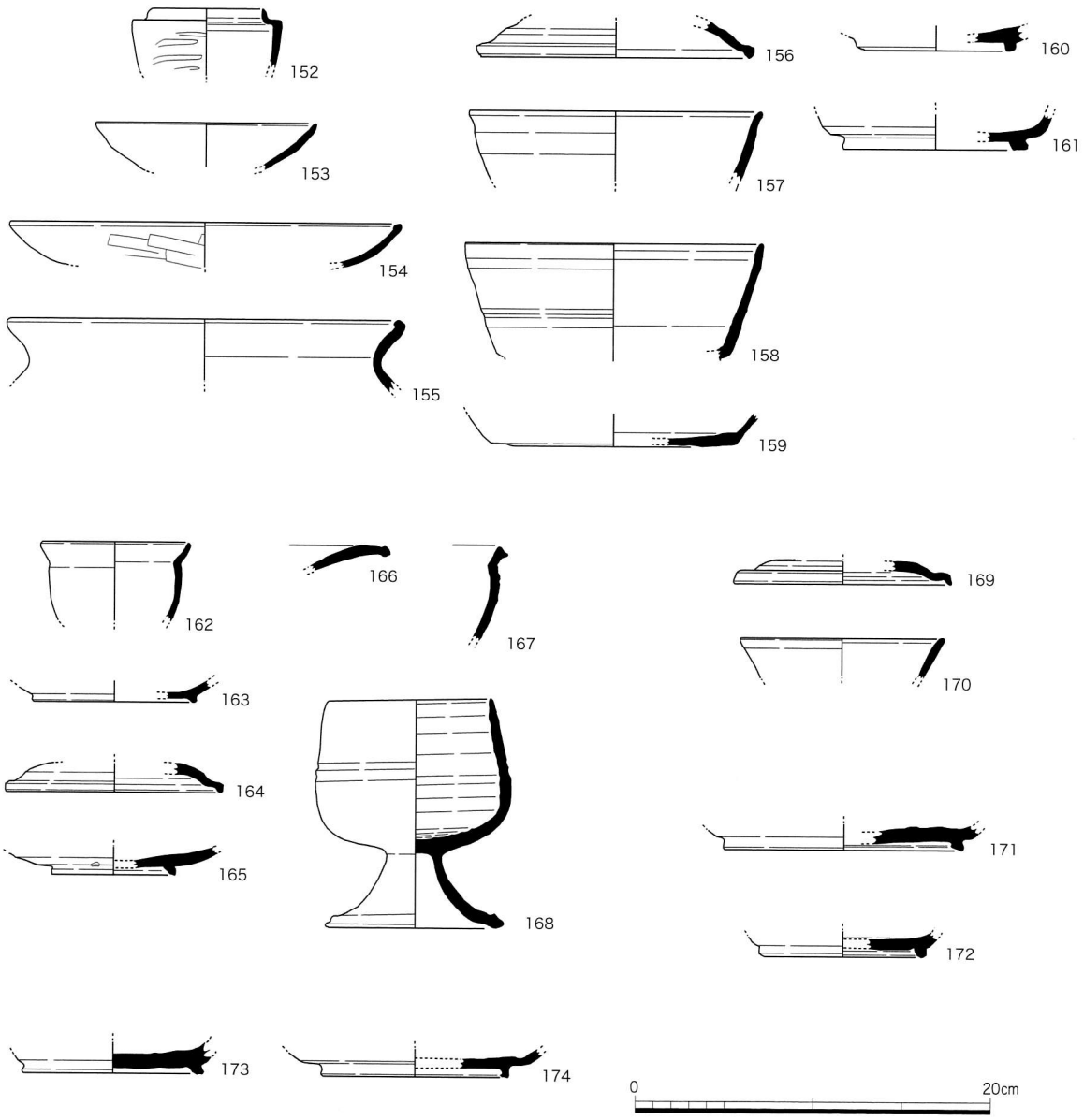


図28　A区北　建物1(152～161)･3(162～168)･5(169･170)･8(171)･
柵11(172)･A区南　建物12(173)･13(174)出土遺物実測図(1/4)

建物 15 出土土器（図 29・図版 54）

土師器（175 ～ 179・193）、須恵器（182 ～ 191・194）、黒色土器（180・181）、無釉陶器（192）などがある。杯 A（175）は復原口径 14cm、口縁端部を丸くおさめる。器表の剥離が著しいが、体部外面ヘラ削りをおこなう。柱穴 655 出土。176 は皿 A で、口縁端部を丸くおさめる。外面ヘラ削り。杯 A（177・178）はやや薄手の作りで、口縁部を強めにヨコナデし、端部は内側に肥厚する。外面は指押さえのままである。179 は強く外反する口縁部をもつ。176 ～ 179 は柱穴 652 より出土、その内 176・177 は柱当り出土である。182 は扁平な宝珠つまみが付く。柱穴 651 出土。183・185 はしっかりとナデ締めた折り返しの受け部をもつ。183 の天井部はやや平坦で低

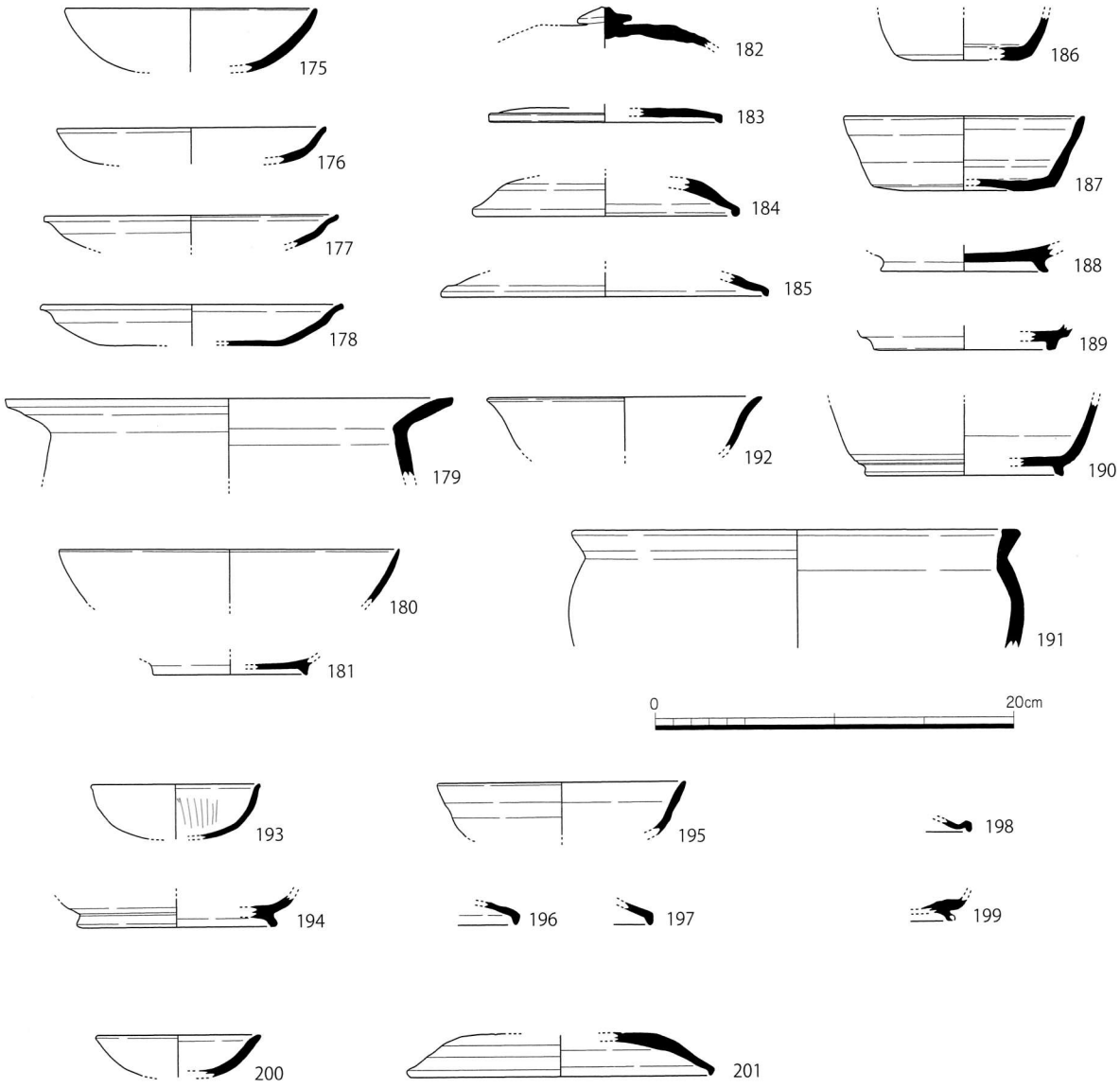


図29　A区南　建物15(175～194)･16(195～197)･17(198･199)･
22(201)･柵18(200)出土遺物実測図(1/4)

い。183は柱穴650柱当り、184は柱穴850、185は柱穴655柱当り出土である。杯Aは底部ヘラ起こしで、186はそのままであるが、187はナデ調整を雑におこなう。ともに柱穴650掘形出土。杯B(188)は踏ん張った高台をもつ。189･190は体部下半及び底部外面をヘラ削りする。鉢(191)は外反する短い口縁部をもち、端部にかけてやや厚みを増し、内外面を丁寧にナデ調整し、端部内側に小さな肥厚部をもつ。188・191は柱穴654、189は柱穴653、190は柱穴656柱当り出土である。黒色土器杯（180・181）は柱穴656より出土、いずれもAタイプのものである。180の外面はヘラ削りをおこなう。杯B（181）は断面三角形のしっかりした高台をもつ。無釉陶器椀（192）は須恵質で、内外面を丁寧にヘラ磨きする。柱穴651柱当り出土である。これらの土器群は9世紀半ばから後半に属する。その他に南庇にあたる柱穴648掘形より土師器杯C（193）

と須恵器杯B（194）が出土している。193は体部内面に放射状暗文を施す。体部外面は指押さえのままである。194はやや踏ん張る高台をもつ。いずれも混入品とみられる。

建物16出土土器（図29）

土師器、須恵器(195～197)がある。杯(195)は口径13.6cmを測る。柱穴717掘形出土。蓋(196・197）は口縁にかけてほとんど屈曲部をもたない。196は柱穴659掘形、197は柱穴682掘形出土である。8世紀後半から末期に属する。

建物17出土土器（図29）

土師器、須恵器（198・199）がある。蓋（198）は屈曲した口縁をもつ、柱穴794出土。杯B（199）は外側に踏ん張る高台をもつ、柱穴792出土である。9世紀前半。

柵18出土土器（図29）

土師器(200)、須恵器がある。200の口縁端部は外反する。内面に放射状暗文をわずかに認める。杯Cの形態を示す。柱穴702掘形出土である。

建物22出土土器（図29）

土師器、須恵器（201）がある。蓋（201）はナデ締めた折り返しの受け部をもつ。天井部に自然釉がふりかかる。柱穴695掘形出土である。

溝534出土土器（図30・図版54）

土師器（210・211）、須恵器（202～206）、緑釉陶器（207～209）、灰釉陶器、黒色土器などがある。土師器皿A（210）は口縁端部を丸くおさめる。摩滅著しく調整不明である。甕（211）は口縁端部を6mm程の幅で平坦に仕上げる。体部外面はタテ方向のハケ目、内面ヨコ方向のハケ目調整をおこなう。202は須恵器の蓋、扁平なつまみをもつ。断面セピア色を呈する。蓋（203・204）折り返しの受けをもち、204は口縁部の屈曲が深い。杯B（205）は断面四角形の高台をもつ。206は鉢の底部、底部外面糸切り痕残る。灰白色を呈する。207・208・209は緑釉陶器椀の底部片。207・208はともに削り出しの輪高台で、内外面を丁寧にヘラ磨きする。胎土は淡（青）灰色、釉は全面に施し、うぐいす色を呈する。209は貼り付けの輪高台をもつ。内外面をヘラ磨きし、全面に施釉する。素地は軟質、釉はうぐいす色を呈する。9世紀後半以降のものである。

溝320出土土器（図30・図版54）

土師器、須恵器（212）、緑釉陶器（213・214）などがある。212は杯の口縁部である。213・214は貼り付け輪高台をもつ。いずれも内外面をヘラ磨きし、全面に施釉する。213の胎土は灰白色、釉はうぐいす色、214は軟質で釉は淡黄緑色を呈する。9世紀後半以降のものである。

溝246出土土器（図30）

土師器（215・216）、須恵器（217～222）、灰釉陶器（223）、黒色土器などがある。椀A（215）は口縁端部を丸くおさめる。杯A（216）は口縁端部が内側に小さく肥厚する。須恵器蓋（217）はナデ締めた折り返しの受けをもち、天井部は屈曲しない。218は折り返しの受けをもち、天井部が浅く屈曲する。219は須恵器杯の口縁部、灰白色を呈し、摩滅する。杯B（220～222）は断面四角形の高台をもつ。灰釉陶器椀（223）は内彎する高台をもつ。体部内外面を施釉する。

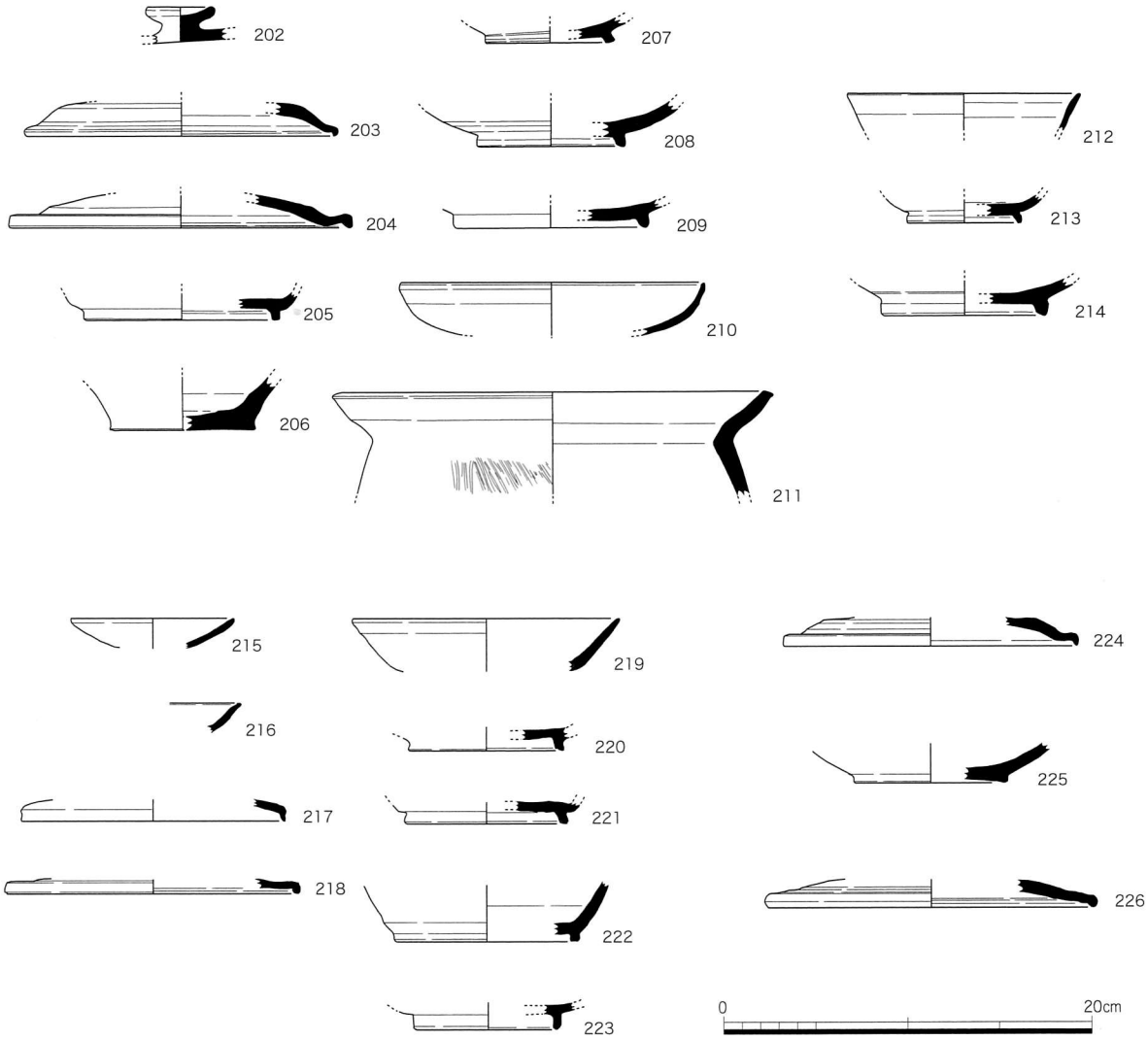


図30　A区南　溝534(202～211)・502(226)・A区北　溝320(212～214)・
246(215～223)・247(224)・283(225)・出土遺物実測図(1/4)

溝 247 出土土器（図 30）

土師器、須恵器（224）がある。蓋（224）は折り返しの受けをもつ典型的な形態を示す。口縁端部はナデ締める。

溝 283 出土土器（図 30）

土師器、須恵器、緑釉陶器（225）がある。225 は椀の底部、切り高台である。胎土は軟質、摩滅が著しく釉は一部のみ残る。

溝 502 出土土器（図 30）

土師器、須恵器（226）がある。蓋は折り返しの受けをもち、端部を丸くおさめる。天井部の屈曲はほとんどない。

2　B区の土器・陶磁器類

縄文時代

土壙 74 出土土器（図 17・図版 50）

深鉢（1）は器面全体に磨消縄文を施す。内彎する口縁部をもち、胴部上半がくびれる。底部を欠く。外面は曲線的な沈線文様を全体に描き、沈線文で囲った内側に縄文を施す。内面は剥離著しく詳細は不明である。胎土は白色砂粒を多く含み、暗褐色を呈する。A区出土の他の縄文土器群と同じく縄文時代後期初頭の中津式土器に比定される。

弥生時代後期から古墳時代前期

竪穴住居 39 出土土器（図 31）

高杯（227）、甕（228 ～ 231）がある。227 は土壙 50 より出土。椀形の杯部をもつ。脚部は欠損する。228 は受け口状口縁部をもつ。口縁部外面に刺突文を施す。229 は外反する口縁部をもつ。体部外面はタタキ目を施す。底部（230）は外面タタキ目を施し、内面ハケ目調整をおこなう。231 は底部外面中央部が凹む。

竪穴住居 40 出土土器（図 31）

壺（232）、甕（233 ～ 235）、底部（236・237）がある。232 は口縁部外面に櫛描き風の文様がある。233 ～ 235 は受け口状の口縁部をもつ。いずれも摩滅が著しく調整不明。236 は外面ナデにより平滑に仕上げ、煤が付着する。237 は底部にかけて窄まる。内外面二次焼成を受けて赤化する。

竪穴住居 42 出土土器（図 31）

高杯（238）、甕（239・240）がある。238 は高杯、浅い杯部をもつ南主柱穴出土。239 は粗いタタキ目を施す。内面はハケ目調整を施す。240 は体部下半を絞って底部を調整する。底部外面は平滑に仕上げる。

古墳時代中期から古墳時代後期

竪穴住居 41 出土土器（図 31）

須恵器杯（241）、土師器甕（242・244 ～ 246）、鉢（243）などがある。241 は床面より出土。口径 10cm 弱で、やや内傾するたちあがりをもち、端面は内傾する。受部は平坦に仕上げる。ヘラ削りは逆時計回りである。242 は壁溝より出土。受け口状の口縁部をもつ。243 は口縁部が段を作って外上方にひらく。摩滅が著しく調整は不明だが、薄手である。244 は外反する口縁部をもち、端部を丸くおさめる。245 は焼土下層より出土。口縁部は強く外反し、端部近くで内側に少し戻す。246 は焼土部分より出土。外反する短い口縁部をもち、端部は丸くおさめる。245・246 ともにクサリ礫を多く含む。

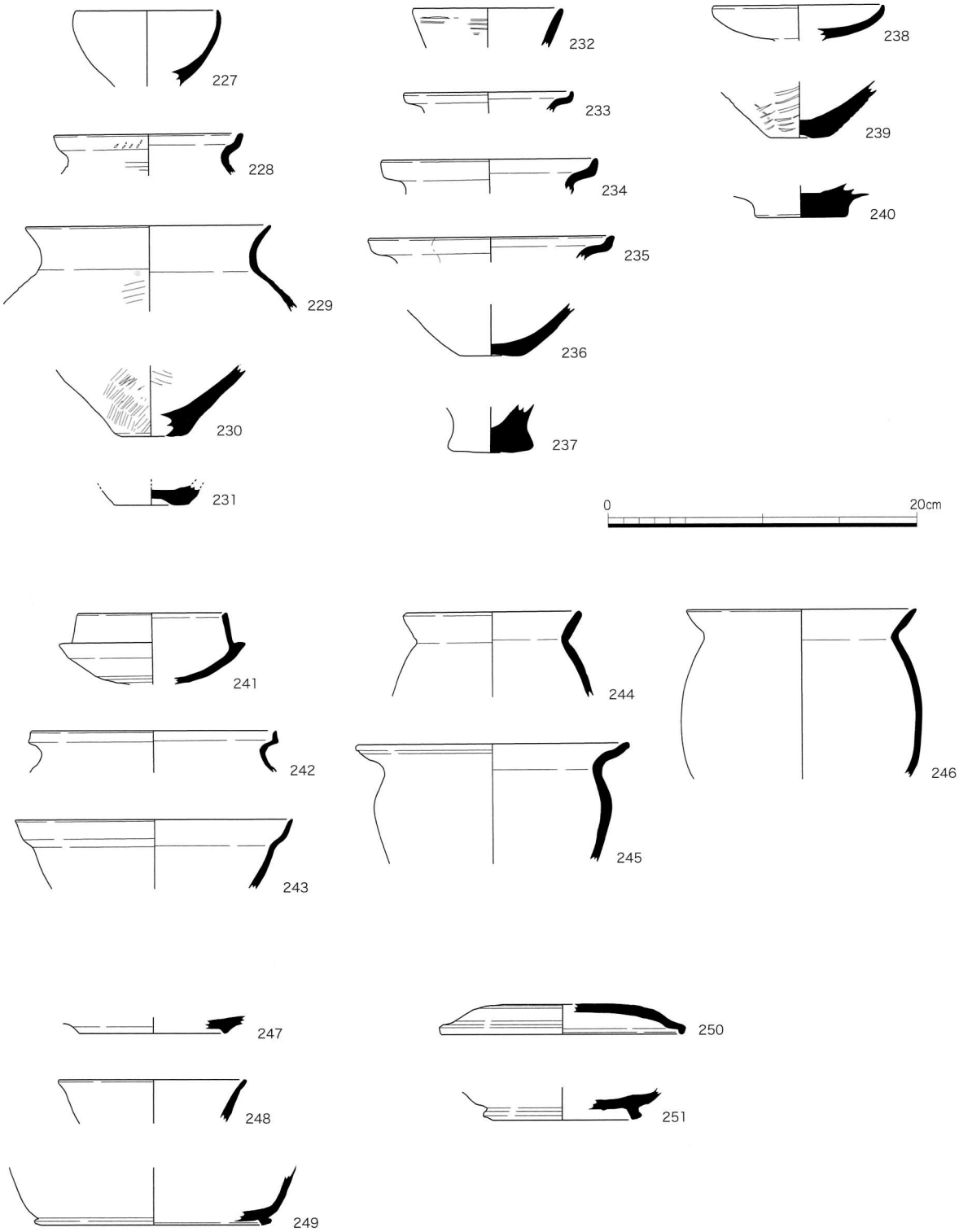


図31　B区　竪穴住居39(227～231)･40(232～237)･42(238～240)･
41(241～246)･建物1(247～249)･溝3(250･251)出土遺物実測図(1/4)

奈良時代から平安時代

建物 1 出土土器（図 31）

土師器（247）、須恵器（248・249）、黒色土器がある。土師器杯 B（247）は柱穴 28 柱当りより出土。断面三角形の高台をもつ。須恵器杯（248）は柱穴 20 より出土。杯 B（249）は柱穴 20 柱当りより出土。外側に踏ん張る扁平な高台をもつ。体部外面はナデて仕上げる。底部外面はヘラ削り調整をおこなう。9 世紀半ばから後半に属する。

溝 3 出土土器（図 31）

土師器、須恵器（250・251）、黒色土器、緑釉陶器などがある。蓋（250）は折り返しの受けをもち、端部を丸くおさめる。天井部はヘラ削りで平坦に仕上げる。つまみが付く。杯 B（251）は体部外面高台際までヘラ削りする。その他に陰刻花文の入った緑釉陶器片がある。

3　その他の出土遺物

土製品（図 32・図版 55）

A 区より大小 5 点の土錘（252 ～ 256）が出土した。252 は溝 795 出土。完存品で長さ 6.3cm、直径 2.9cm、孔の径 0.9cm を測る。253 は溝 179 出土。側面を欠く。残存長 5.5cm、最大復原径 3.1cm、孔の径約 0.9cm を測る。254 は土壙 180 出土。側面半分以上を欠く。孔の径 1.2cm を測る。255 は土壙 254 出土。両端を欠く。残存長 5.9cm、最大径 2.3cm、孔の径 0.8cm を測る。256 は建物 12 の柱穴 578 掘形出土。半分以上を欠く。孔の径 0.4cm を測る。胎土は精良である。

瓦類（図 33・図版 55）

A 区より出土した軒丸瓦（257・258）がある。257 は溝 247、258 は溝 246 より出土。258 は

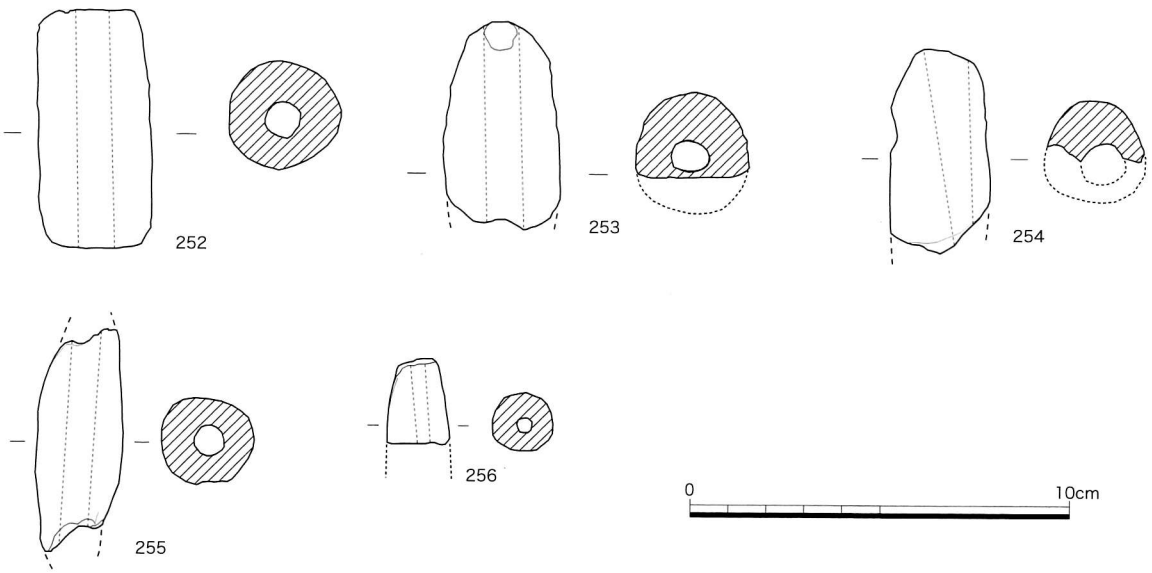


図32　土製品実測図（1/2）

複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。奈良時代。

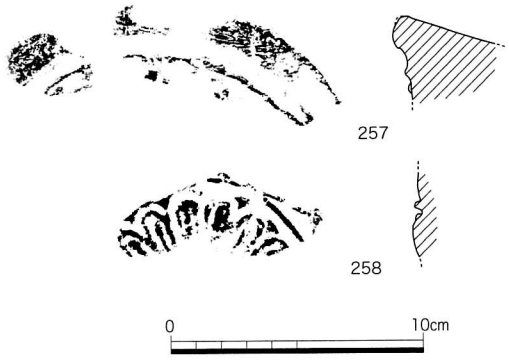


図33　軒瓦拓影･実測図(1/3)

金属製品（図 34・図版 55）

金環（259）、鉄製品（260）がある。いずれもA区出土。259 は土壙 395 上面より出土。全体に緑青がふいているが一部に金が残存する。径約 1.8cm を測る。260 は竪穴住居 743 の床面より出土。刀子状鉄製品である。残存長 12.7cm を測る。

石製品

石鏃（図 35・図版 56）

打製石鏃（261 ～ 263・265）はサヌカイト製である。265 を除きA区出土。261 は凹基式で、A区北の北東隅部ベース直上より出土。基部の一端を欠く。262 は溝 179 より出土。有茎式で、茎の端を欠く。263 は凹基式で、柱穴 107 出土。五角形に近い形状をもつ。265 は有茎式である。B区竪穴住居 40 より出土。片面の大半が未加工のままである。有孔磨製石鏃（264）は粘板岩製で、無茎式である。溝 841 より出土。

臼玉（図 35・図版 55）

臼玉（266 ～ 270）は滑石製である。A区の竪穴住居 260 の床面一カ所より出土。それぞれ径 5 ～ 6mm、厚さ 3mm 程を測る。いずれも片面が平坦で、穿孔の状況からも切り離した様相を呈す。269 は切ったときの擦痕が明瞭に残る。2 個合わせた大きさで孔まで作り、のちに 2 分割をした工程がうかがえる。

管玉（図 35・図版 55）

管玉（271 ～ 273）は碧玉製である。いずれもA区より出土。271 は柱穴 119、272 は溝 841、273 は竪穴住居 730 の壁溝よりそれぞれ出土した。

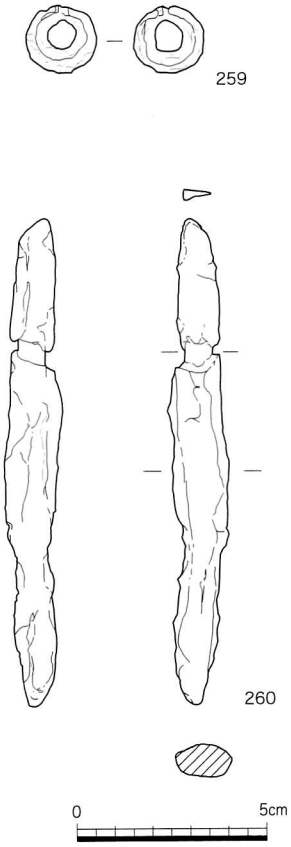


図34　金属製品実測図(1/2)

紡錘車（図 36・図版 55）

紡錘車（274・275）は滑石製である。274 は竪穴住居 303 床面より出土。径 3.5cm、高さ 1.8cm を測る。側面がきわめて平滑である。275 は半分欠ける。割れ面を平滑に二次調整を施す。

石包丁（図 36・図版 55）

粘板岩製の石包丁（276・277）が 2 点ある。276 は竪穴住居 746 床面出土。2 孔を穿つ。刃先が少し波打つ使用痕があり、背面がきわめて平滑である。277 は竪穴住居 260 出土。刃の部分を欠く。穿孔は両面からおこなう。

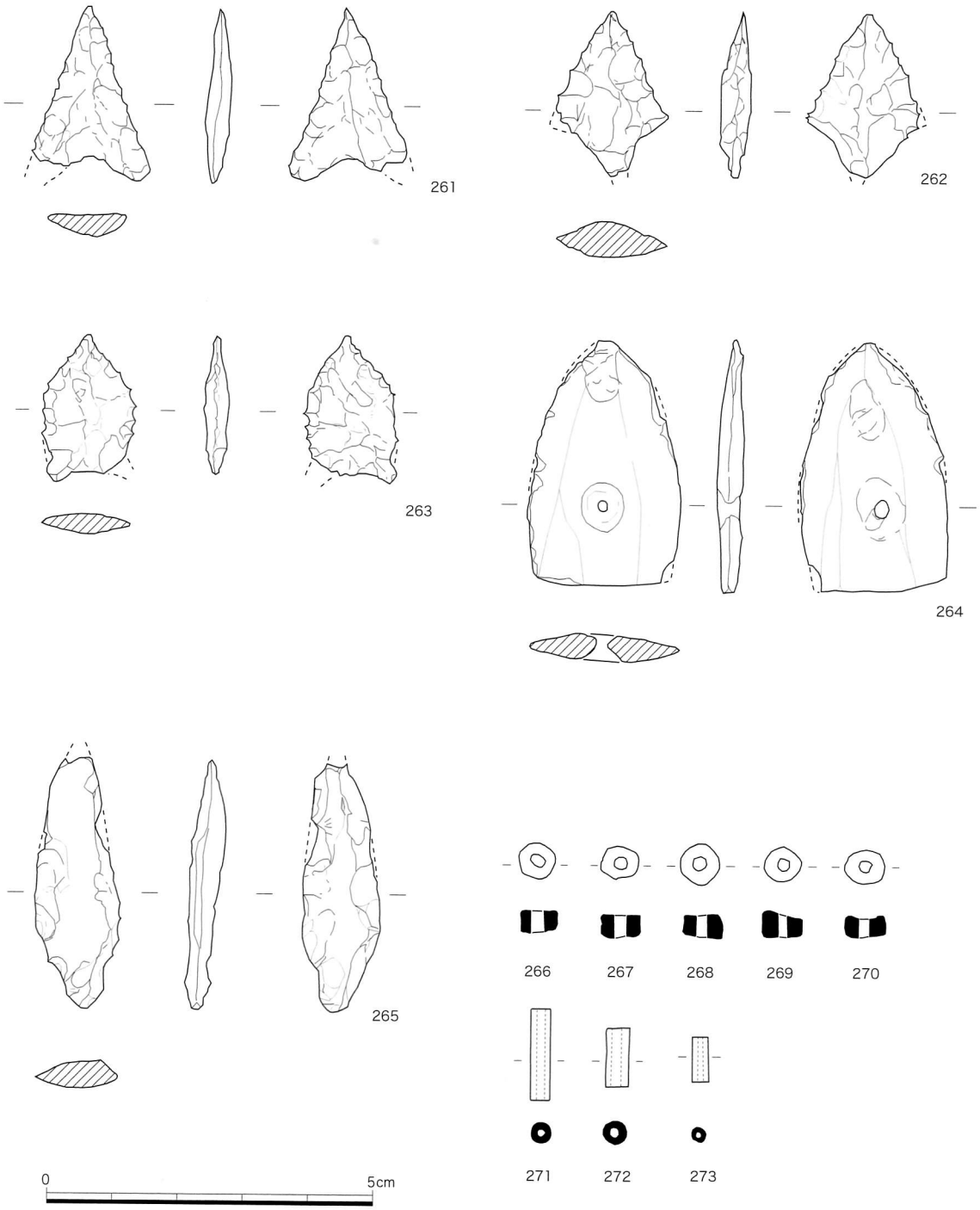


図35　石鏃･臼玉･管玉実測図(1/1)

砥石（図 36・図版 55）

砥石（278）は粘板岩製である。B 区竪穴住居 42 より出土。4 面を研ぎ面として使用する。

不明加工品（図 36・図版 55）

279 は溝 179 出土。両端が切断されたような様態を示す。断面はきわめて平滑で、擦り石として使用したものか。280 は A 区 No. 9 地点の縄文土器とともに出土。粘板岩で斜めに打ち欠いた平坦面をもつ。

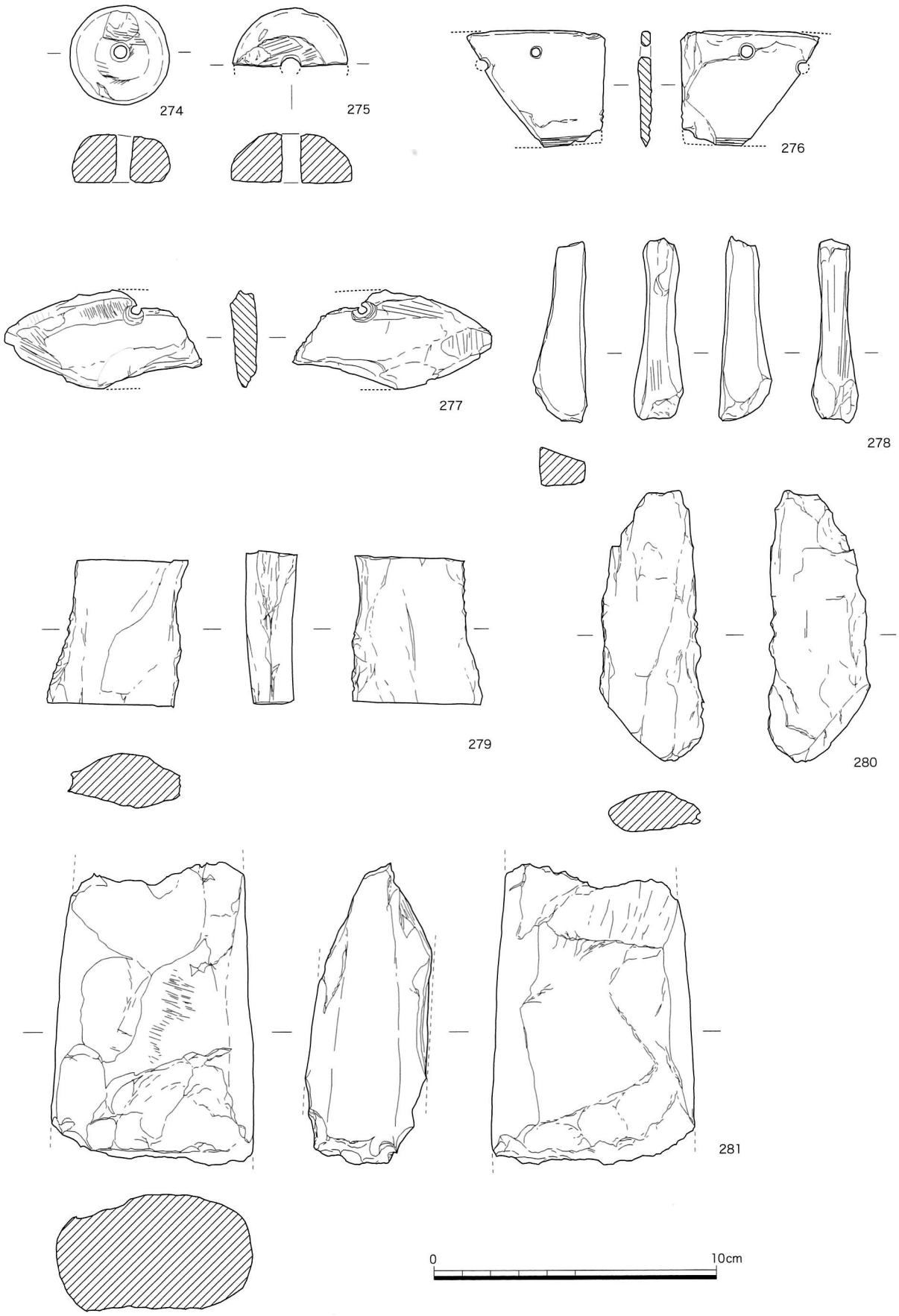
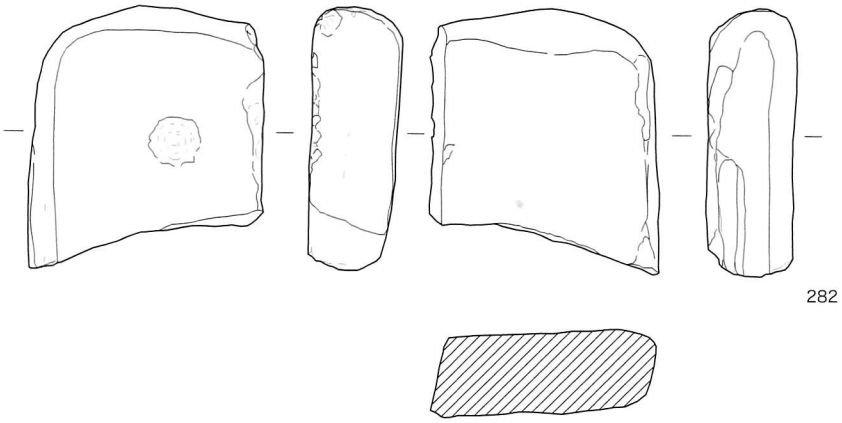


図36　石製品実測図1(1/2)



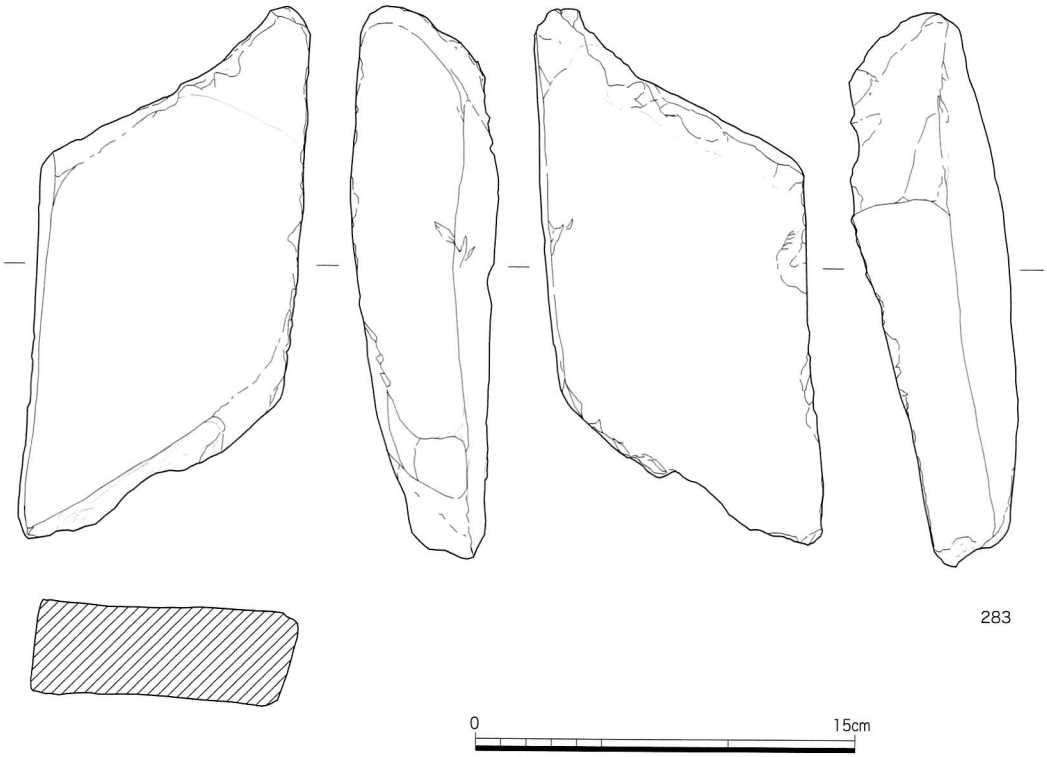


図37　石製品実測図2(1/3)

石斧（図 36・図版 56）

磨製石斧（281）は溝 327 より出土。刃の部分を欠く。剥離面を除ききわめて平滑である。石材は縞模様の淡緑灰色を呈する。

石皿（図 37・図版 56）

石皿（282・283）は 2 点ある。282 は土壙 825 出土。欠いた部分を除く全体が平滑である。平坦面の中央部付近に上から叩いて生じたとみられる径 2cm、深さ数 mm の凹みがある。側面も擦り石として使用した様態を示す。283 は B 区竪穴住居 39 内の土壙 50 西肩部より出土。両端の欠いた部分を除く全体が平滑である。平坦部の一面は浅い凹みをもつ。両端面もきわめて平滑である。

Ⅳ まとめ

今回の調査においては縄文時代後期初頭の埋甕遺構、弥生時代後期から古墳時代後期の竪穴住居址群、奈良時代から平安時代の掘立柱建物跡などを検出した。とくに縄文時代後期初頭に遡る遺構と平安時代前期の大規模建物群の発見は、今までの周辺における調査の再検討を促すものとなった。ここでは、今回の調査で判明した成果と今後の課題について、各時代ごとに概述する。

縄文時代

縄文土器の検出は、A区南調査区の建物16の柱穴687（No. 5地点）の断ち割り中に、弥生時代の遺構の基盤層である黄褐色砂泥層から磨消縄文土器（土器番号5～8）が出土したことがきっかけとなったものである。当初は二次堆積におけるものと認識したが、B区竪穴住居42の床面下で磨消縄文土器の埋甕遺構が出土し、西京極遺跡における縄文時代後期初頭の遺構の存在が初めて明らかとなった。土壙74は掘形の底に小石を敷いており、その上に土器を据える。このような埋甕遺構に伴い小石を敷く類例は他ではほとんどみられないとのことである。[註1] A区南調査区において9地点で同時期の縄文土器が出土し、慎重に精査したが、遺構に伴うものかどうかは確認できなかった。縄文土器の検出は主として各遺構断面においてのものであったため、弥生時代の遺構の基盤層である黄褐色砂泥層をすべて掘り下げて確認する必要があるものと判断したが、残念ながら当初の制約の下に一部断ち割りで確認するにとどまった。今後は当地近辺における調査では、弥生時代の調査で終わることなく、その下層遺構の調査を考慮した体制をもって対応する必要があろう。なお、そのほかに縄文土器の小片が、竪穴住居712・730・743・746・750・788・830、溝327・534・795などの埋土に混入して出土している。

弥生時代中期から古墳時代前期

A区北調査区の竪穴住居350の下層で検出した落ち込み414及び溝841ともに自然流路あるいは湿地状のもので弥生時代中期から弥生時代後期の遺物を含む。それは当地周辺が弥生時代後期になって安定した地勢となったことを示している。今回検出した最古期に属する竪穴住居址群の大半が弥生時代後期後半から庄内式併行期にかけてのものであることからもうかがえる。今までの周辺の調査[註2]より弥生時代中期には希薄に点在していた住居が弥生時代後期になり地勢の安定とともに密な集落を形成していったものと考えられ、この時期に西京極遺跡の一つの画期性を求めることができる。この時期における竪穴住居の特徴としては、A区竪穴住居171の主柱穴203、B区竪穴住居42の主柱穴73のいずれもが床面より0.7～0.8mの深さまで柱を据えており、しかも先細であたかも打ち込んだ状況を呈することがあげられる。実際断ち割りにおいてようやく柱底を確認できたもので、柱構築時に最後は打ち込んで固定したものと考えられる。[註3] また、特筆すべきものとしてはA区竪穴住居712の壁溝内での壁柱の検出がある。この住居は床面に炭化

した建築部材と炭・焼土が散在し、焼失住居がそのまま遺棄された状況を呈する。その壁溝内において検出した壁柱3カ所のうち2基が、炭化した状態で原位置を保ち立ったまま出土した。各壁柱の径は0.04m、残存高は0.15m程であった。壁柱の材質は竹とみられる。その他、貼床を認めた竪穴住居は、B区竪穴住居40でのみ薄く認めた。出土土器の特徴としては、ラセンタタキ手法の甕及び受け口状口縁に刺突文を施す甕などがいずれの竪穴住居からも出土しており、山城におけるこの時期の特徴を良く示している。

古墳時代中期から古墳時代後期

5世紀から6世紀前半にかけての遺構遺物は希薄である。6世紀後半から7世紀後半にかけてのものが大半を占める。今回検出した竪穴住居40基程の内30基近くがこの時期に属する。いずれの竪穴住居も壁溝に沿ってカマドを据えたとみられる焼土の集積を認めたが、そのほとんどが粘土で築成した作り付けの状況を呈さない。作り付けのカマドを設えたとみられる竪穴住居は、竪穴住居260下層で検出した竪穴住居402のカマド403があるが、カマド自体は著しく破壊された状況であった。また竪穴住居303のカマド410には支柱石が原位置を保って出土したが、炭・焼土塊の集積を検出したのみで、作り付けのカマドの痕跡を検出することはできなかった。今までの西京極遺跡における調査においても同様な状況で検出され、問題の一つとされてきたが、土壙426において竈形土器の庇部分が出土し、西京極遺跡において初めて移動式カマドの存在が明らかとなり、この集落におけるカマドの問題解決の糸口を得た。竈形土器と共伴して出土した須恵器杯は大型であるが、蓋の口縁端部は明確な端面をもたず、丸くおさめており、TK10の新しい様相を呈する[註4]。これらは今回の調査で検出した6世紀以降の遺構の土器としては最古期の一群に属し、また竪穴住居群もこれ以降のものが大半であり、竈形土器（韓竈）は朝鮮半島からもたらされたものと考えられていることからも、古墳時代後期以降の西京極遺跡の集落の性格を考える上で重要な発見となった。移動式カマドはステージを作り、あるいは粘土などで固定して使用されたとみられるが、今回の多くの竪穴住居で検出した焼土塊の集積はそのことに由来するものとも考えられる。竈形土器が出土した土壙426は掘形底部に非常に堅い焼土塊と炭が認められ、また竈形土器の庇の下面及び裏面全体に煤が付着しており、日常的に使用したことをうかがわせ、祭祀的な意味合いは薄いものと考える。このほかに竈形土器とみられる土器片は数点程出土している。

この時期の竪穴住居で貼床を確認した住居はA区竪穴住居777・788のみであるが、明確な貼床をもたない竪穴住居においても、主柱穴の掘形を確認することが難しく柱根跡だけを検出したものが多かったが、掘形は断ち割りにおいて確認することができた。壁溝はいずれも全周するようである。

A区の溝317からは7世紀後半の土器類とともに円筒埴輪片が出土している。また7世紀後半の土器類が出土した溝327とで囲まれた土壙395上面から金環が1点出土している。マウンドなどは全く認められなかったものの、この両溝は古墳の周溝の可能性がある。溝332も同様な形

態を示すが、大半が調査区外となり詳細は不明である。今回の調査地より北側へ20m程離れた同じ十二町の調査[註5]では古墳時代後期の溝の上面から三輪玉が出土しており、周辺に古墳の存在が想定されている。また、その地点より西へ60m程離れた公共下水道の立会調査で、子持勾玉が採集されており、そのような古墳に伴う遺物の存在は、明らかにこの近辺に古墳群があったことを示している。今回の調査によって、当地においては8世紀末から9世紀代にかけて大規模な邸宅跡が存在したことが明らかとなっており、この周辺にあった多くの古墳が、平安京造営に伴って広範囲に削平された可能性を強くうかがわせるものである。

この時期の掘立柱跡は、柱の掘形がいずれも座標北に対して西へ45°前後の振れをもち、その振れによって後世の柱穴とをおおむね選別することが可能である。大半の竪穴住居の振れとほぼ照応する。そうした振れをもつ柱穴跡を全体で40基余り検出したが、建物として確認したのは、柵4・21、建物19（あるいは柵）のみである。1間以上に拾える柱間は少ない。

奈良時代から平安時代

調査区全域にわたって掘立柱跡を多数検出したが、建物の各時期については、建物の軸線の振れによっておよその時代の変遷をうかがうことができる。古期に属する建物群は座標北に対して東へ振れ、時代が下がるに従い西へ振れていく傾向をもつ。掘立柱建物跡及び溝跡は、以下のⅠ～Ⅴ期に大別できる。

Ⅰ期　建物2・建物16・(柵18)

Ⅱ期　建物1・(建物8)・建物17・柵7

Ⅲ期　建物3・建物9・建物12・建物13・建物15・建物22・B区建物1

Ⅳ期　建物5・建物6・(建物10)

Ⅴ期　溝320（B区溝3）・溝534・溝246・溝247・溝283・溝502・(柵11)

Ⅰ期の建物は座標北に対して東へ5°以上の振れをもつ。建物16の掘形出土土器群は8世紀後半以降のものである。Ⅱ期の建物は座標北に対してわずかに東に振れ、Ⅲ期の建物はほぼ座標北に一致する。Ⅱ期の建物1出土土器群は、土師器壺Eの存在、土師器の椀、Ⅲの外面がC手法であることから、平安京の土器編年[註6]のⅠ期中に属し、8世紀末から9世紀前半に位置付けられ、Ⅱ期の建物群は、平安京造営当初に遡る一群と考えられる。Ⅲ期の建物3、建物15出土土器群は黒笹14号窯形式の灰釉陶器、蛇の目高台の緑釉陶器、無釉陶器が含まれ、土師器杯の形態などより9世紀中頃を中心とするⅡ期古～中に属するものである。Ⅲ期の建物群は整然とした配置をなし、なかでも建物3、建物15は大規模な建物である。いずれも径0.4m前後の柱をもち、これは淳和院[註7]や朱雀院など院の御所で検出されたものと同規模で、この十二町における住人がきわめて高位な人物であることを示している。Ⅳ期の建物は座標北に対して西へ5°前後の振れをもつ。出土遺物が少ないものの建物5出土土器は9世紀後半代のものである。Ⅴ期の溝群は、いずれも建物群との関係性は認められない。東西溝320と534は同時期の溝で対になるものと考えられ、その両溝の心心18m（60尺）を測る。これは大路の広さ、つまり当地の十二町に南

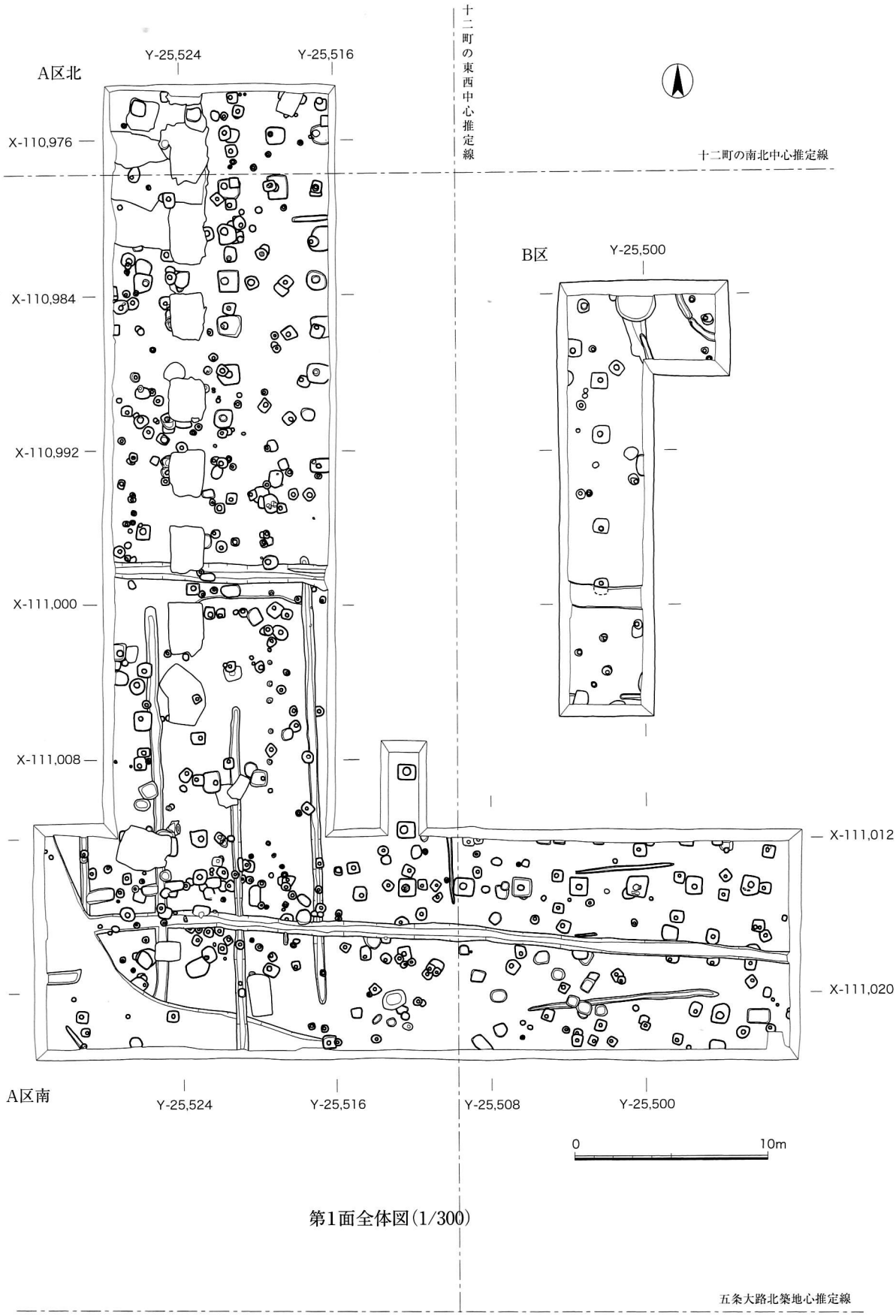
報告書抄録

ふりがな	へいあんきょううきょうごじょうしぼうじゅうにちょう・にしきょうごくいせき
書　　名	平安京右京五条四坊十二町・西京極遺跡
副 書 名	西院月双町の調査
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	家崎孝治　上村憲章
編 集 機 関	古代文化調査会
所　在　地	〒658－0032　神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地125－1404
発行年月日	2010年3月31日

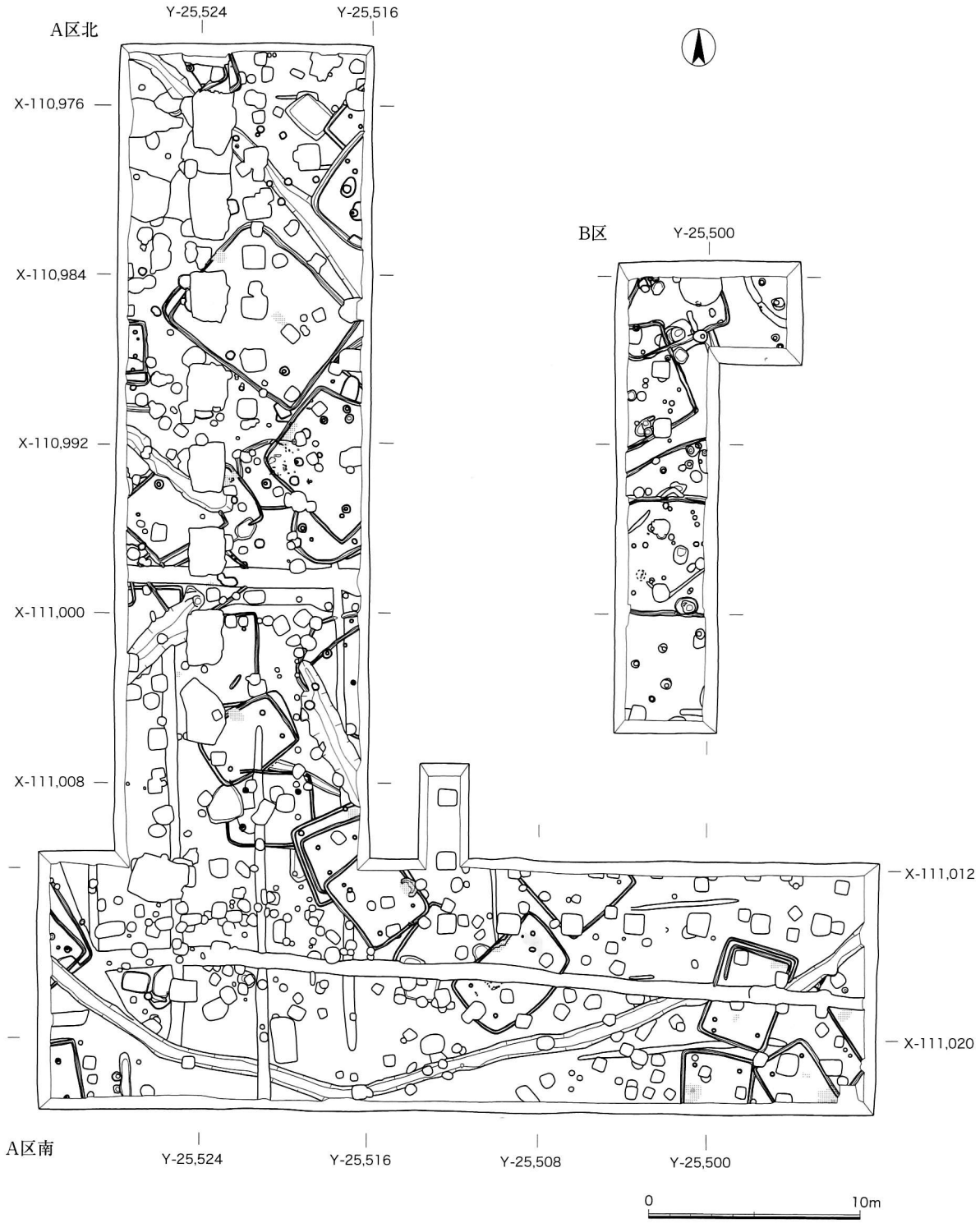
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京右京五条四坊十二町西京極遺跡	京都市右京区西院月双町9	26100		34度59分56秒	135度43分14秒	2008.09.20～2009.01.21	1,071㎡	マンション建設

所収遺跡	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京右京五条四坊十二町西京極遺跡	都城跡 集落跡	縄文時代～平安時代	土壙、柱穴、溝、竪穴住居	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、陶器、石製品、土製品、金属製品	縄文時代後期初頭の埋甕遺構、弥生時代後期～古墳時代の竪穴住居・溝、奈良時代～平安時代の建物跡

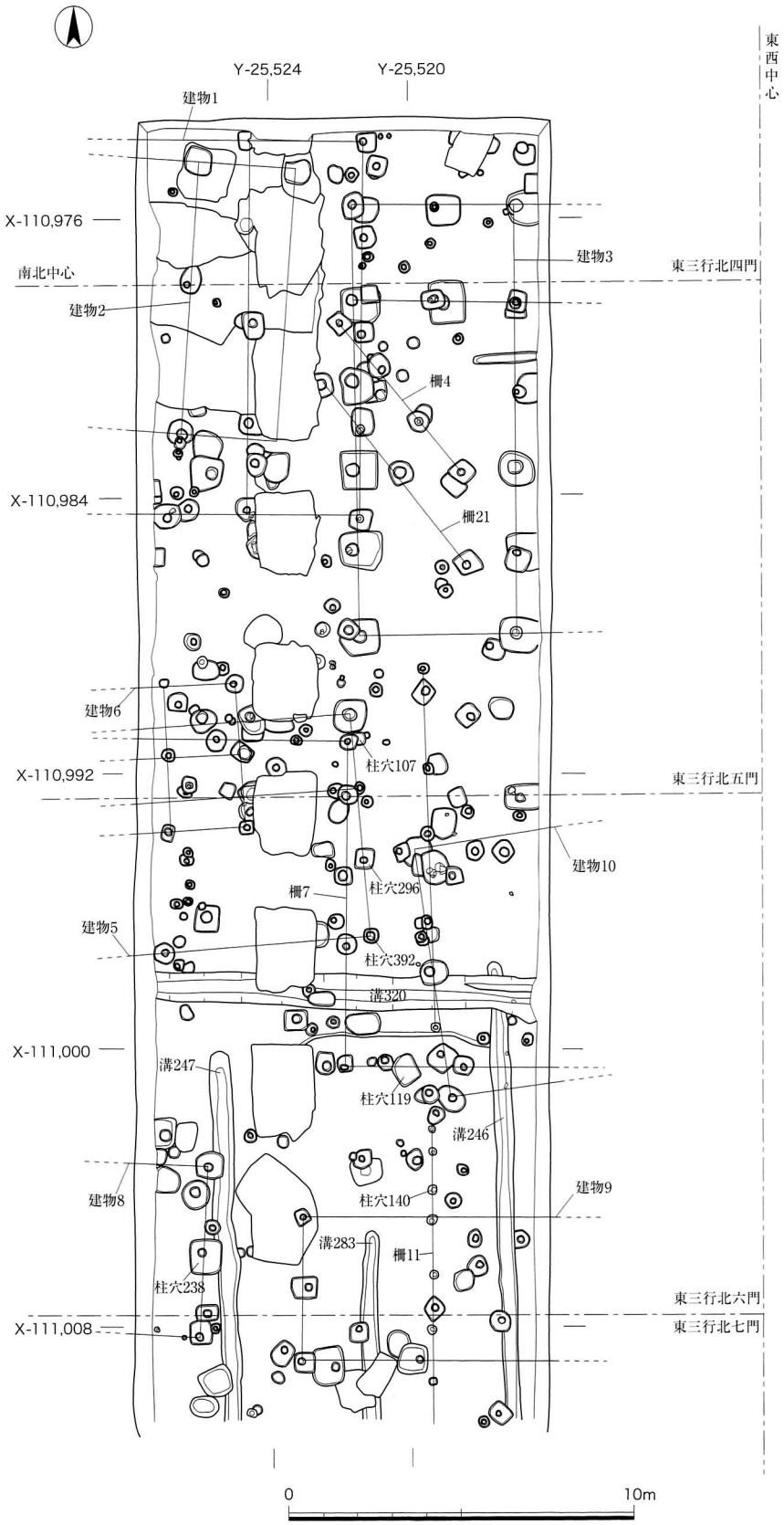
図　　版


A区北
Y-25,524
Y-25,516
十二町の東西中心推定線
十二町の南北中心推定線
X-110,976
X-110,984
X-110,992
X-111,000
X-111,008
B区
Y-25,500
X-111,012
X-111,020
A区南
Y-25,524
Y-25,516
Y-25,508
Y-25,500
0
10m
五条大路北築地心推定線
五　条　大　路

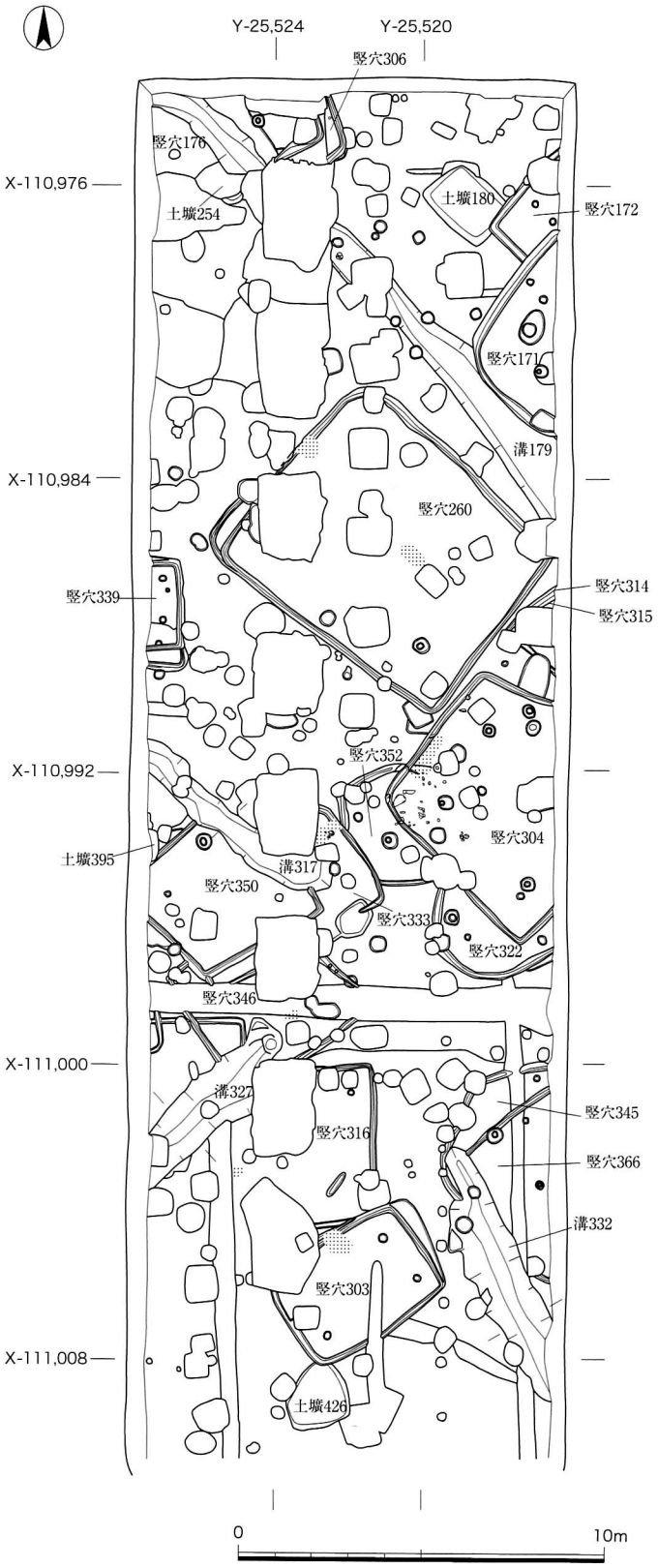
第1面全体図(1/300)


A区北
Y-25,524
Y-25,516
X-110,976
X-110,984
X-110,992
X-111,000
X-111,008
B区
Y-25,500
X-111,012
X-111,020
A区南
Y-25,524
Y-25,516
Y-25,508
Y-25,500
0
10m

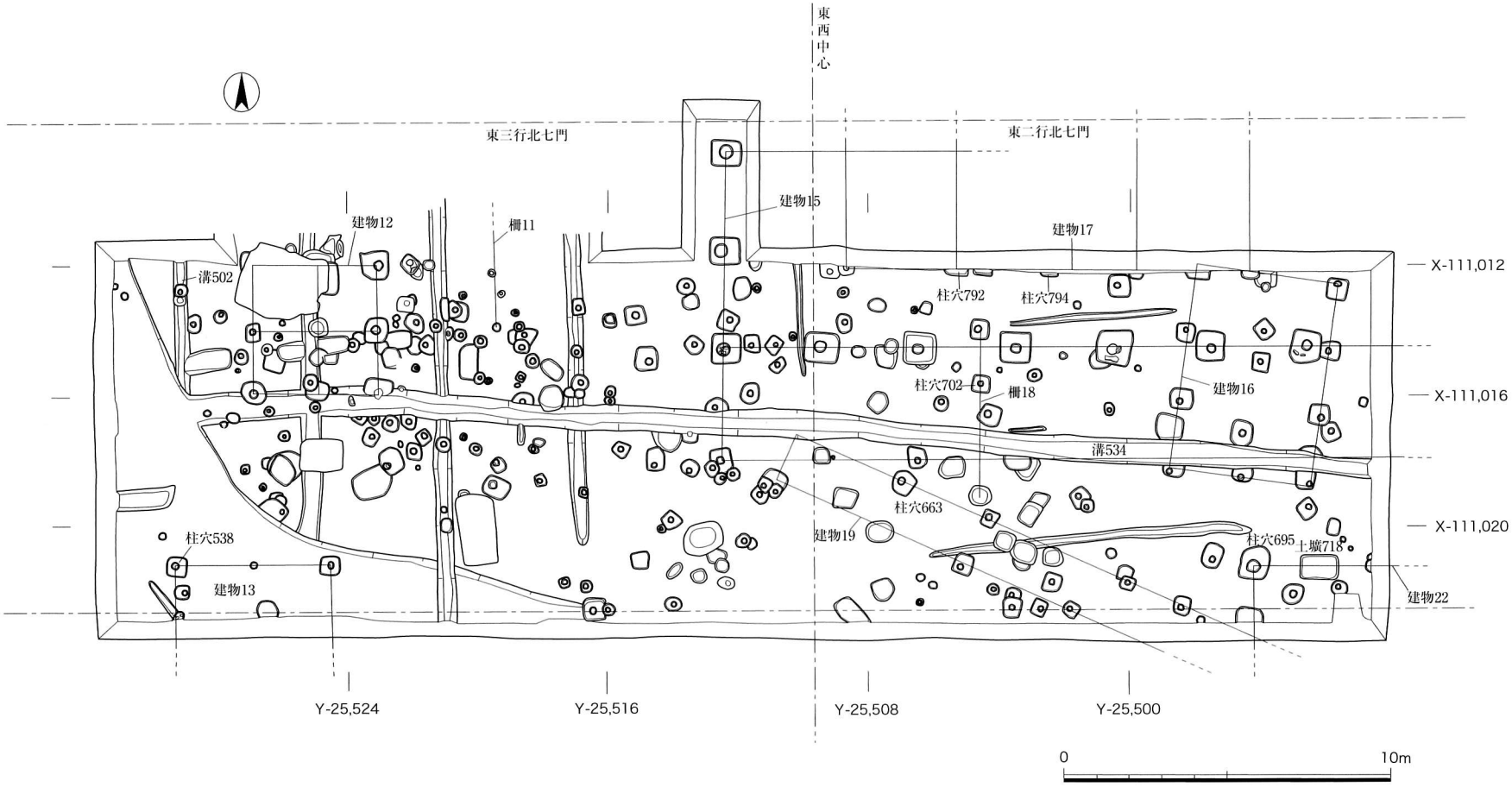
第2面全体図(1/300)



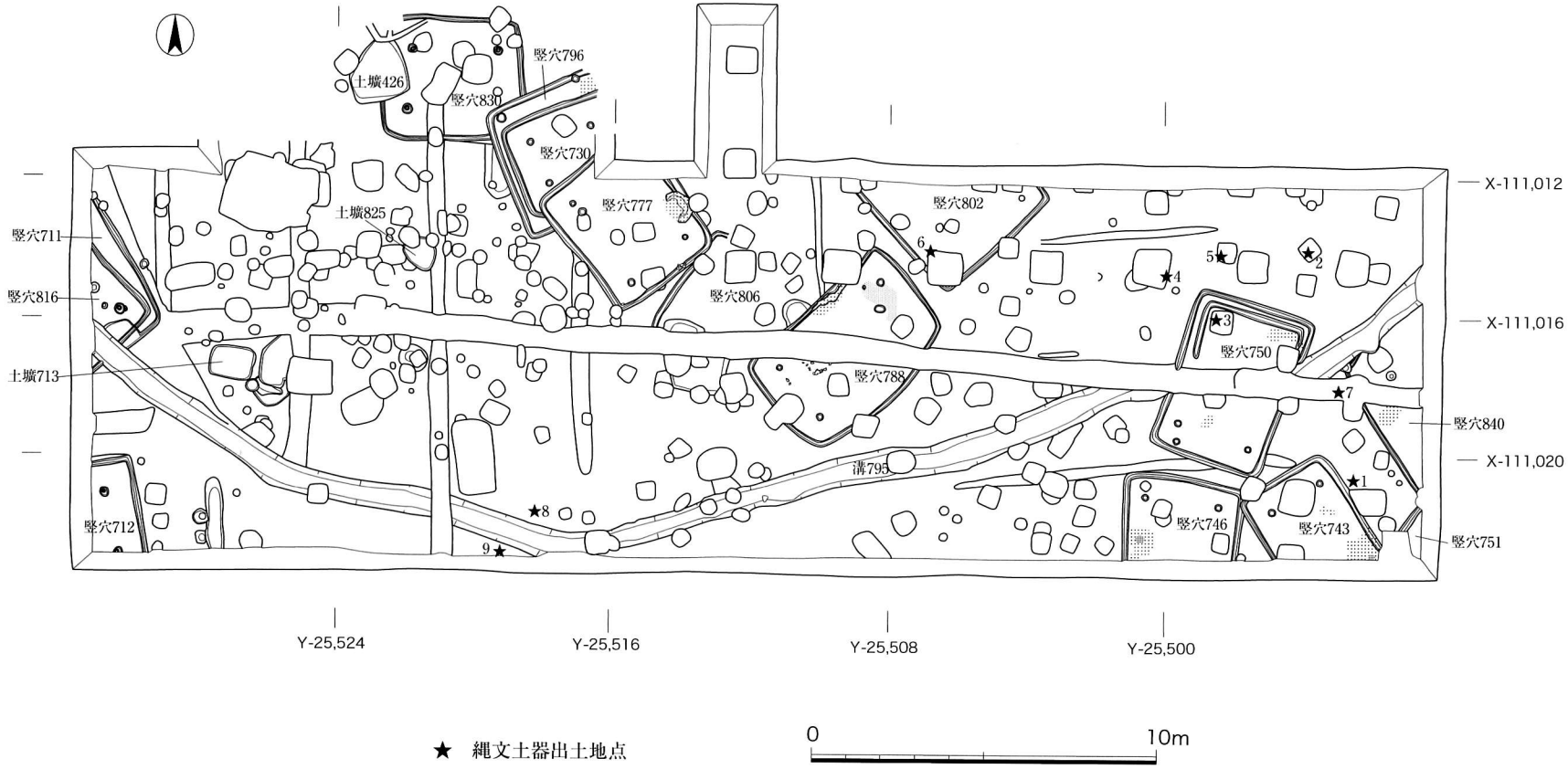
A区北　第1面遺構実測図(1/200)



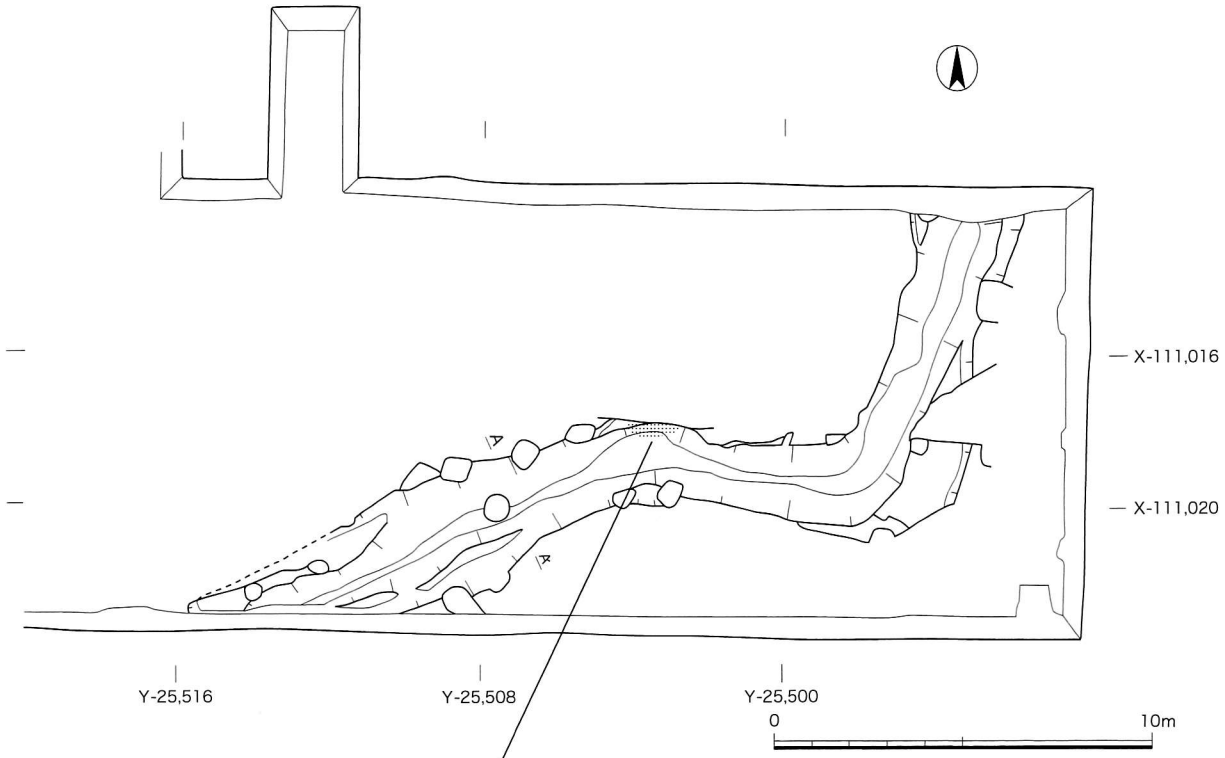
A区北　第2面遺構実測図(1/200)



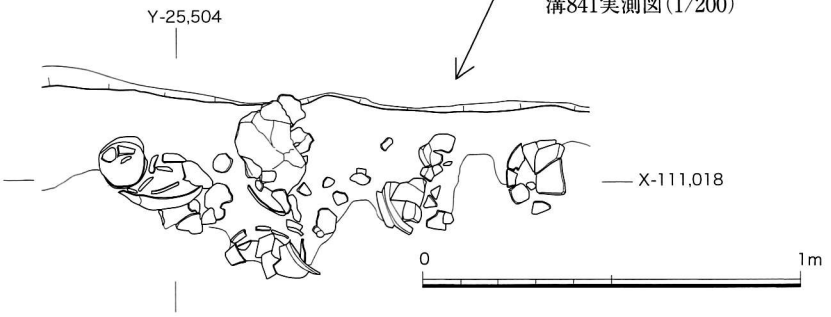
A区南　第1面遺構実測図(1/200)



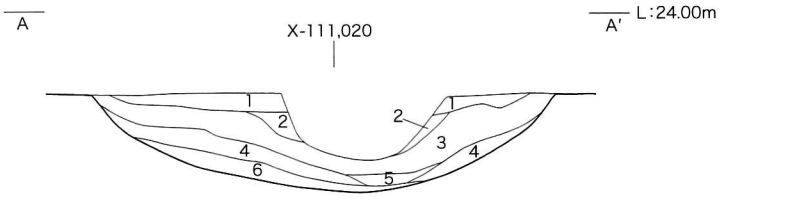
A区南　第2面遺構実測図(1/200)



溝841実測図(1/200)



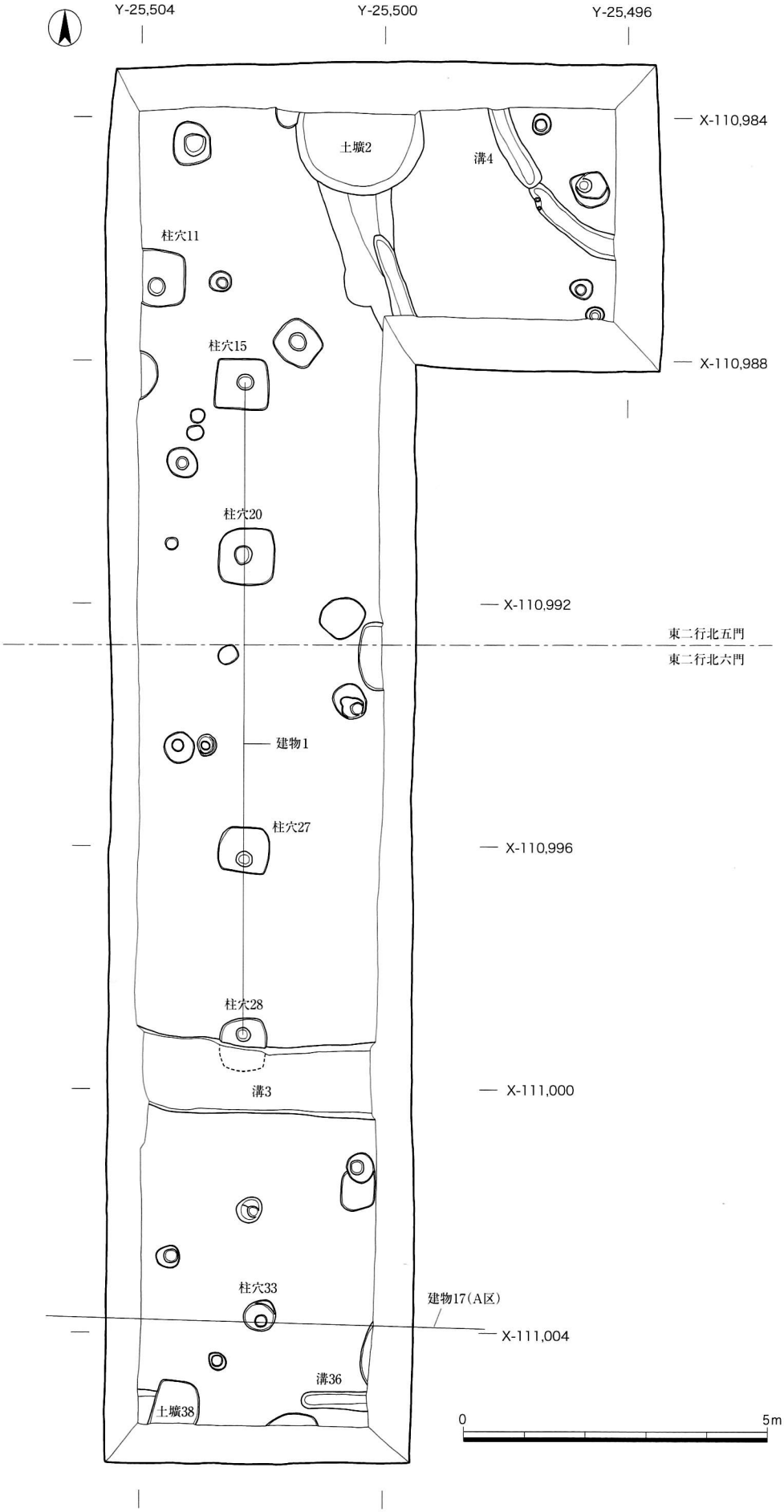
土器出土状況実測図(1/20)



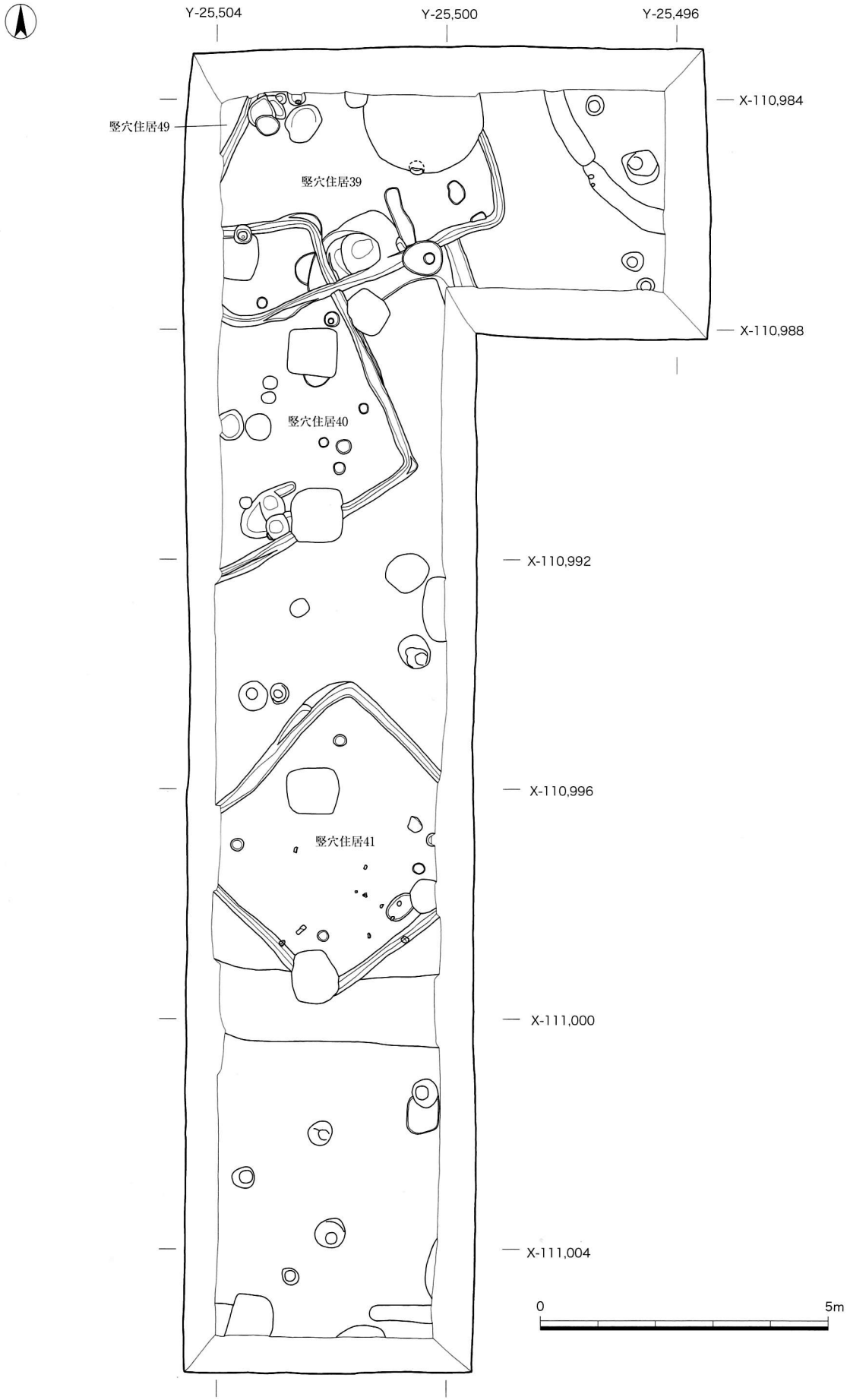
1 10YR4/4褐色砂泥
2 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
3 10YR3/4暗褐色砂泥(炭混)
4 7.5YR4/3褐色砂泥
5 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
6 7.5YR4/4褐色砂泥(炭混)

断面実測図(1/40)

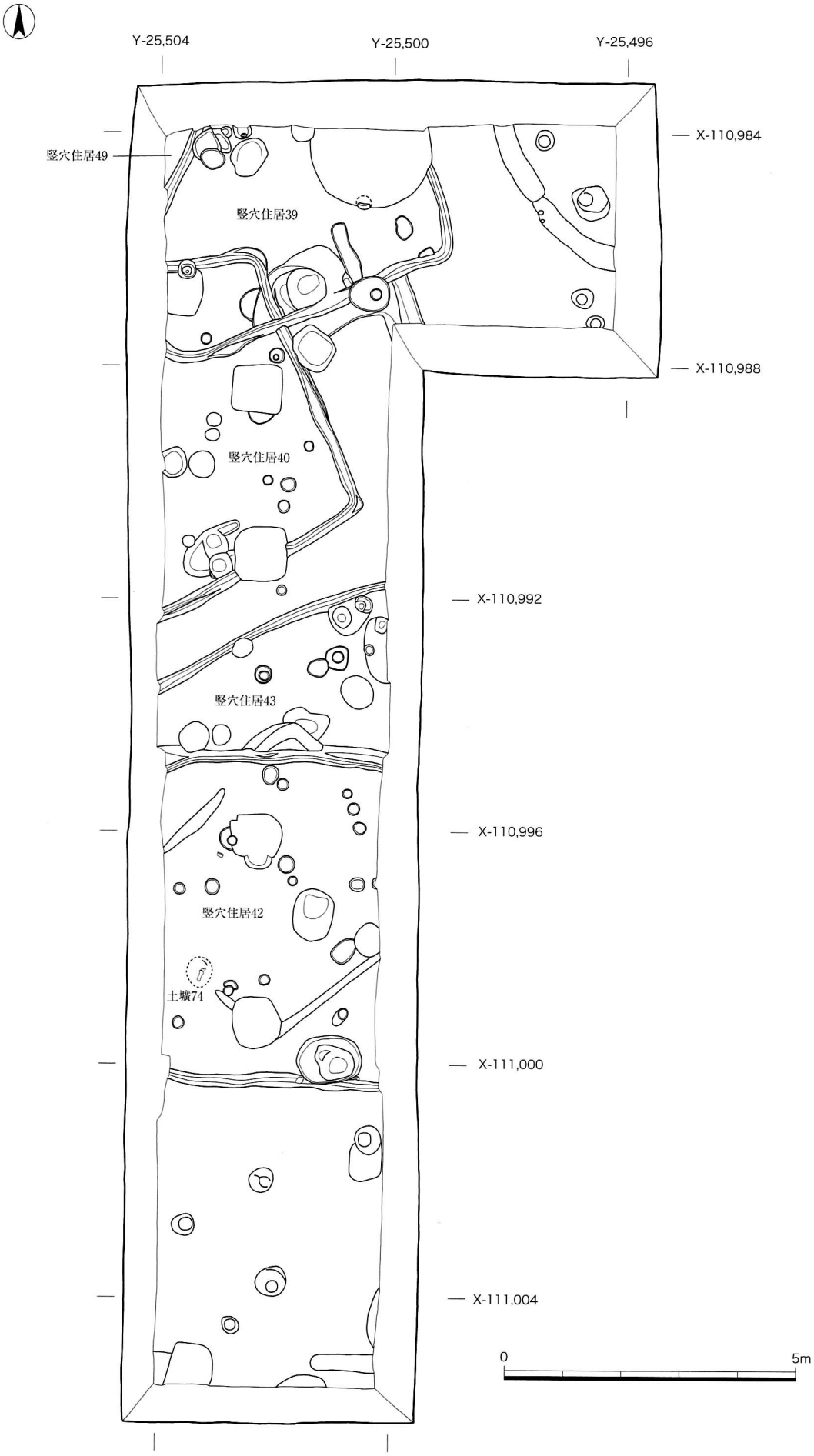
A区南　第3面溝841実測図(1/200・1/20・1/40)



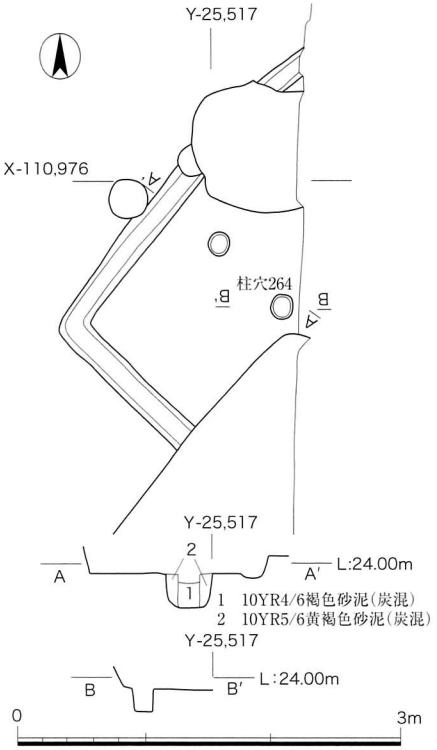
B区　第1面遺構実測図1（1/100）



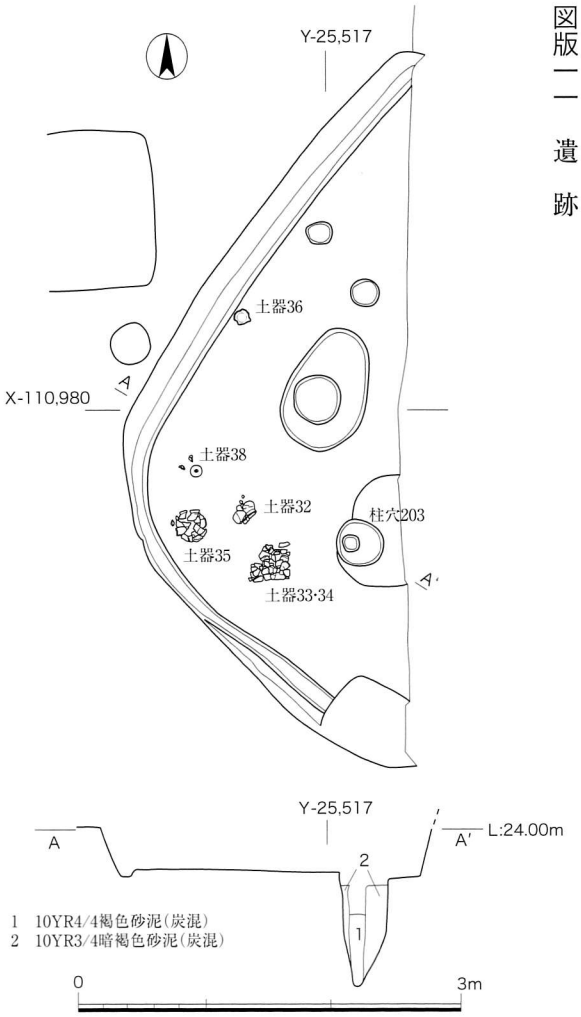
B区　第2-1面遺構実測図(1/100)



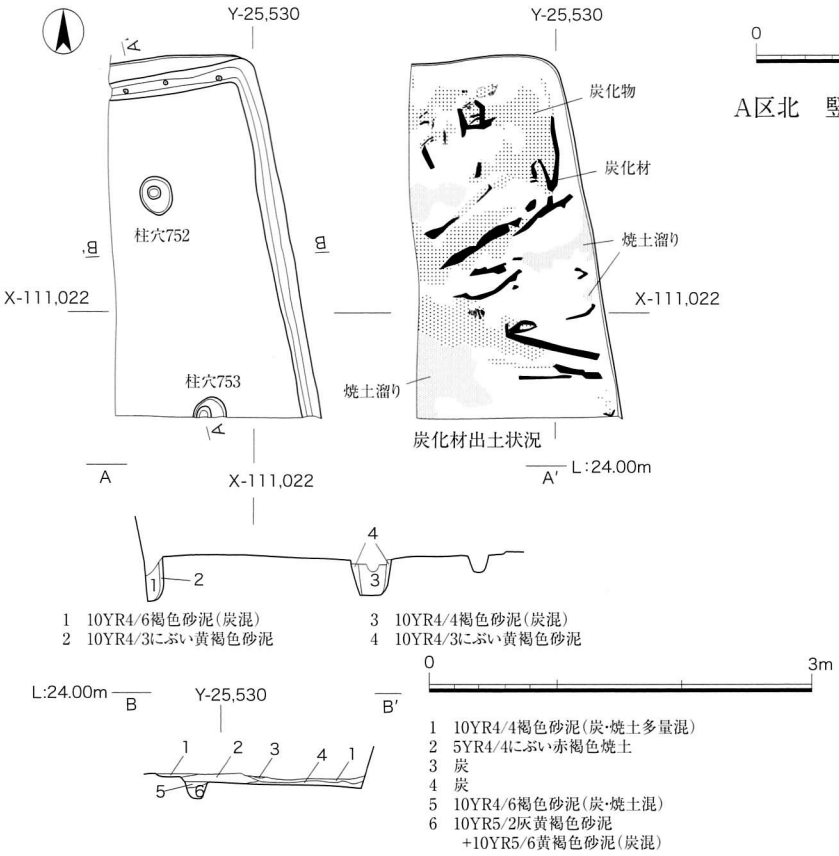
B区　第2−2面遺構実測図(1/100)



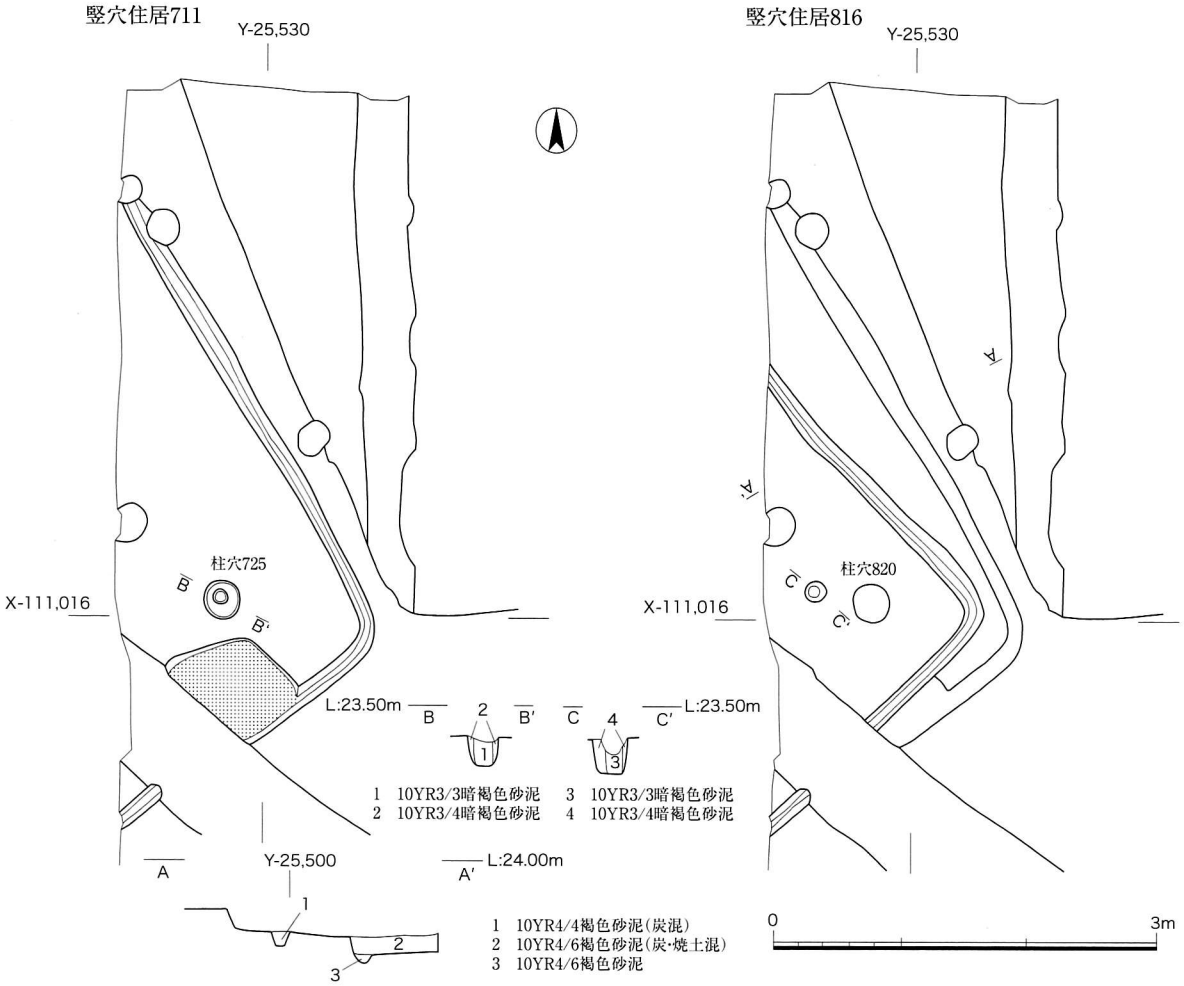
A区北　竪穴住居172実測図(1/60)



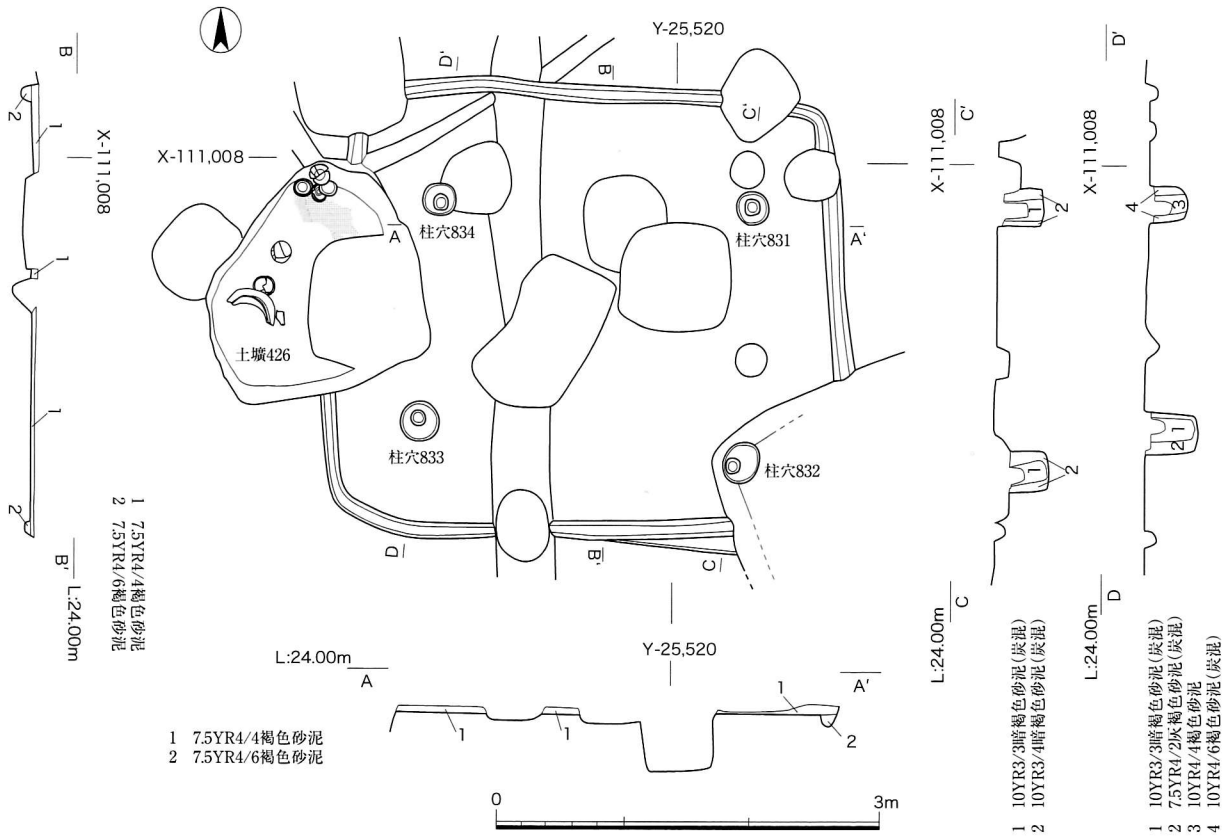
A区北　竪穴住居171実測図(1/60)



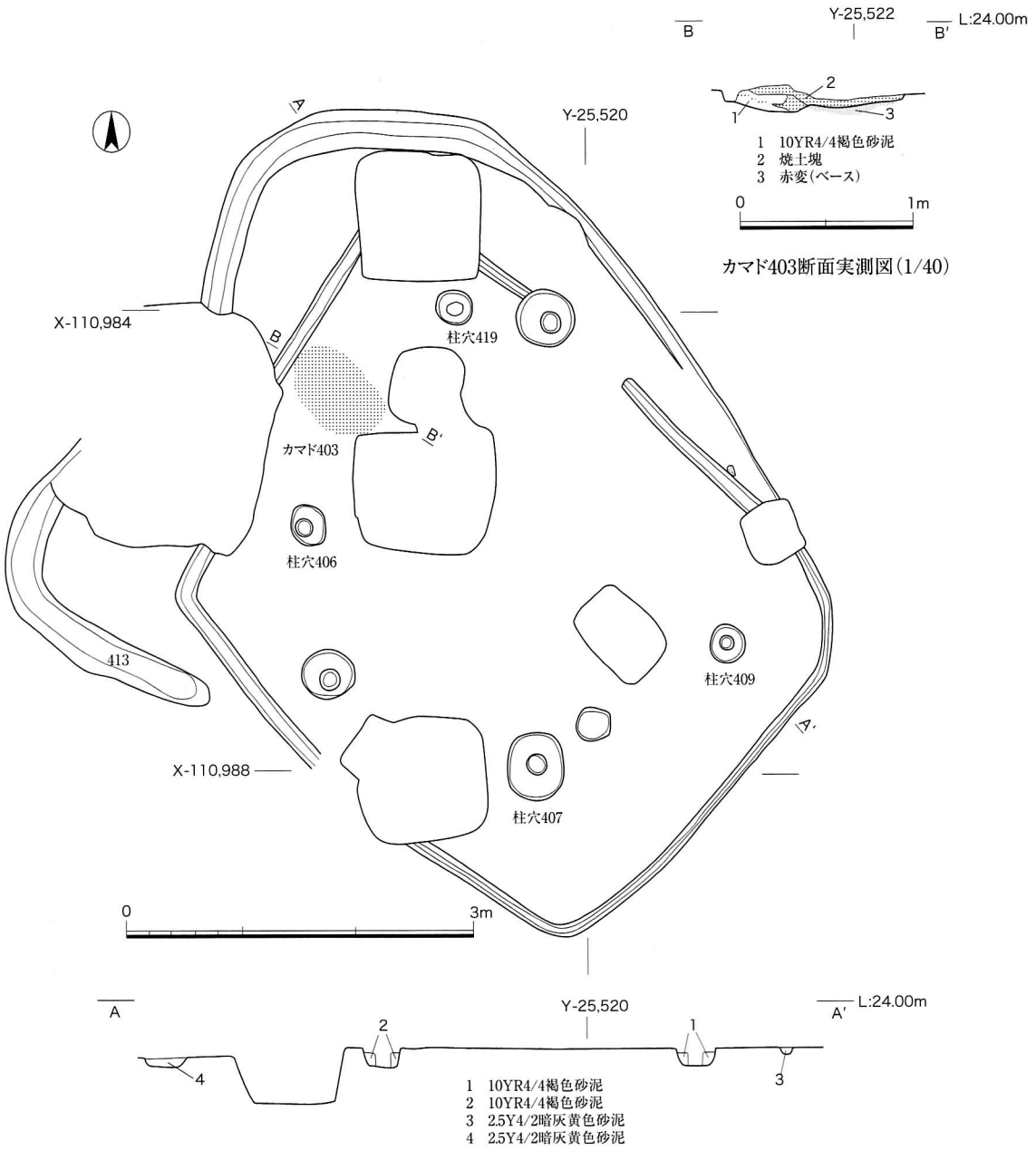
A区南　竪穴住居712実測図(1/60)



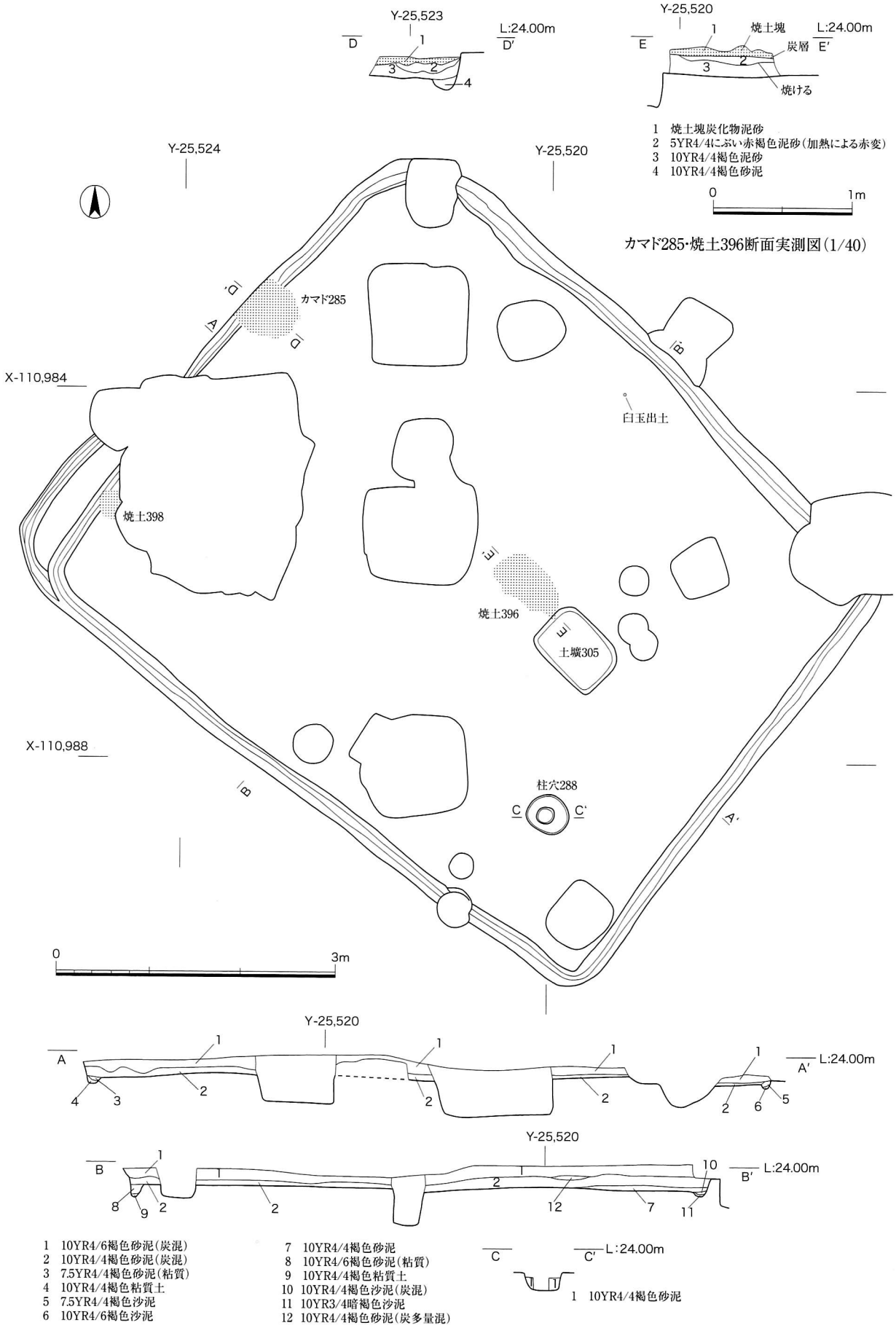
A区南　竪穴住居711・816実測図(1/60)



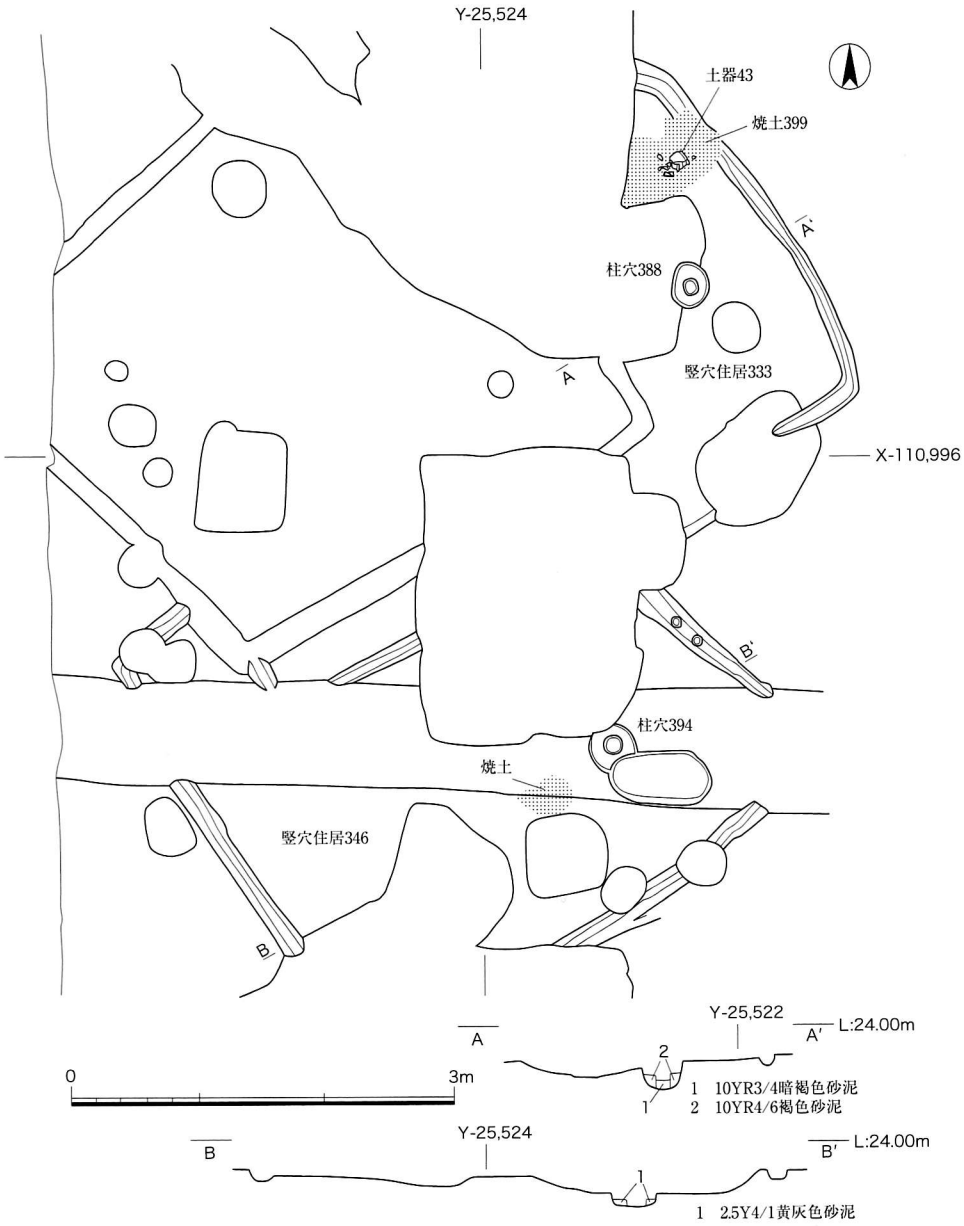
A区南　竪穴住居830実測図(1/60)



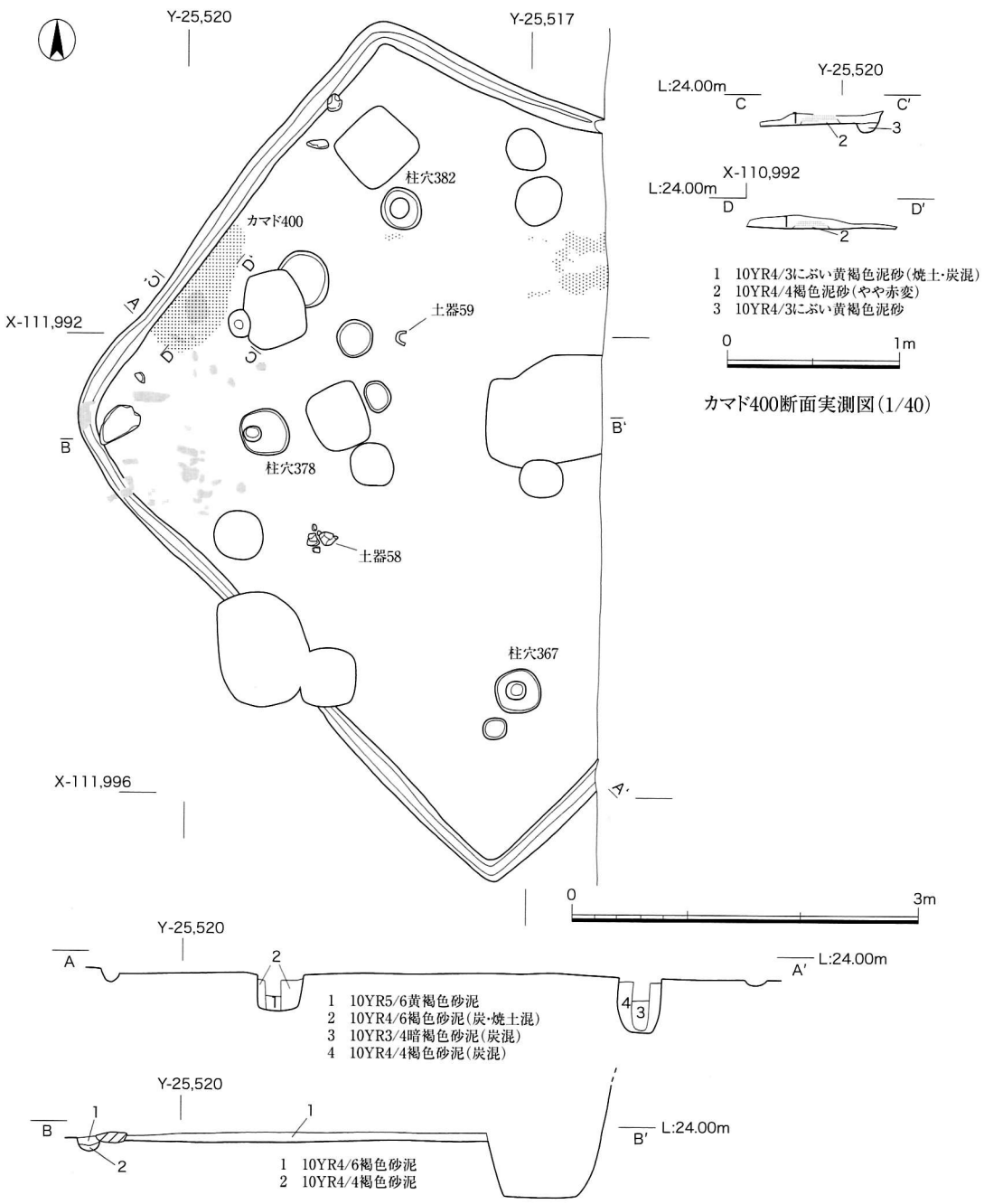
A区北　竪穴住居402実測図(1/60)



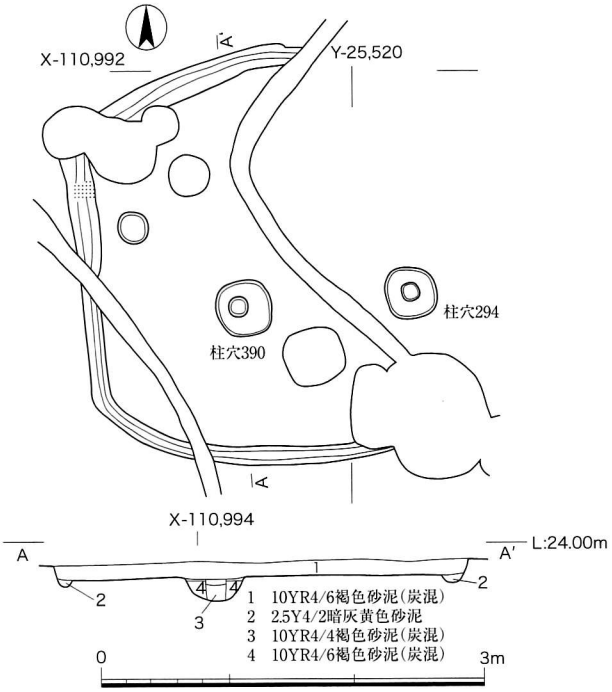
A区北　竪穴住居260実測図（1/60）



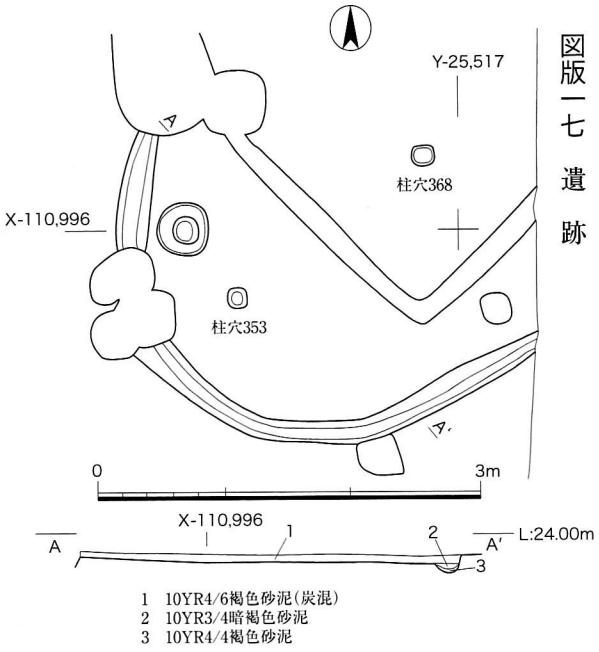
A区北　竪穴住居333･346実測図(1/60)



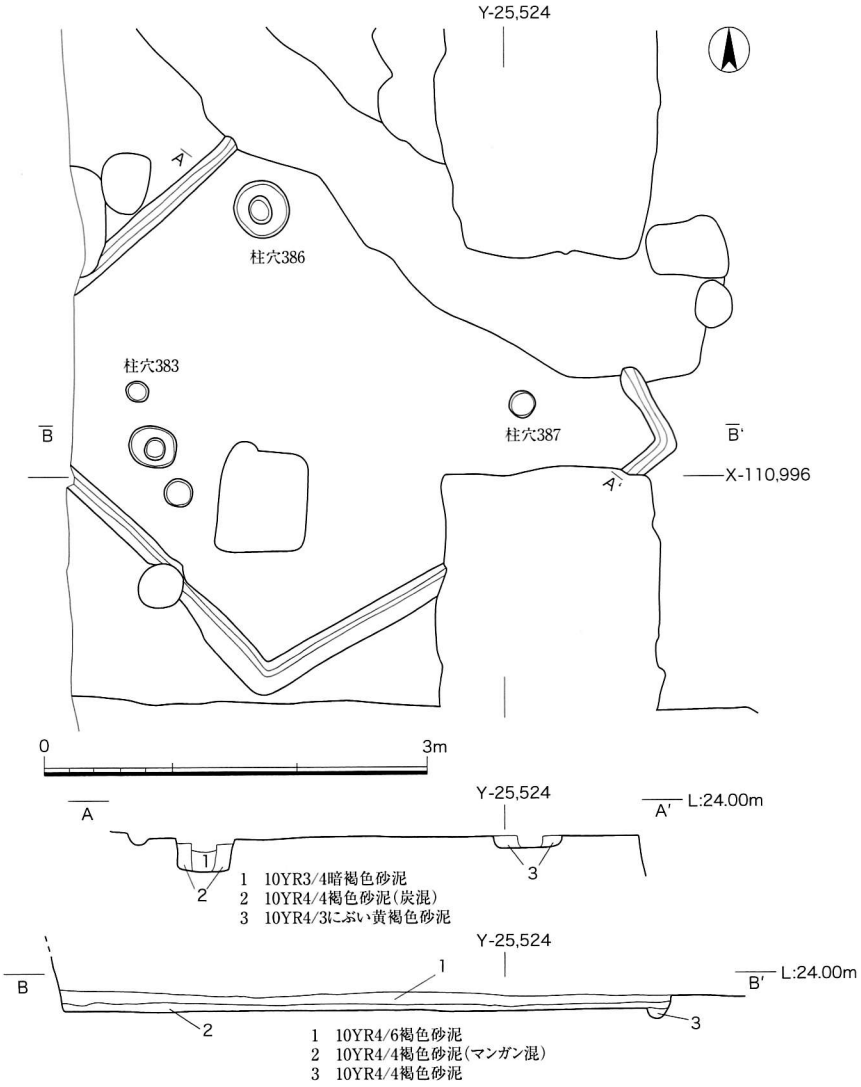
A区北　竪穴住居304実測図(1/60)



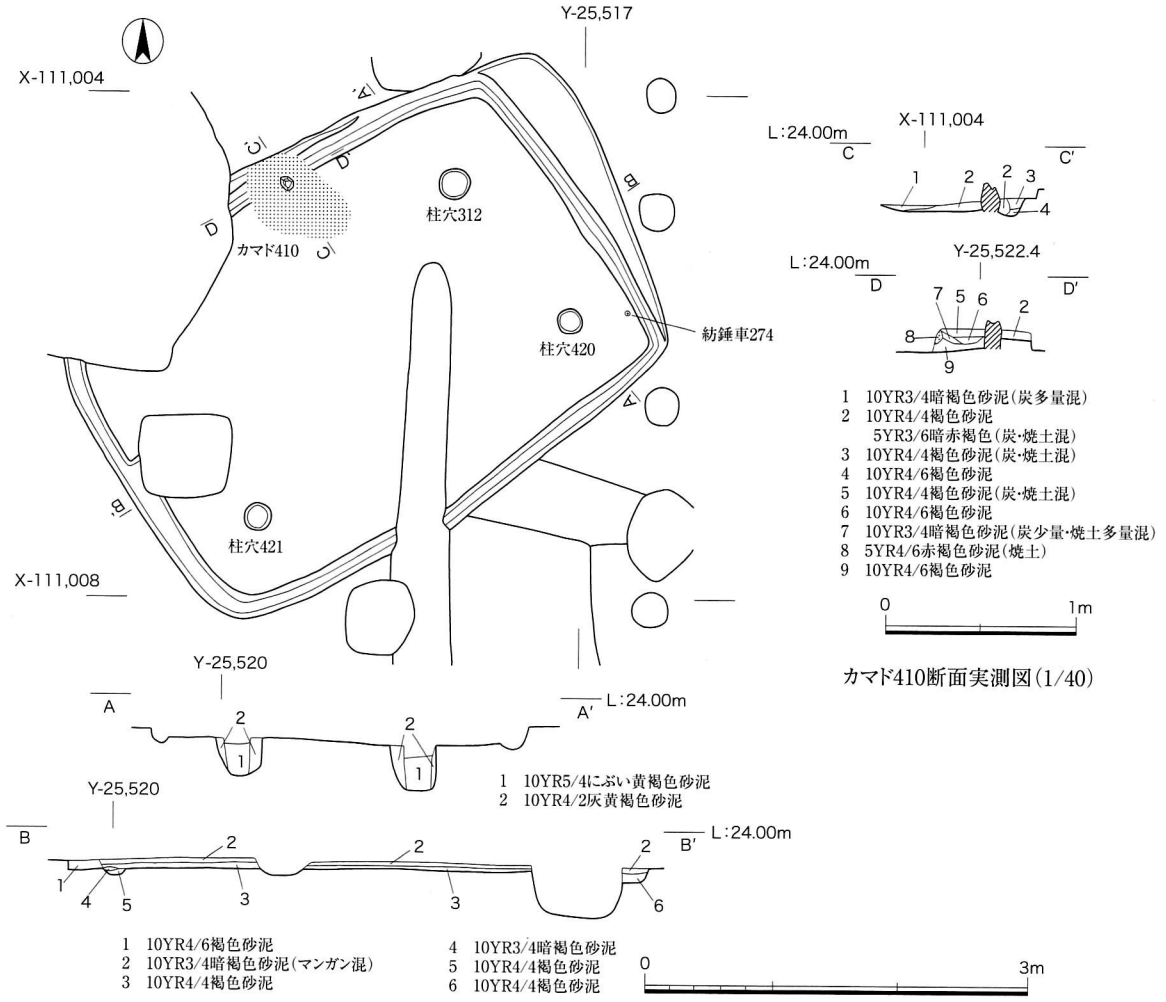
A区北　竪穴住居352実測図(1/60)



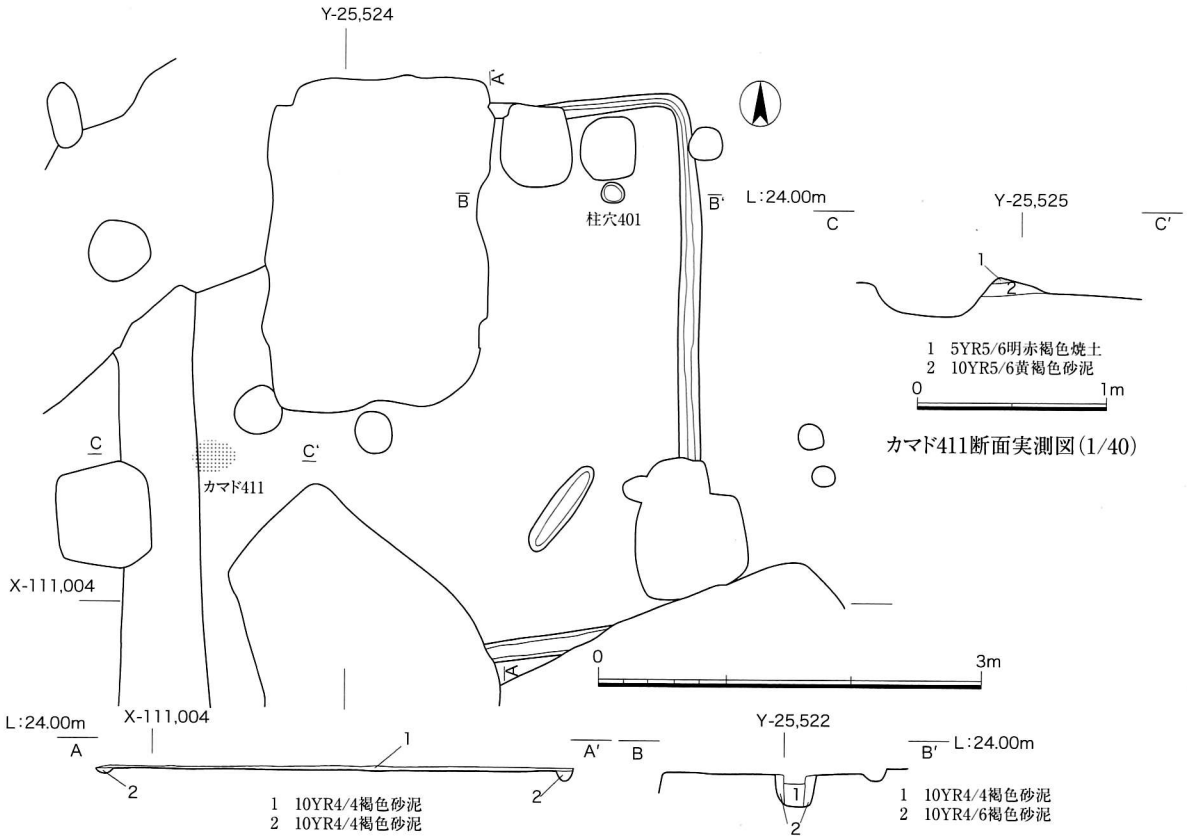
A区北　竪穴住居322実測図(1/60)



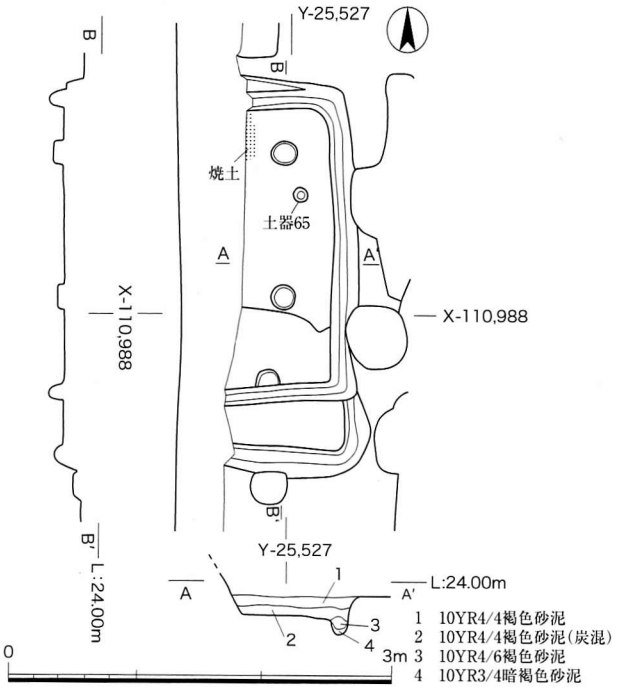
A区北　竪穴住居350実測図(1/60)



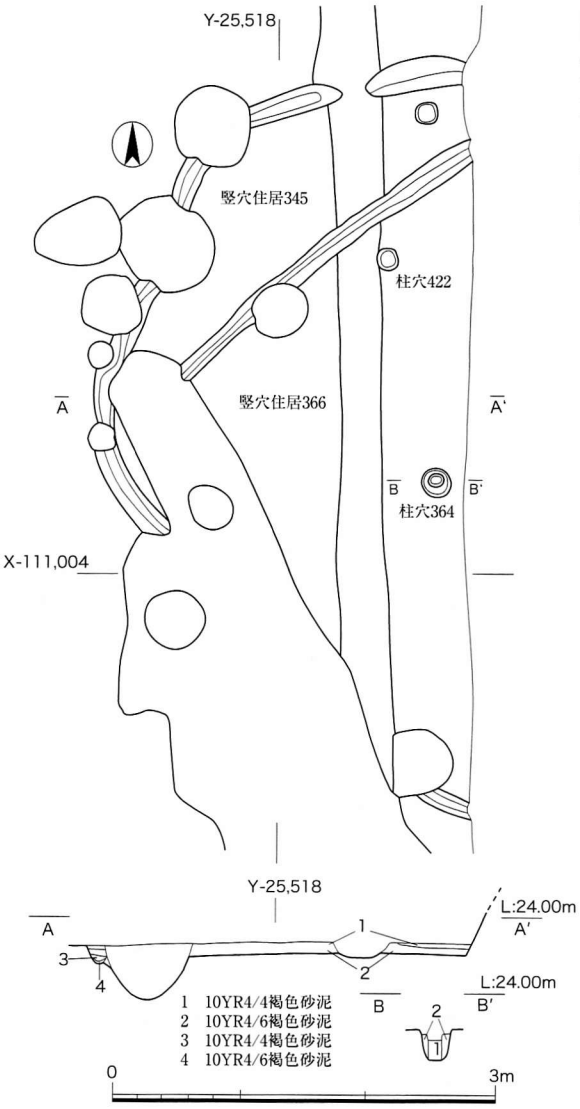
A区北　竪穴住居303実測図(1/60)



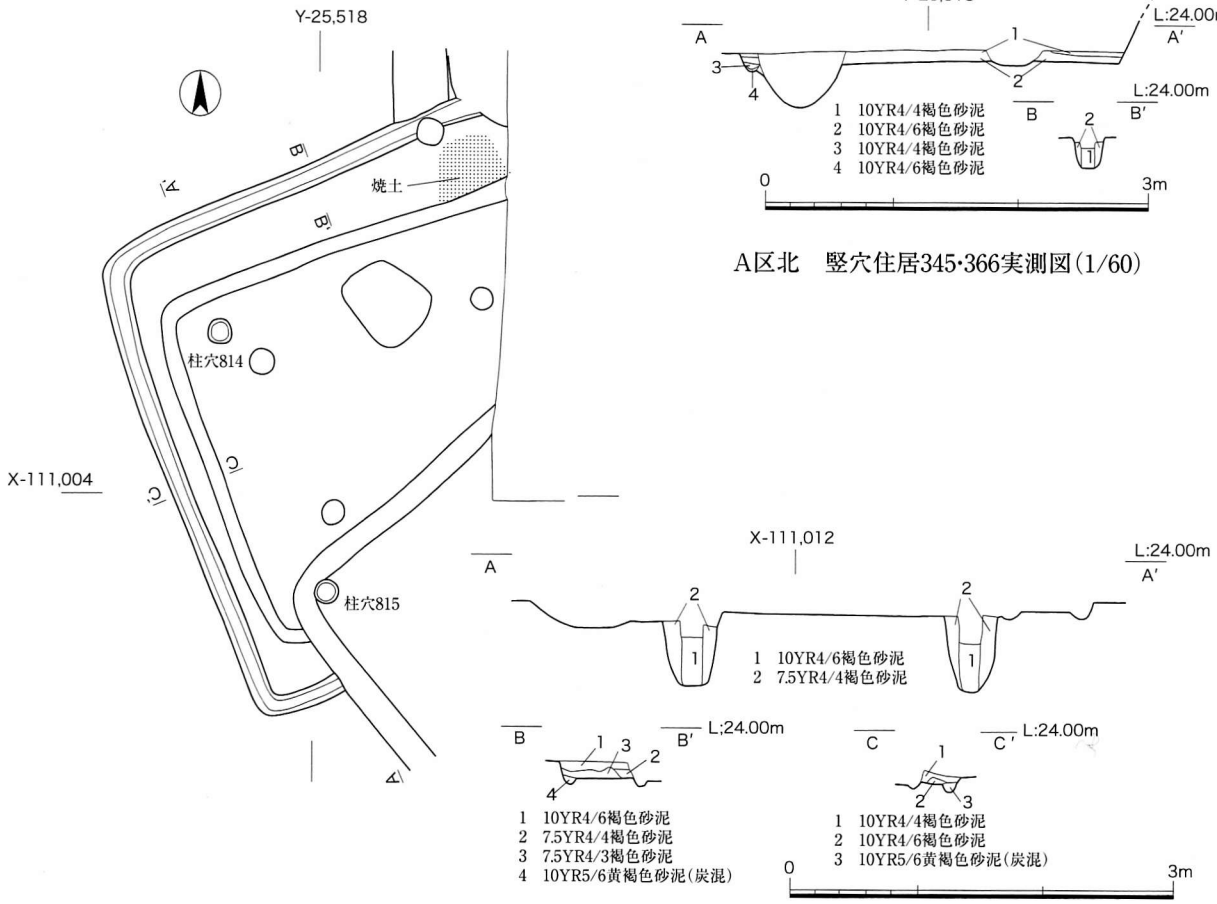
A区北　竪穴住居316実測図(1/60)



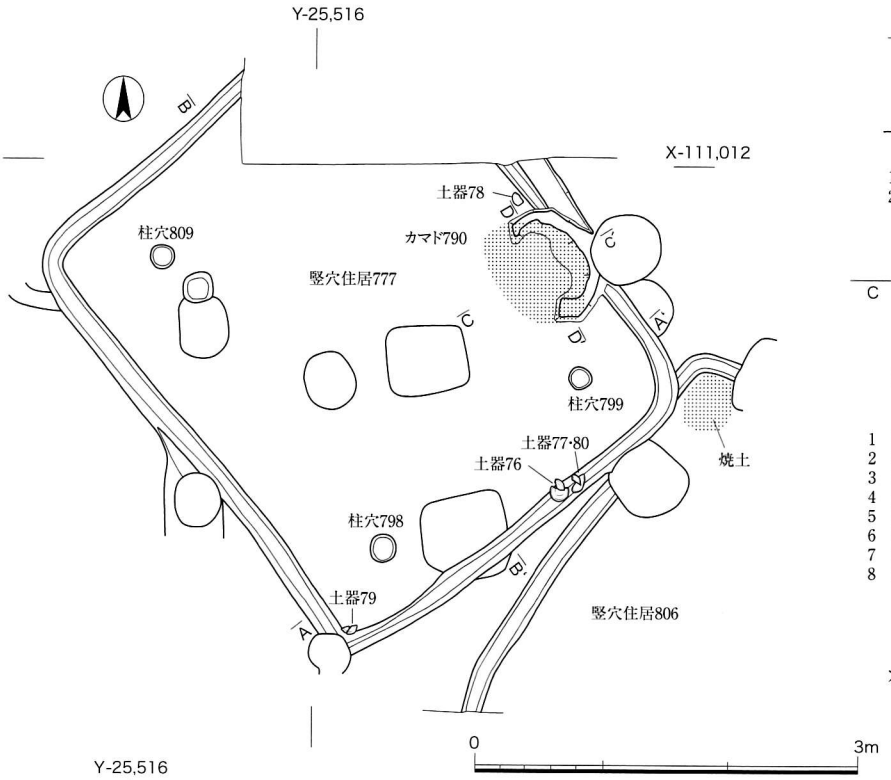
A区北　竪穴住居339実測図(1/60)

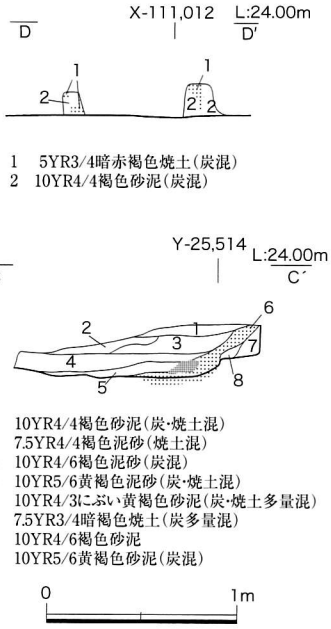


A区北　竪穴住居345･366実測図(1/60)

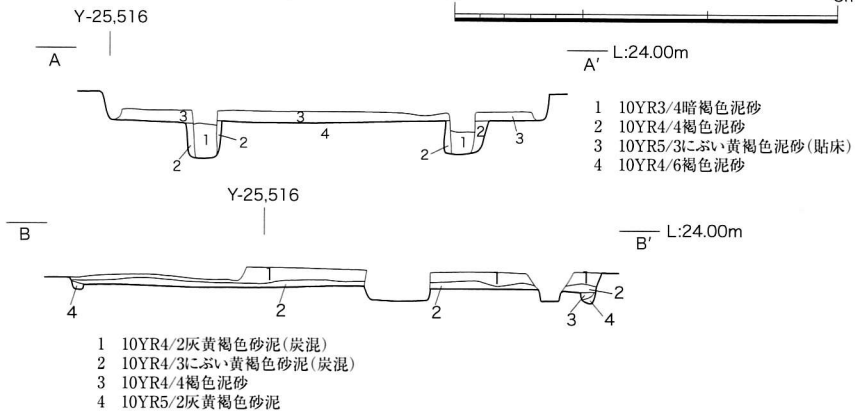


A区南　竪穴住居796実測図(1/60)

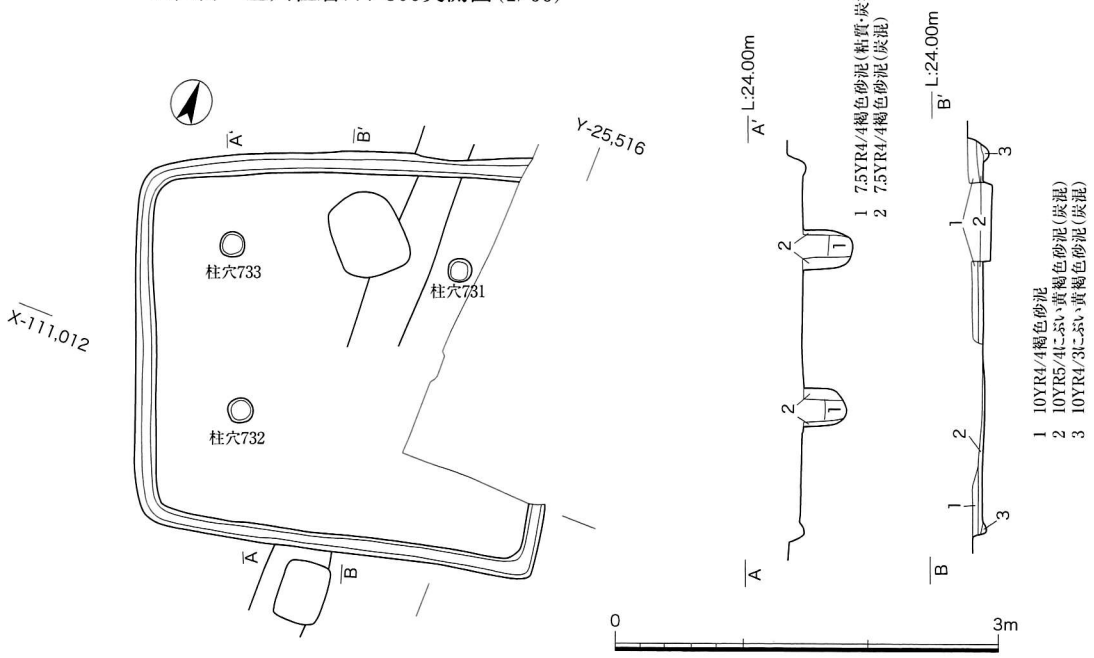




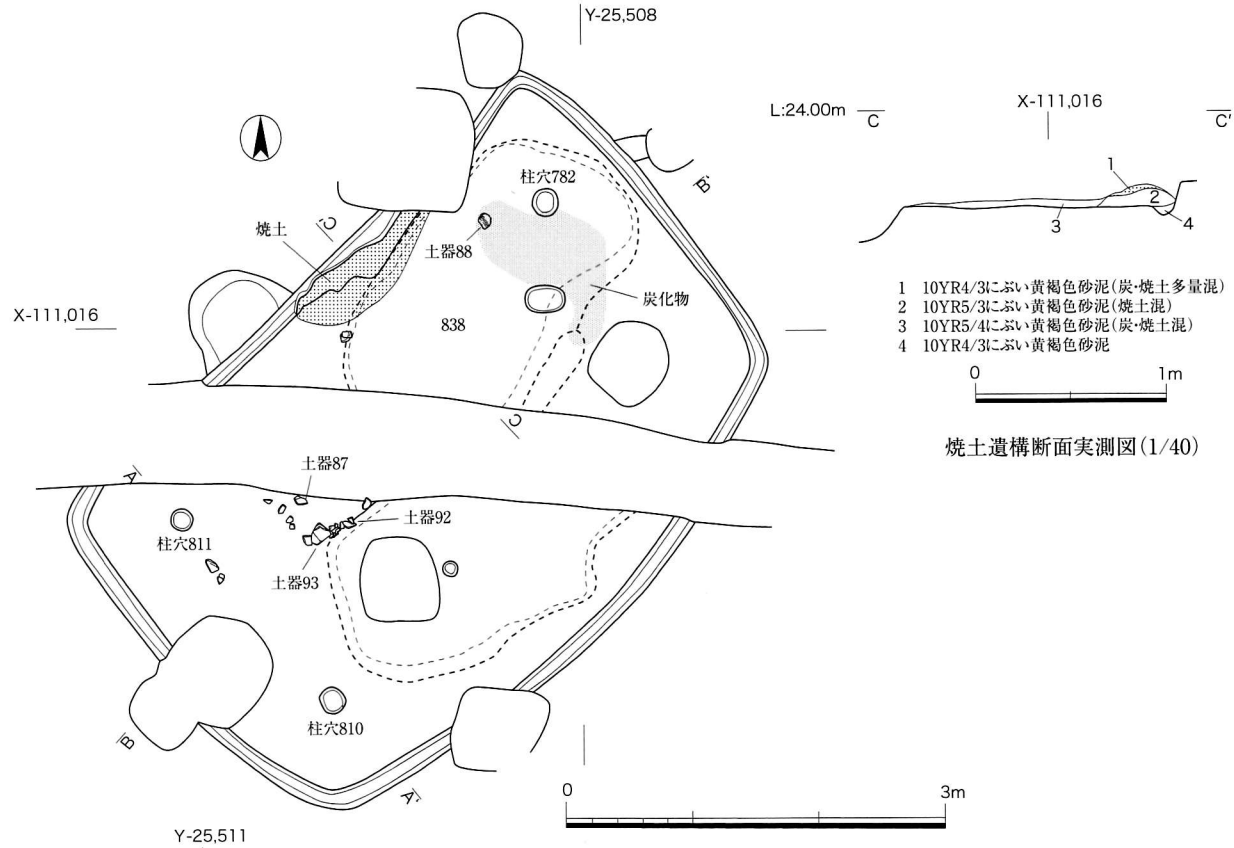
カマド790断面実測図(1/40)



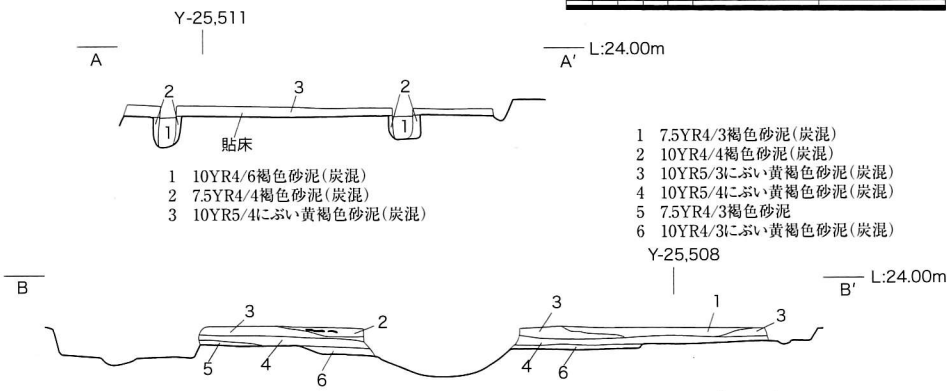
A区南　竪穴住居777·806実測図(1/60)



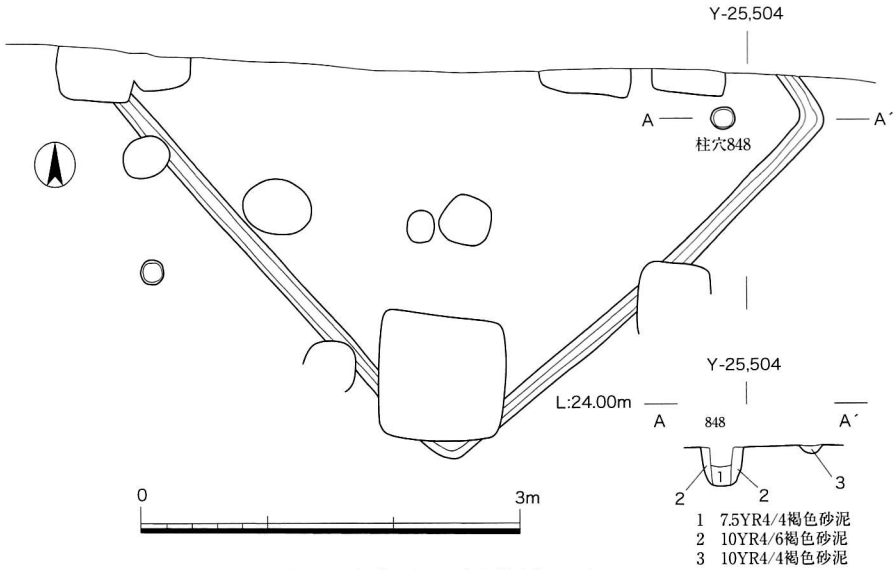
A区南　竪穴住居730実測図(1/60)



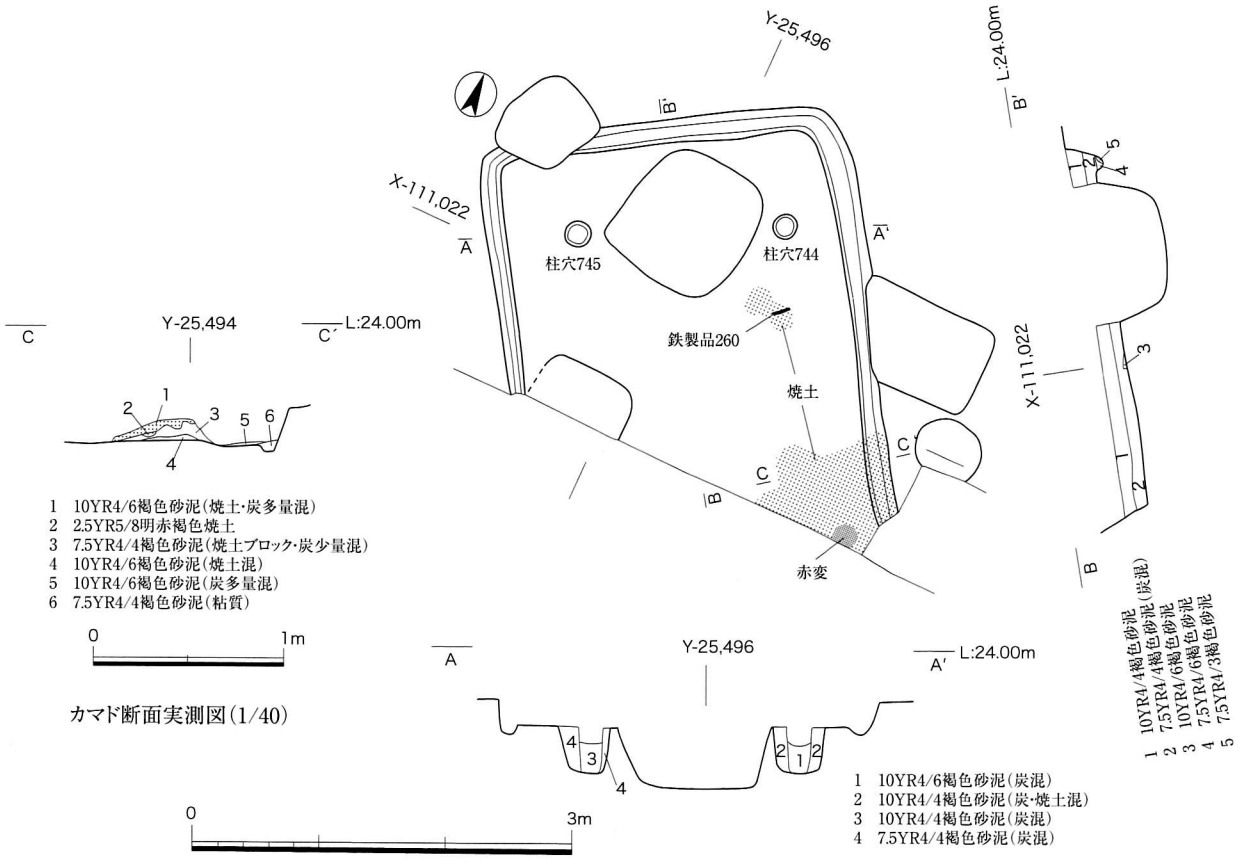
焼土遺構断面実測図(1/40)



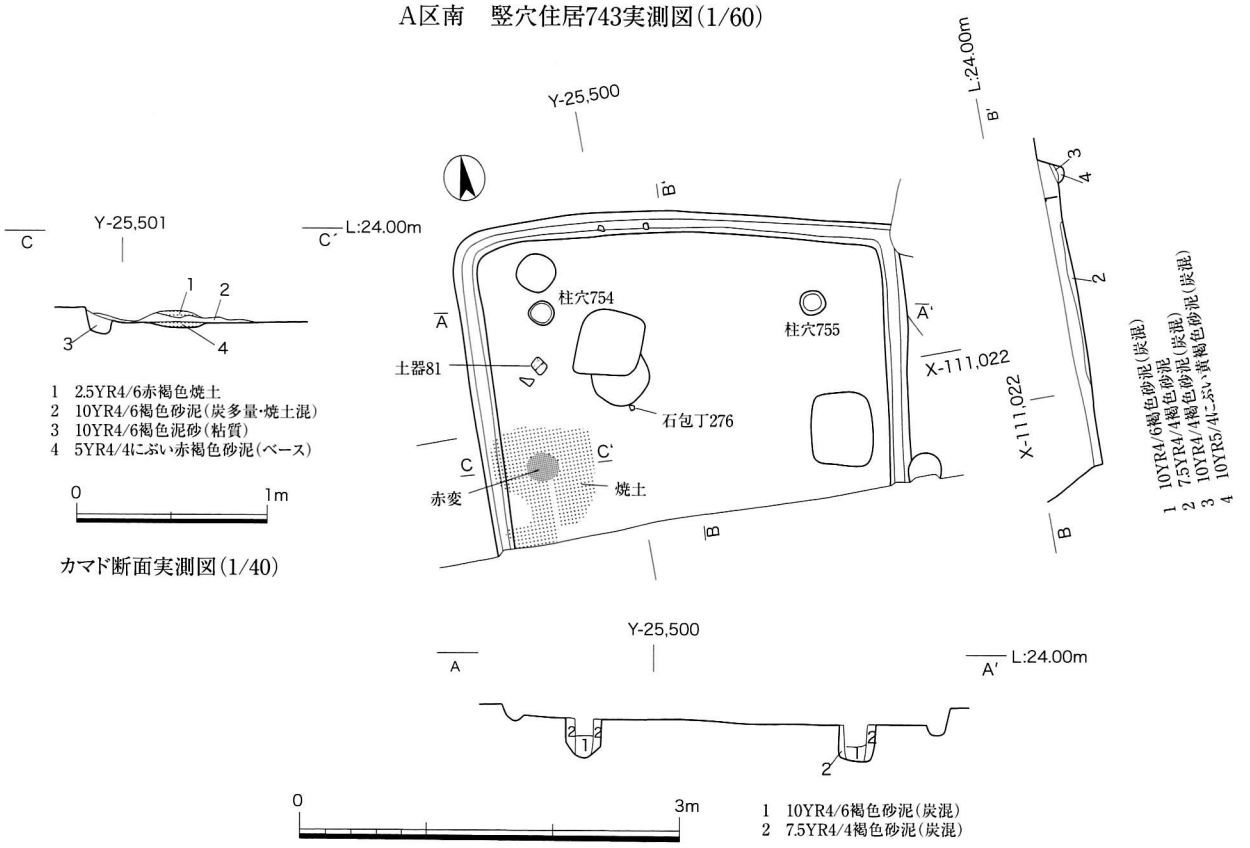
A区南　竪穴住居788実測図(1/60)



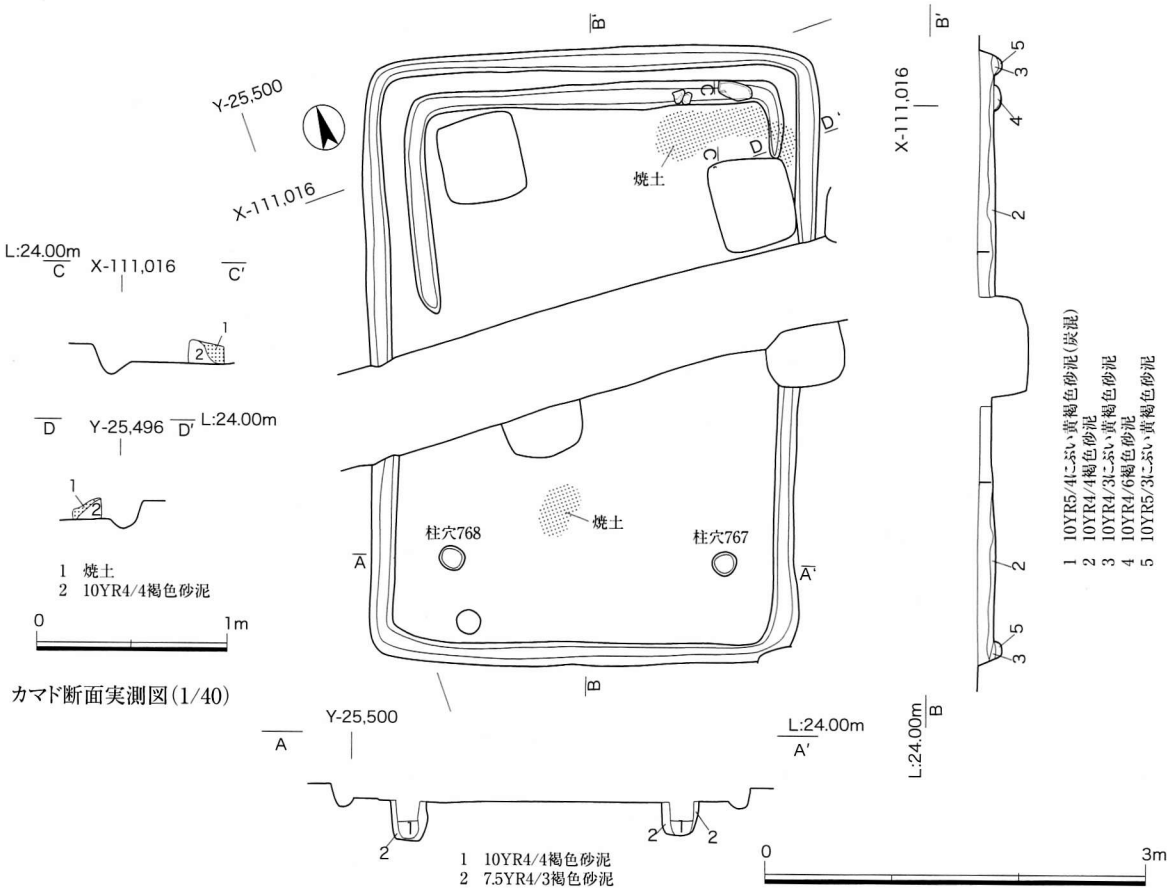
A区　竪穴住居802実測図(1/60)



A区南　竪穴住居743実測図(1/60)

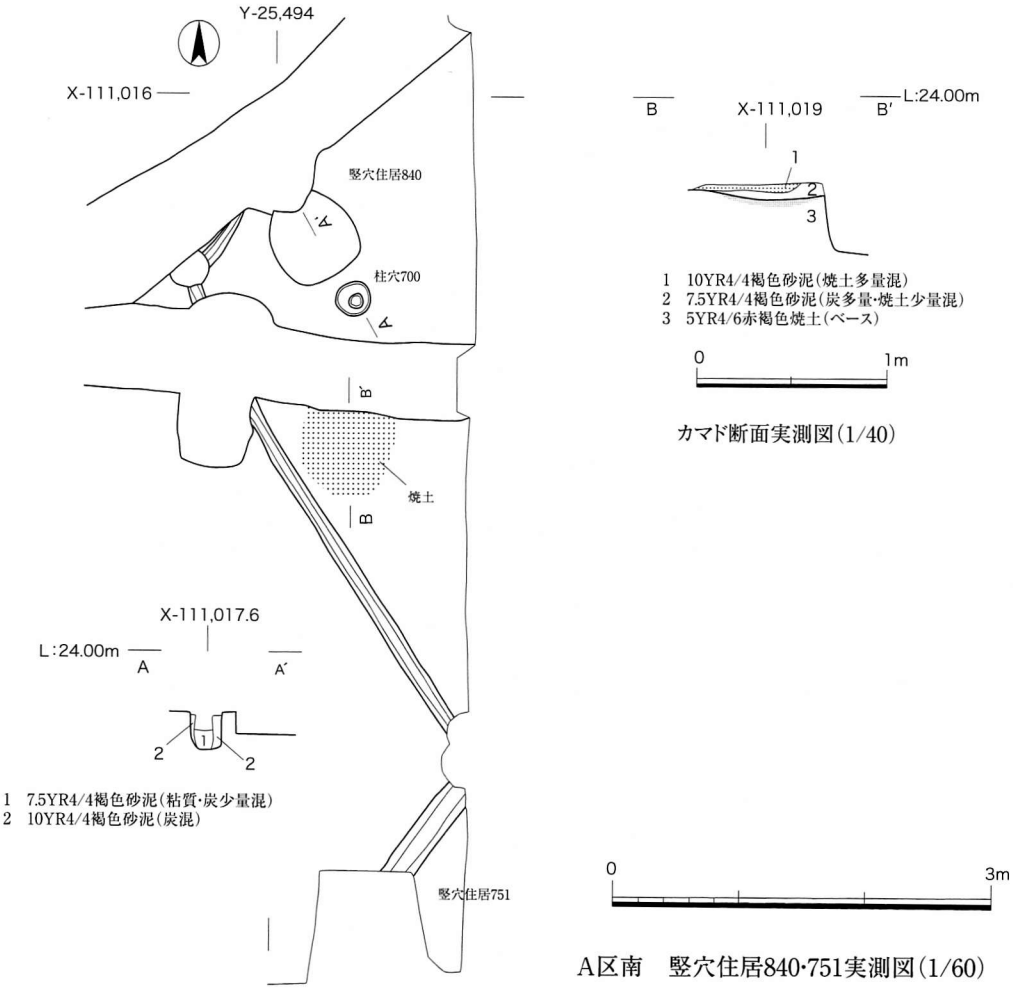


A区南　竪穴住居746実測図(1/60)



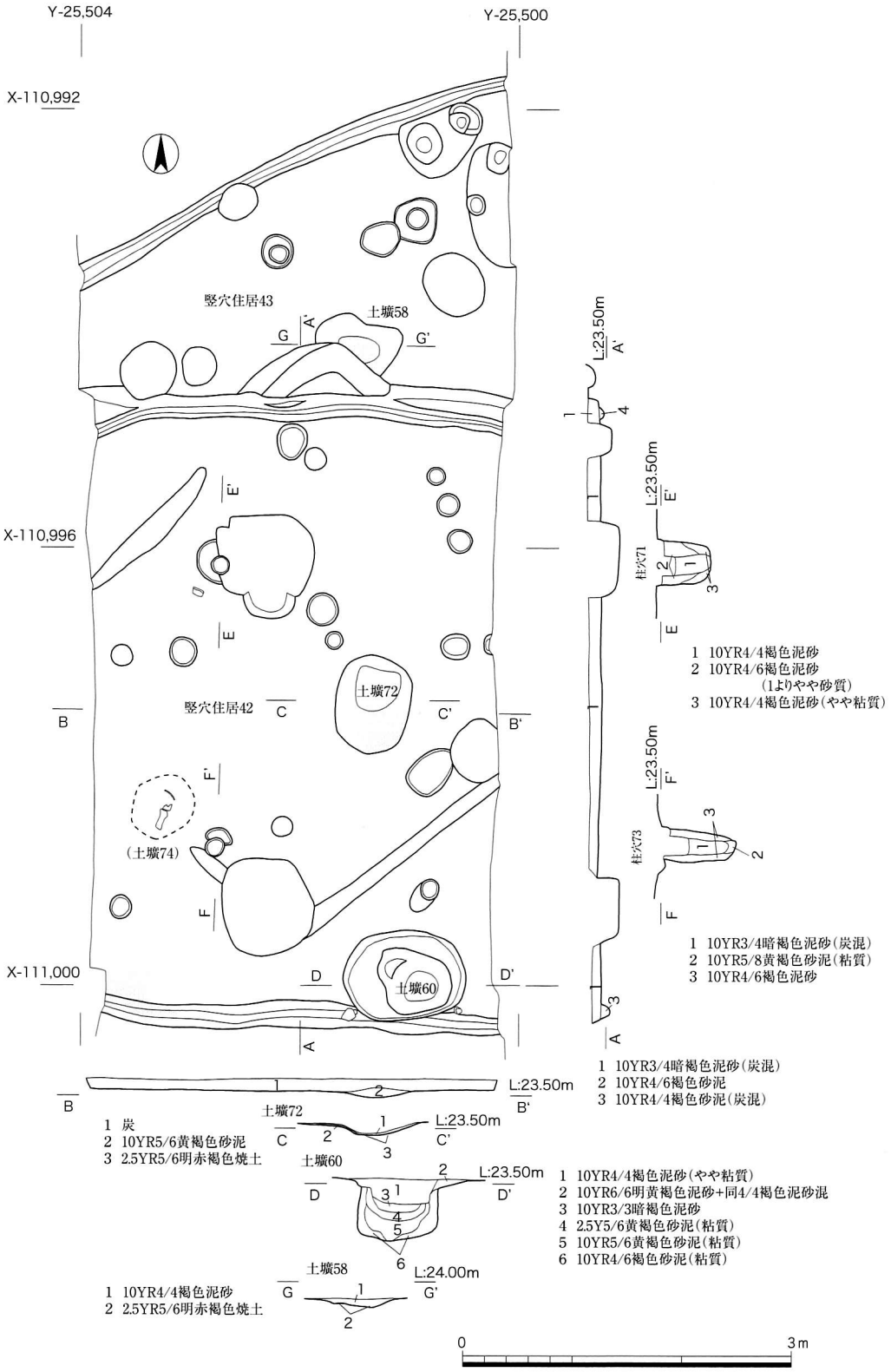
カマド断面実測図(1/40)

A区南　竪穴住居750実測図(1/60)

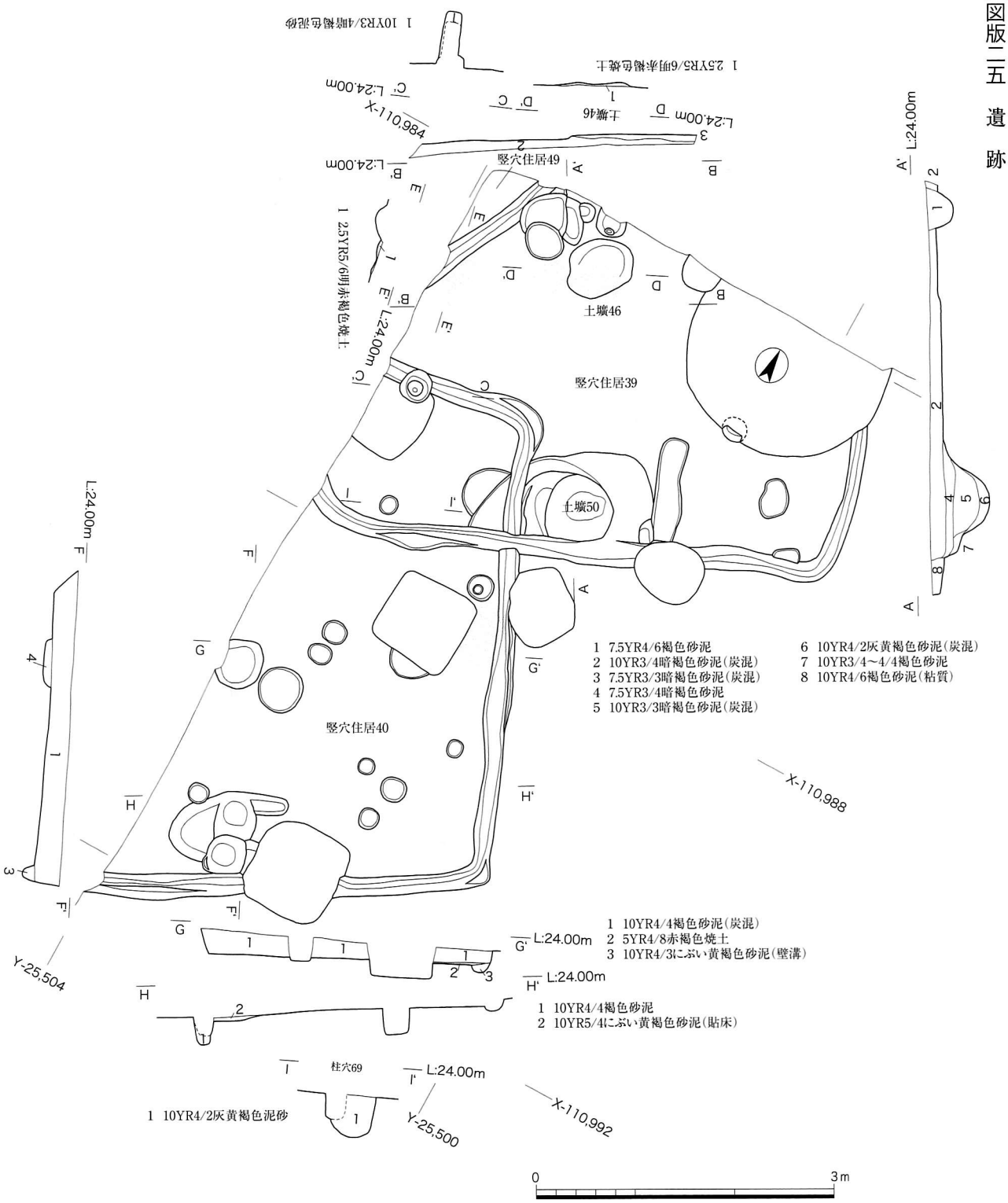


カマド断面実測図(1/40)

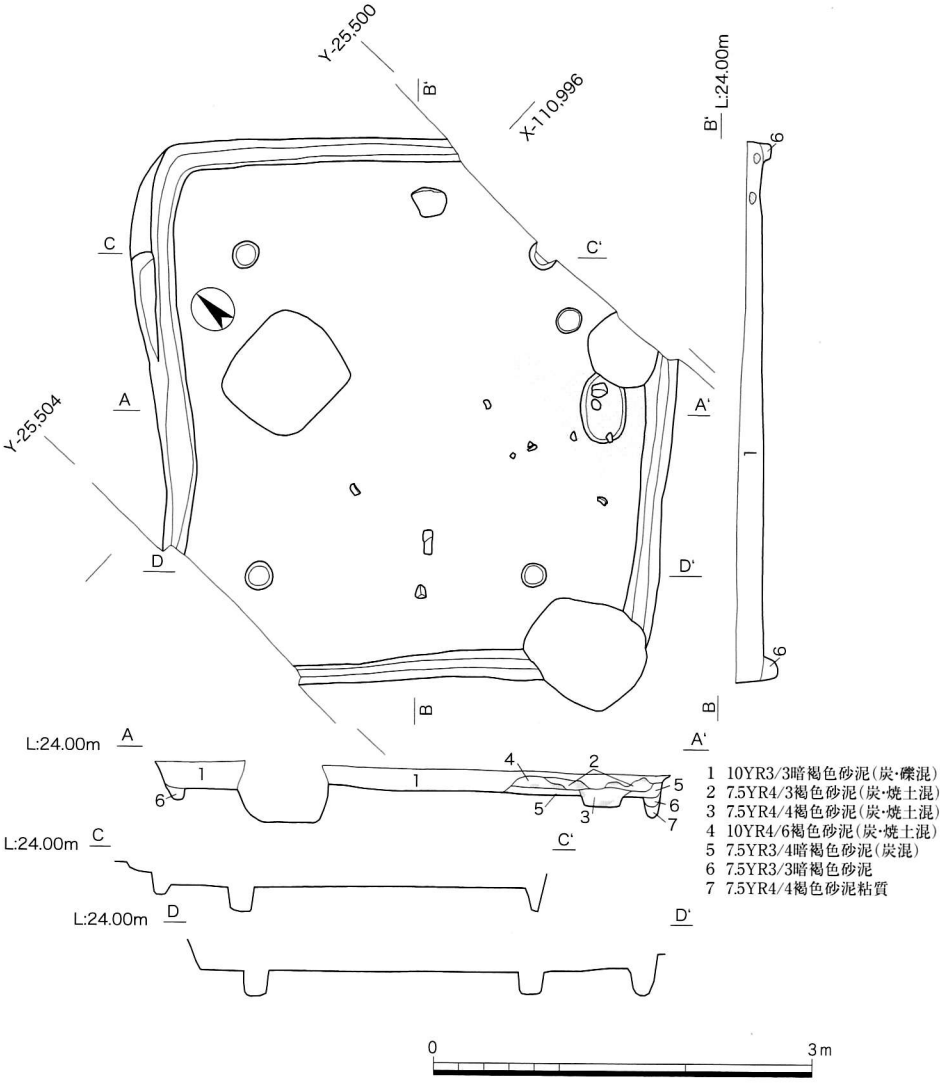
A区南　竪穴住居840・751実測図(1/60)



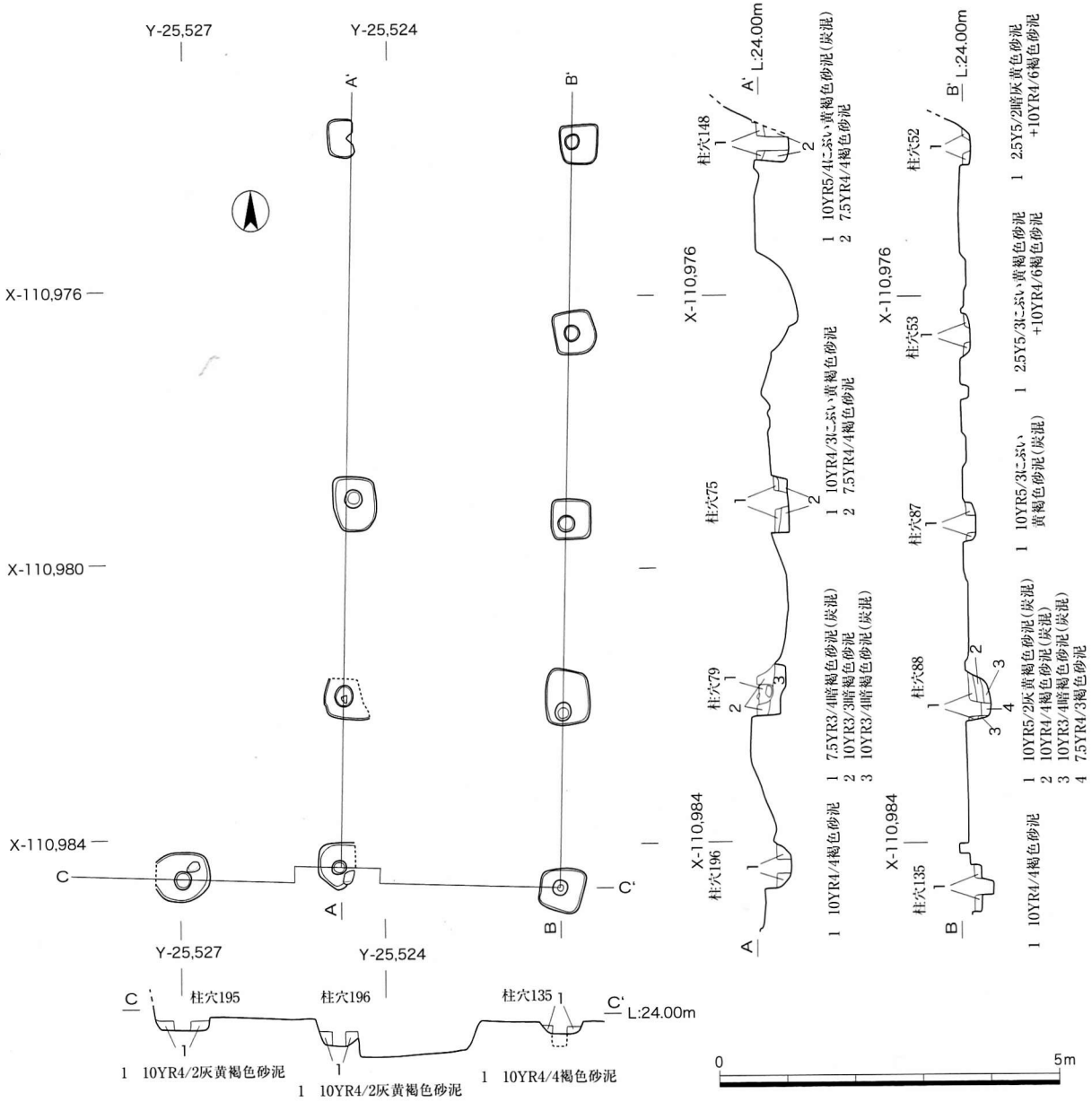
B区　竪穴住居42･43実測図(1/60)



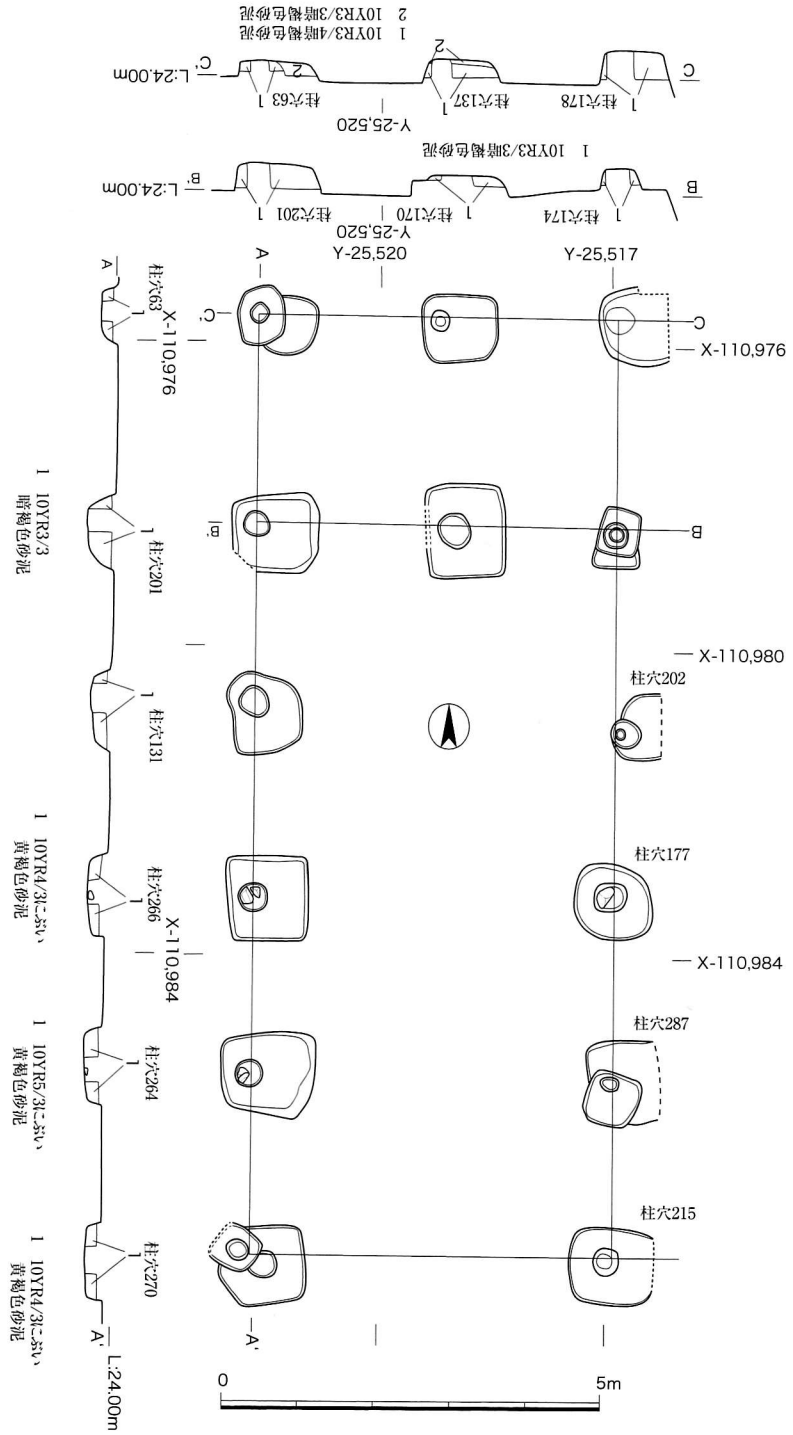
B区　竪穴住居39･40･49実測図（1/60）



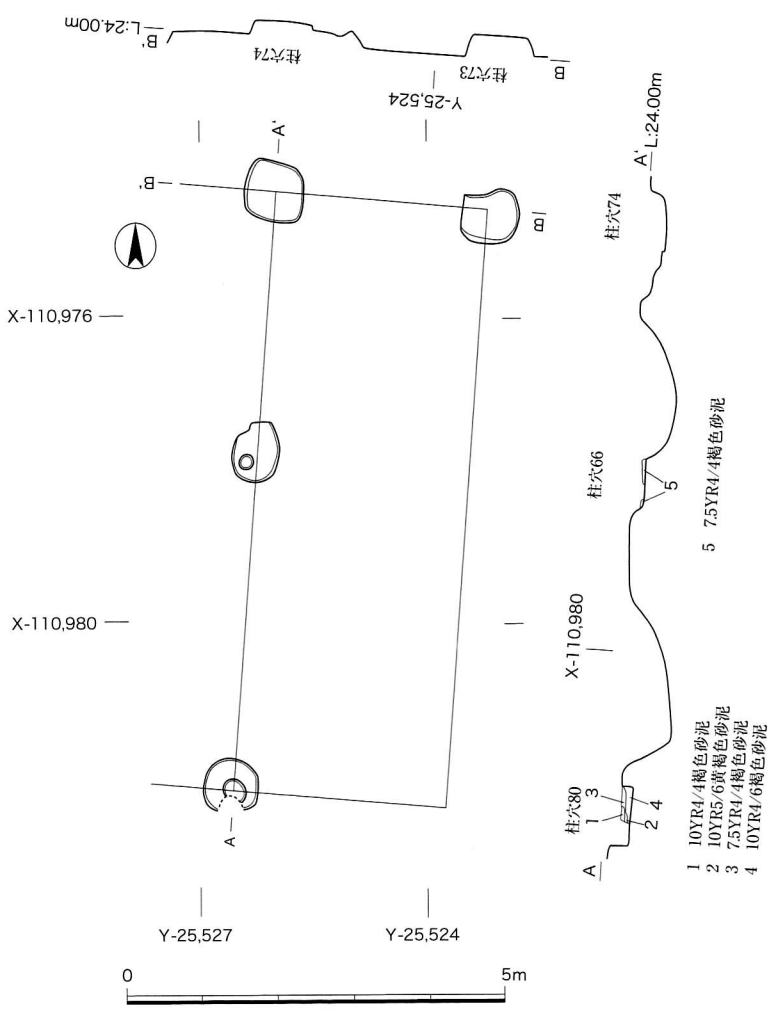
B区　竪穴住居41実測図(1/60)



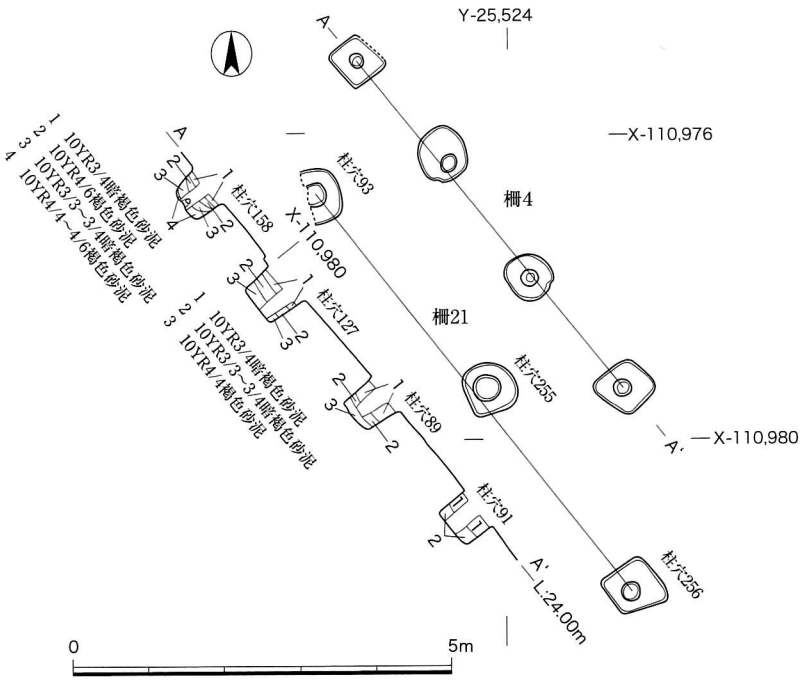
A区北　建物1実測図(1/100)



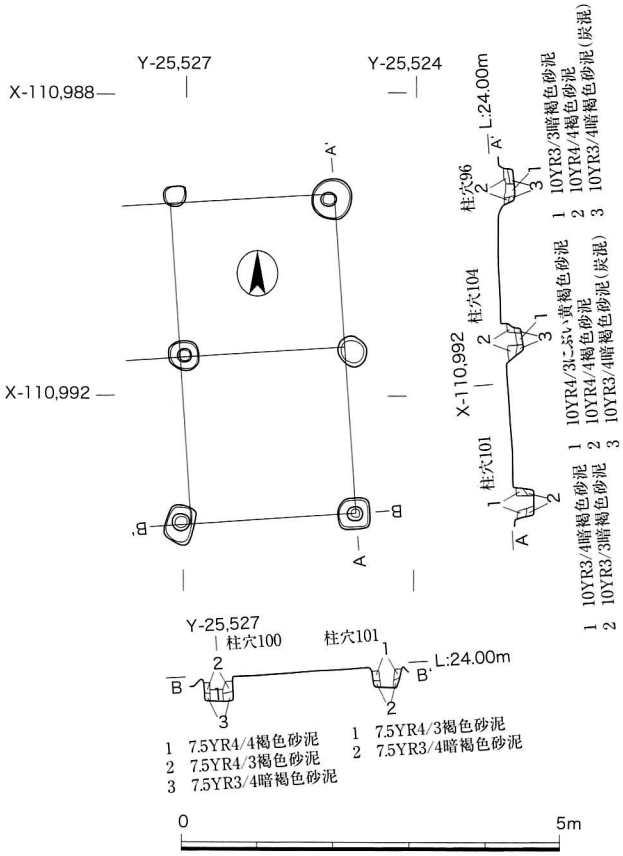
A区北　建物3実測図(1/100)



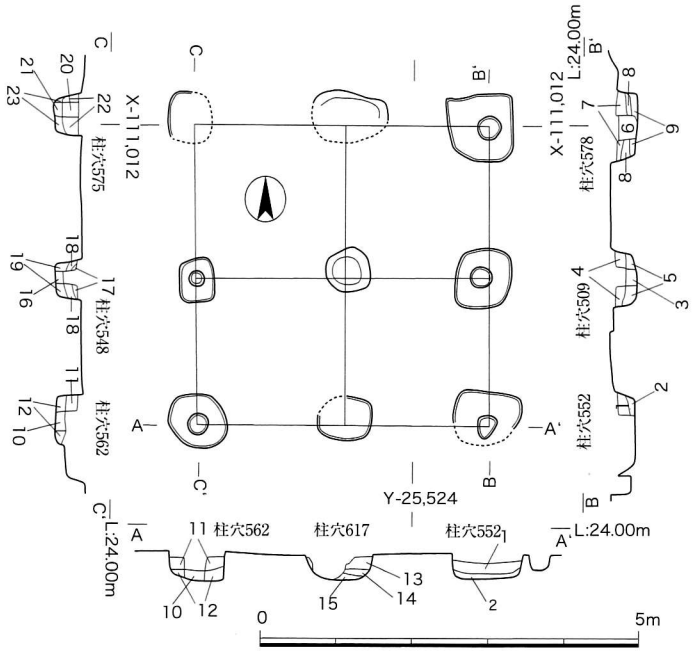
A区北　建物2実測図(1/100)



A区北　柵4･21実測図(1/100)

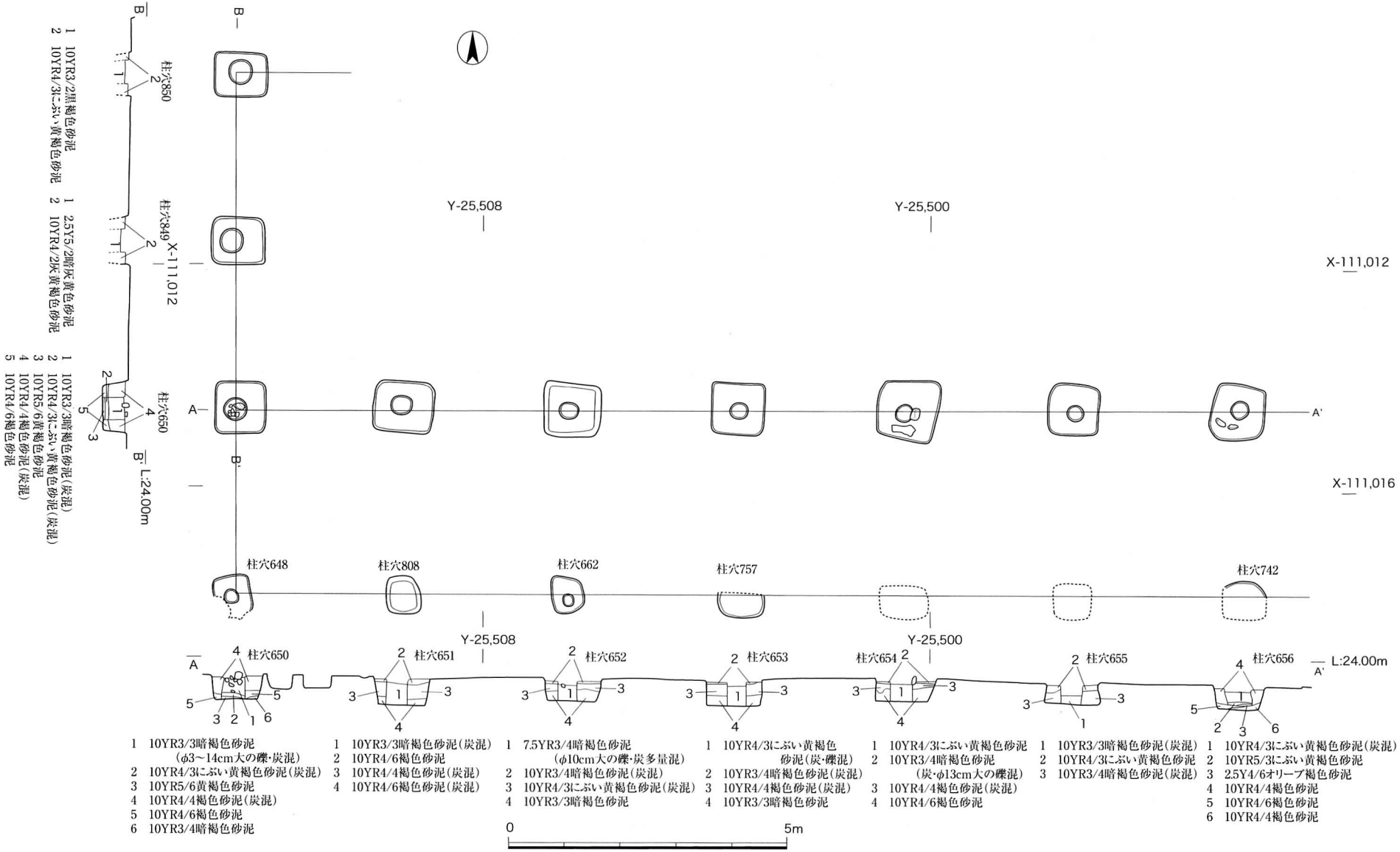


A区北　建物6実測図(1/100)



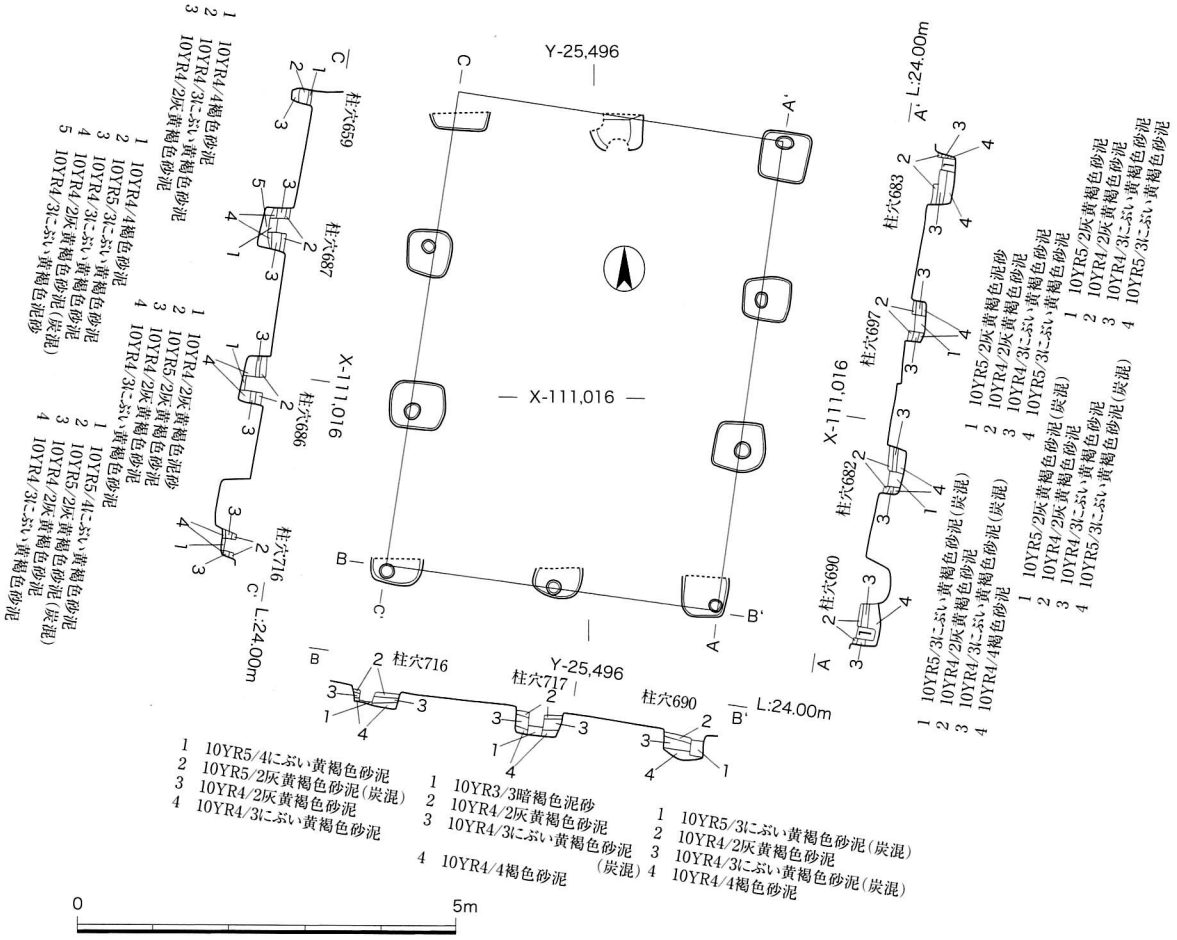
1　10YR4/4褐色砂泥(炭・焼土混)
2　10YR4/6褐色砂泥(炭混)
3　10YR4/4褐色砂泥(炭混)
4　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(炭・焼土混)
5　10YR4/6褐色砂泥(炭・焼土混)
6　10YR4/4褐色砂泥(炭混)
7　10YR4/4褐色砂泥(炭混)
8　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(炭混)
9　10YR4/6褐色砂泥(炭混)
10　10YR4/6褐色砂泥(炭混)
11　10YR4/4褐色砂泥(炭混)
12　10YR4/6褐色砂泥(炭混)
13　10YR4/4褐色砂泥(炭混)
14　10YR4/6褐色砂泥(炭・焼土混)
15　10YR4/4褐色砂泥(炭混)
16　10YR4/6褐色砂泥(炭混)
17　10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
18　10YR4/4褐色砂泥(炭混)
19　10YR4/4褐色砂泥
20　10YR4/4褐色砂泥(炭・焼土混)
21　10YR5/4にぶい黄褐色泥砂(炭混)
22　10YR5/4にぶい黄褐色砂泥(炭・焼土混)
23　10YR4/6褐色砂泥(炭混)

A区南　建物12実測図(1/100)

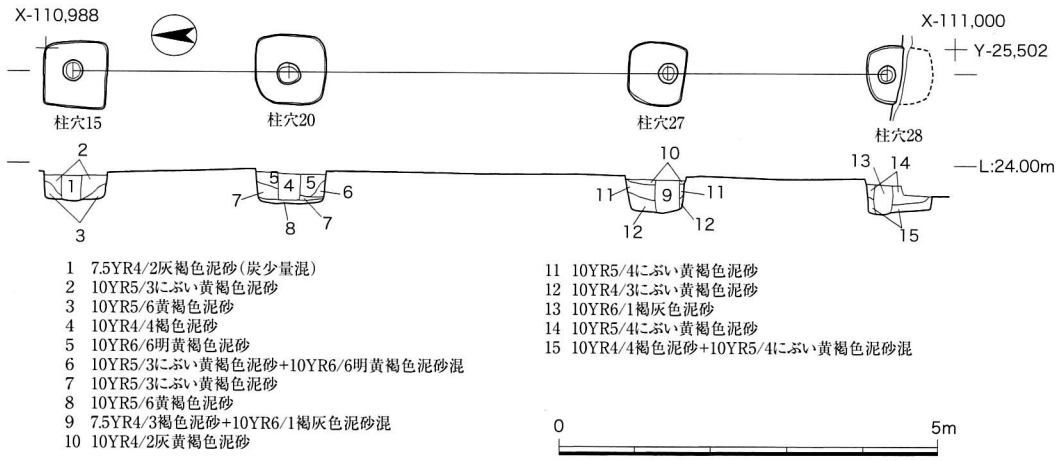


A区南　建物15実測図(1/100)

図版二一　遺跡



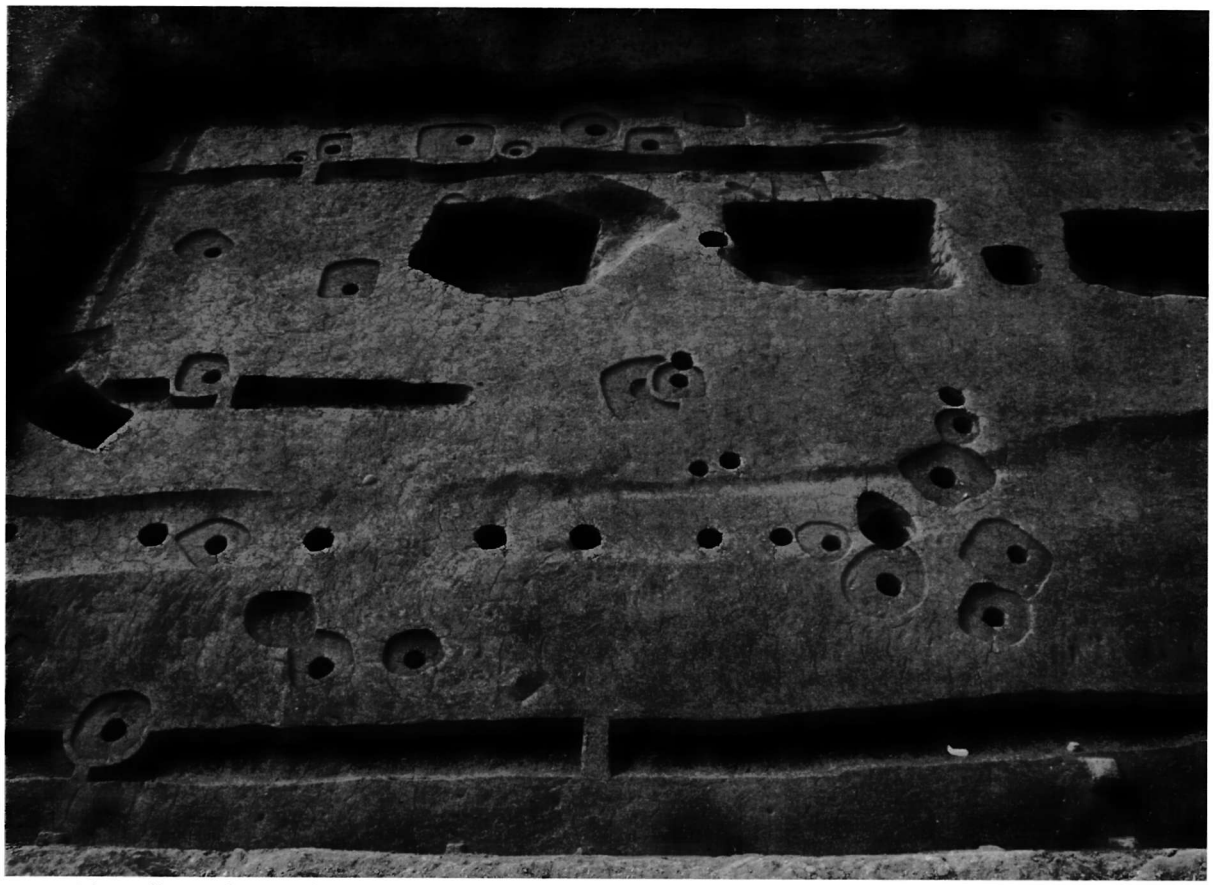
A区南　建物16実測図(1/100)



B区　建物1実測図(1/100)

1　調査地遠景（北西から）

2　A区北　第1面北半部（北東から）

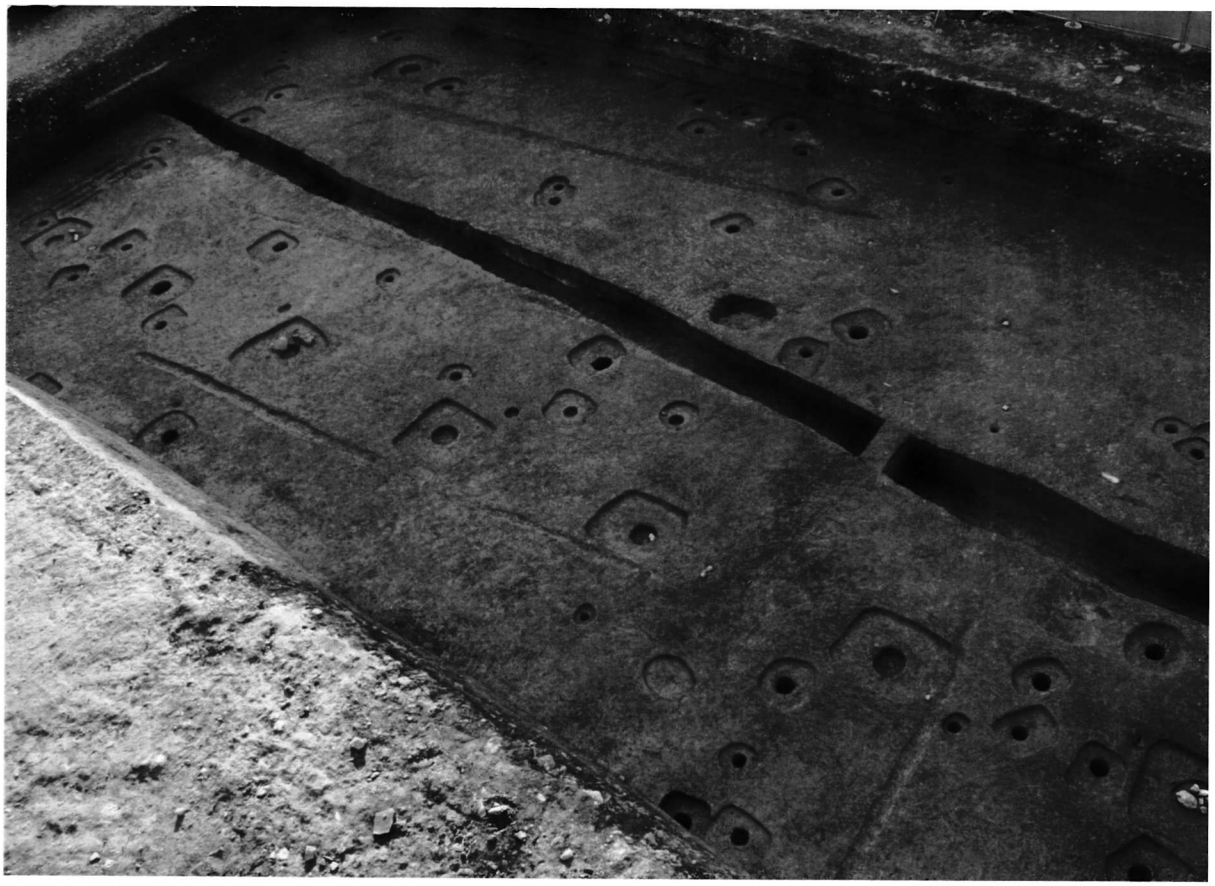


1　A区北　第1面南半部（東から）

2　A区北　第2面南半部（東から）

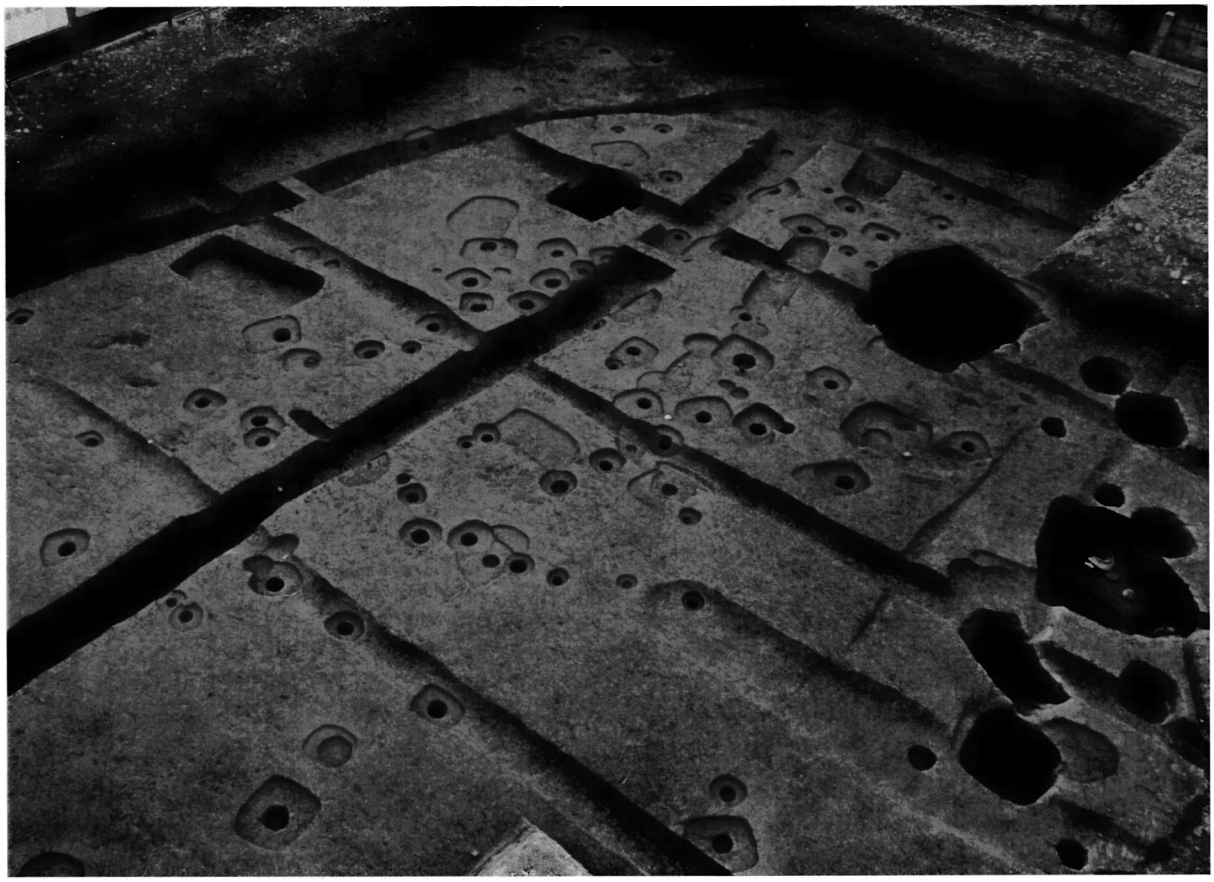
1　A区北　第2面全景（北東から）

2　A区北　第2面北半部（北東から）



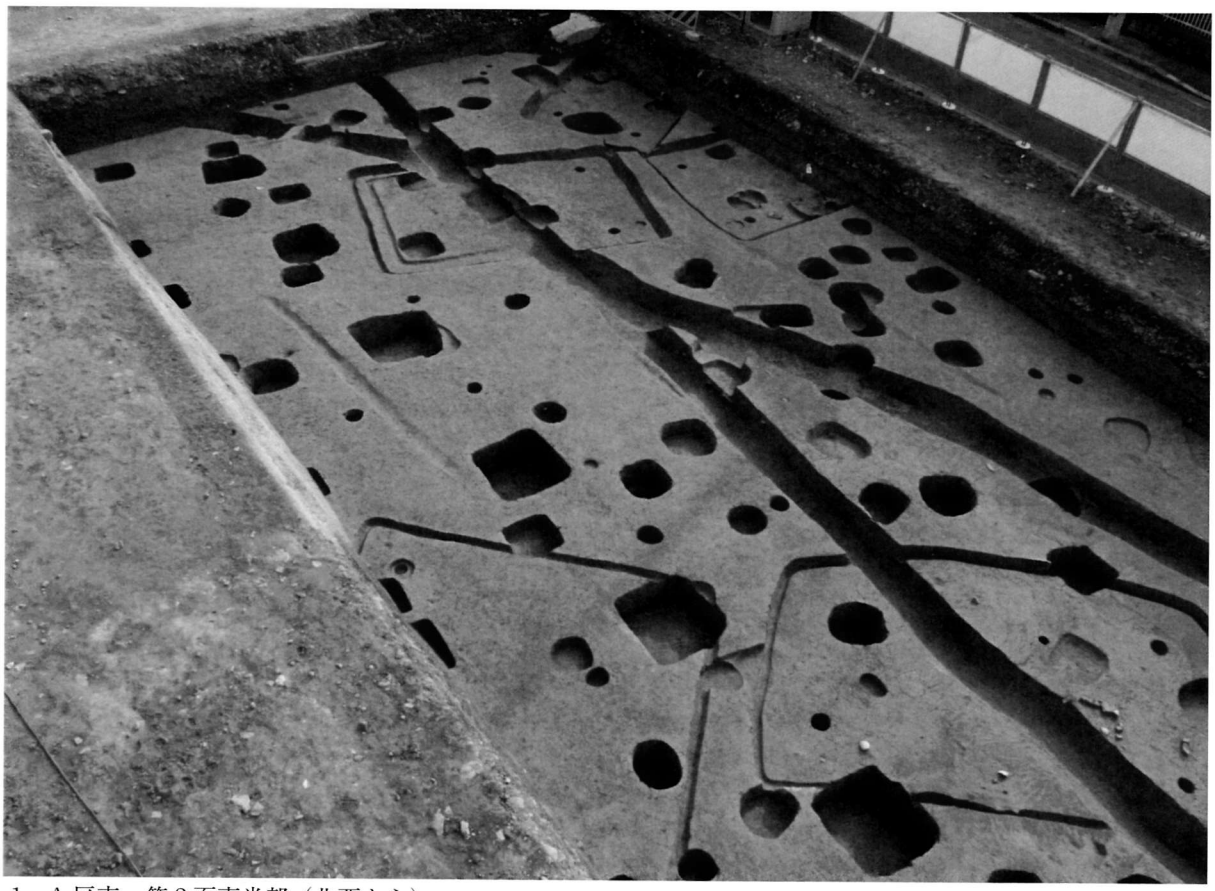
1　A区南　第1面東半部（北西から）

2　A区南　第1面中央北部（北から）



1　A区南　第1面西半部（北東から）

2　A区南　第1面中央部（北から）



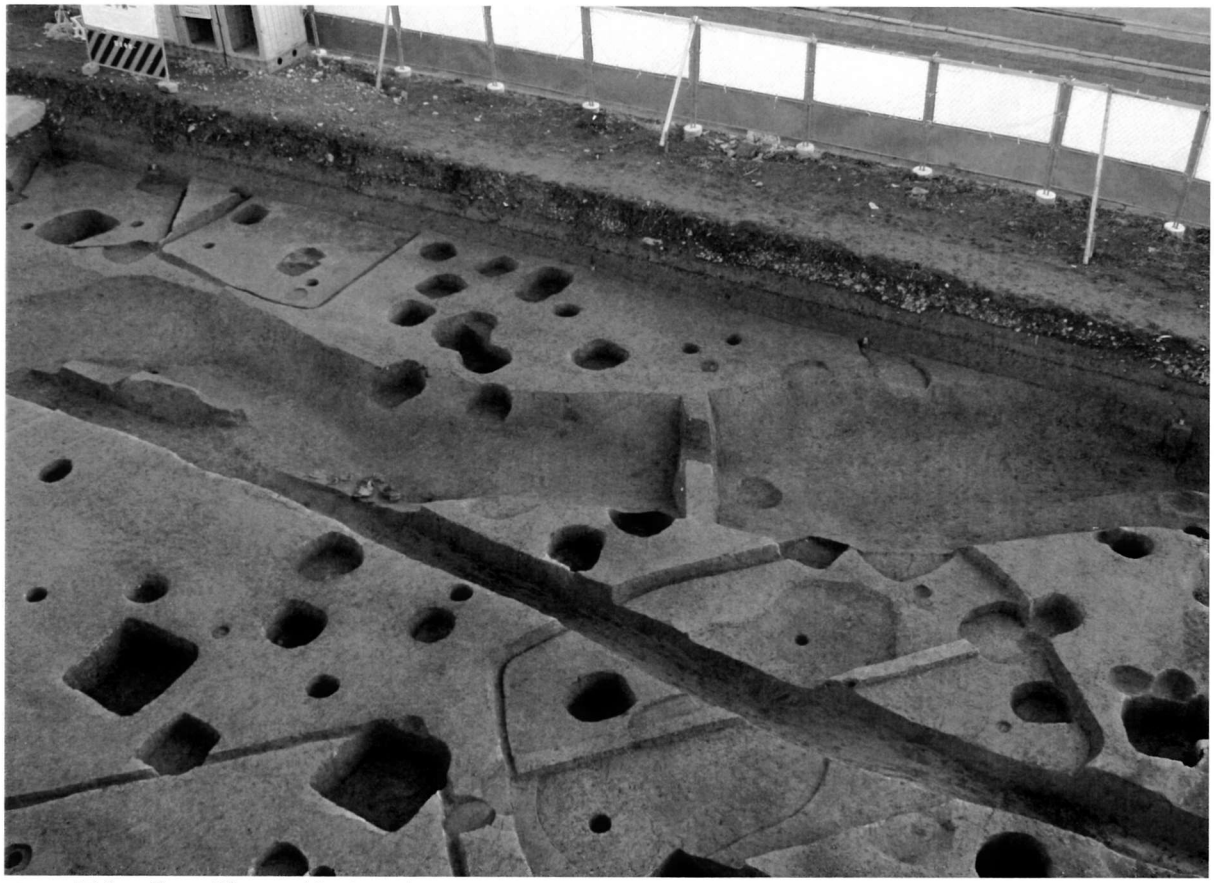
1　A区南　第2面東半部（北西から）

2　A区南　第2面東部（北西から）

1　A区南　第2面西半部（北東から）

2　A区南　第2面中央部（北から）

1　A区南　第3面溝841（北西から）



2　A区南　第3面溝841（北西から）

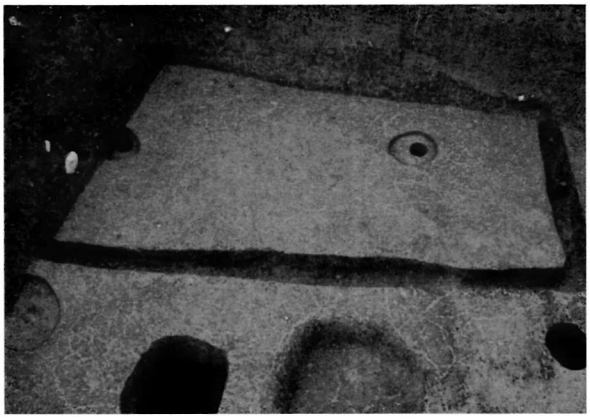
1　B区　第1面全景（北から）

2　B区　第1面北半部（北から）

1　B区　第2面全景（北から）

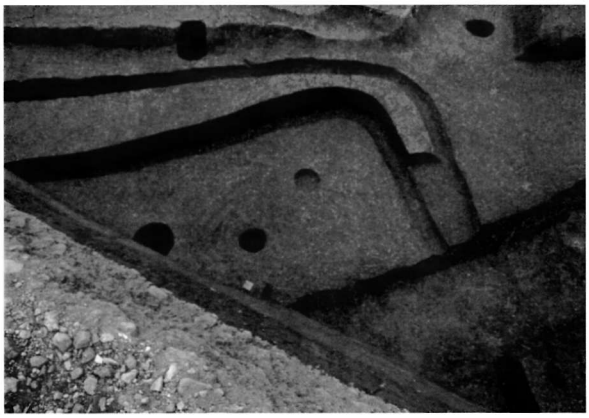
2　B区　第2面北半部（北から）

1　A区　竪穴住居712炭化材出土状況（東から）



2　A区　竪穴住居712　（東から）

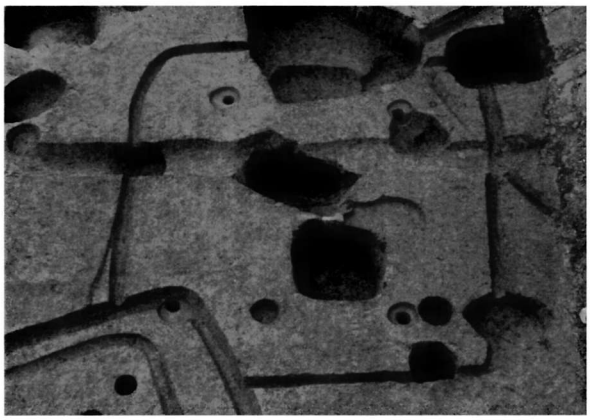
3　A区　竪穴住居712壁柱出土状況（北東から）



4　A区　竪穴住居816（南西から）

5　A区　竪穴住居711（東から）

6　A区　竪穴住居171（北東から）



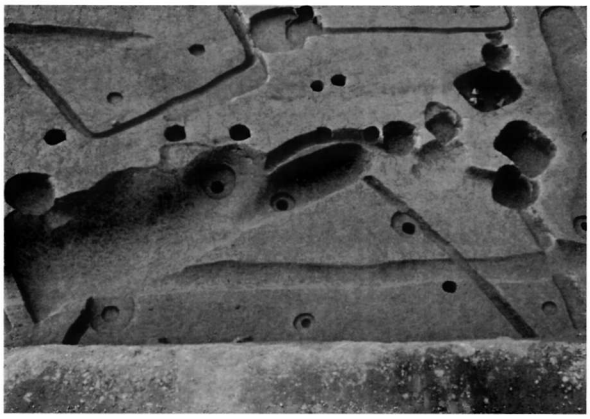
7　A区　竪穴住居830（東から）

8　A区　竪穴住居176・306（北東から）

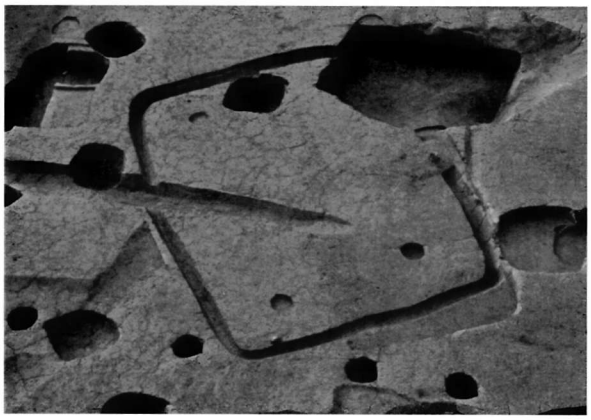
1　A区　竪穴住居260（北東から）

2　A区　竪穴住居402（北東から）

3　A区　竪穴住居304・322・352（北東から）



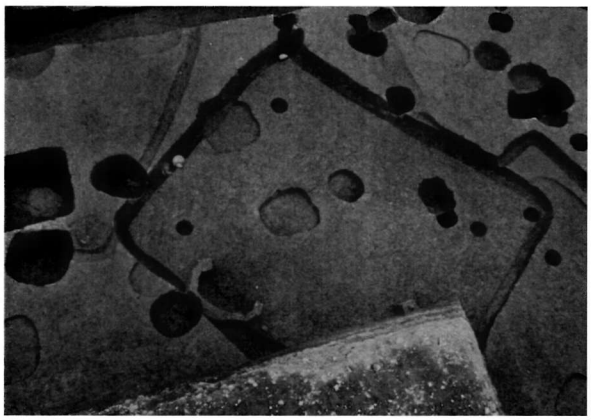
4　A区　竪穴住居345・366（東から）



5　A区　竪穴住居303（東から）

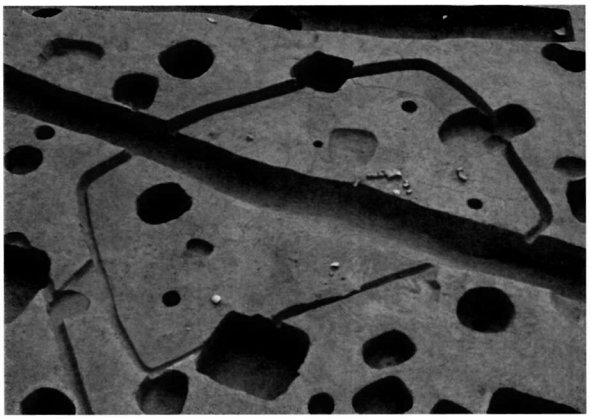
6　A区　竪穴住居339（北西から）

7　A区　竪穴住居796（北東から）



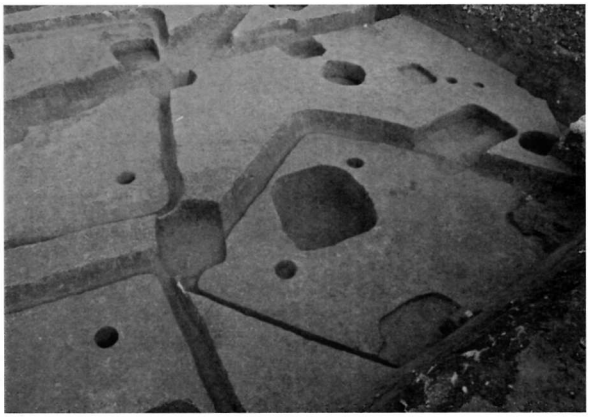
8　A区　竪穴住居777（北東から）

1　A区　竪穴住居730（北東から）



2　A区　竪穴住居788（北西から）

3　A区　竪穴住居802（北西から）



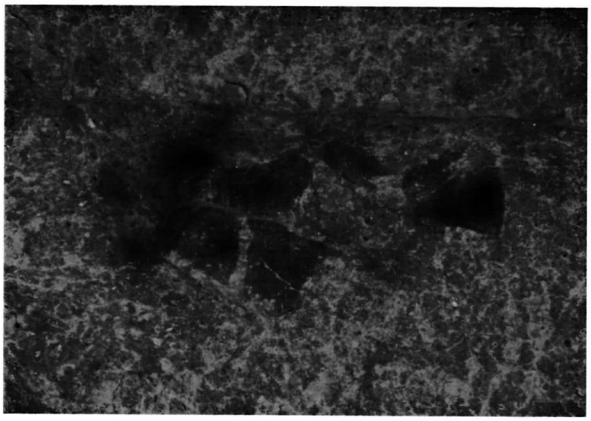
4　A区　竪穴住居743（南西から）

5　A区　竪穴住居746（南東から）

6　A区　竪穴住居750（北西から）

7　A区　竪穴住居840（北西から）

8　A区　落ち込み414（東から）



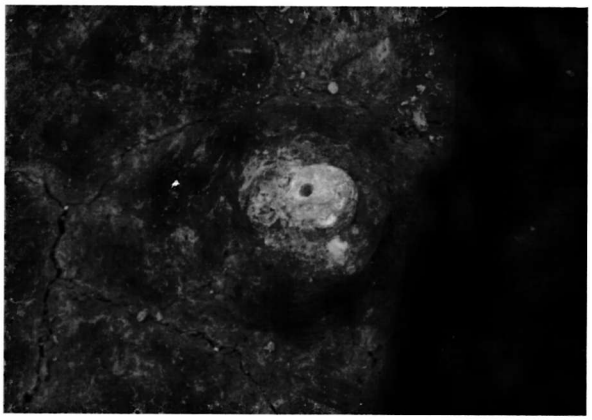
1　A区　縄文土器No.9地点出土状況（北から）

2　A区　溝841土器出土状況（南東から）

3　A区　溝179土器出土状況　（北東から）

4　A区　竪穴住居777土器出土状況（北から）

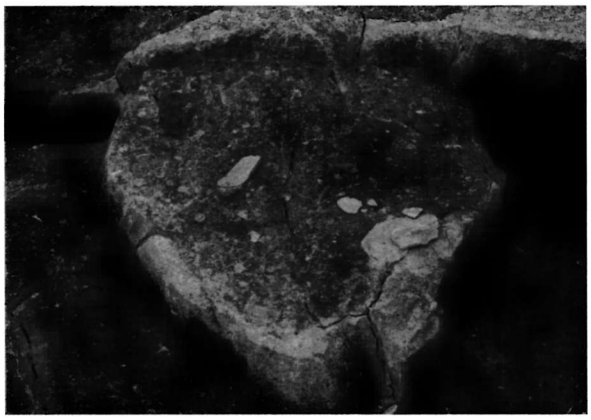
5　A区　柱穴119遺物出土状況（北東から）



6　A区　竪穴住居303紡錘車出土状況（南から）

7　A区　柱穴256土器出土状況（南西から）

8　A区柱穴266土器出土状況（南から）



1　A区　カマド285（竪穴住居260）（南東から）

2　A区　カマド285断ち割り状況（東から）

3　A区　カマド790（竪穴住居777）（南西から）

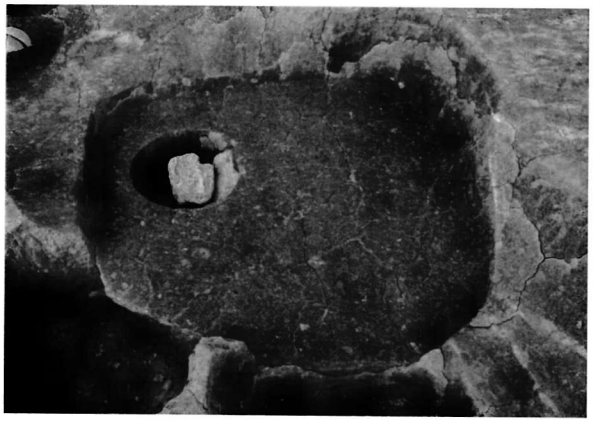
4　A区　カマド400（竪穴住居304）（南東から）

5　A区　カマド410（竪穴住居303）（南東から）

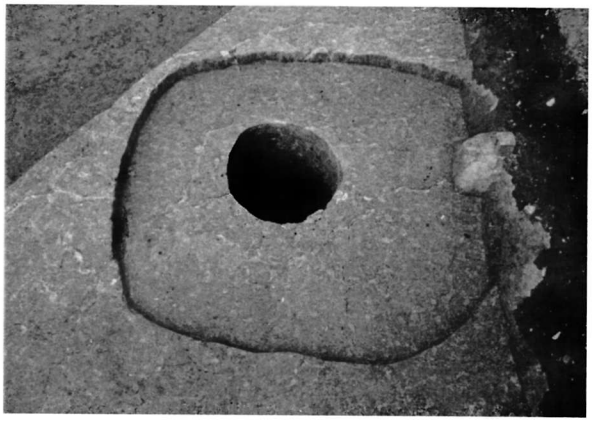
6　A区　竪穴住居746カマド（東から）

7　A区　土壙426（南東から）

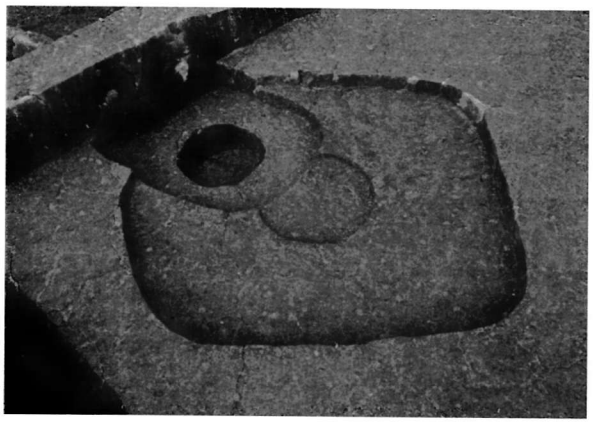
8　A区　竈形土器出土状況（北東から）



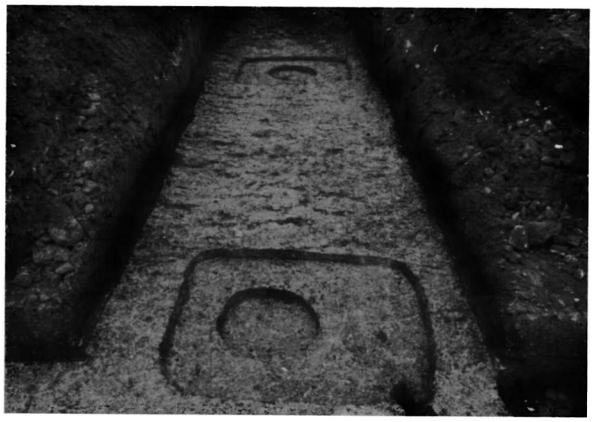
1　A区　柱穴201（建物3）（南から）



2　A区　柱穴215（建物3）（南から）

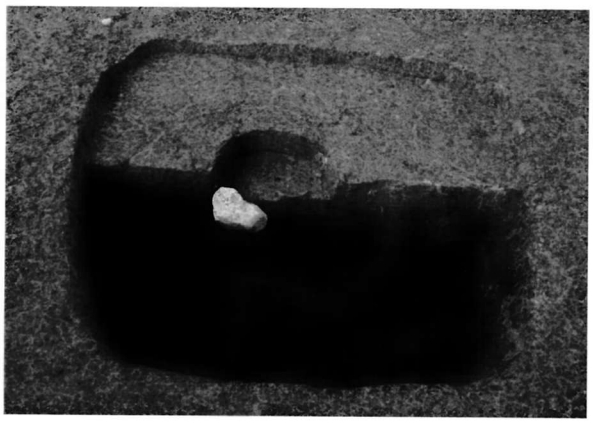


3　A区　柱穴270（建物3）（南から）



4　A区　建物15拡張区（南から）

5　A区　柱穴650（建物15）（南から）



6　A区　柱穴652（建物15）断ち割り（南から）

7　A区　柱穴650（建物15）断ち割り（南から）

8　A区　柱穴654（建物15）断ち割り（南から）

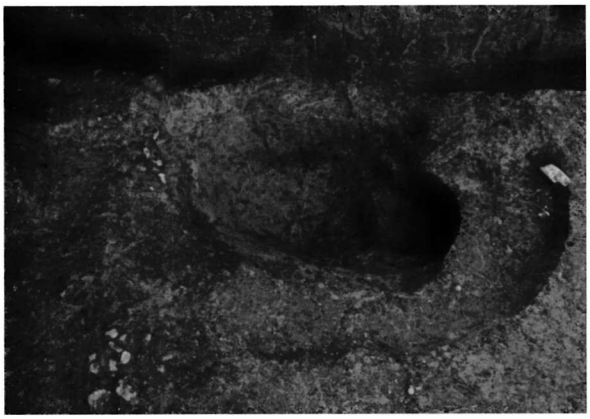
1　B区　竪穴住居 42（東から）

2　B区　竪穴住居 40（北西から）

3　B区　竪穴住居 39・49（北西から）

4　B区　竪穴住居 41（北西から）

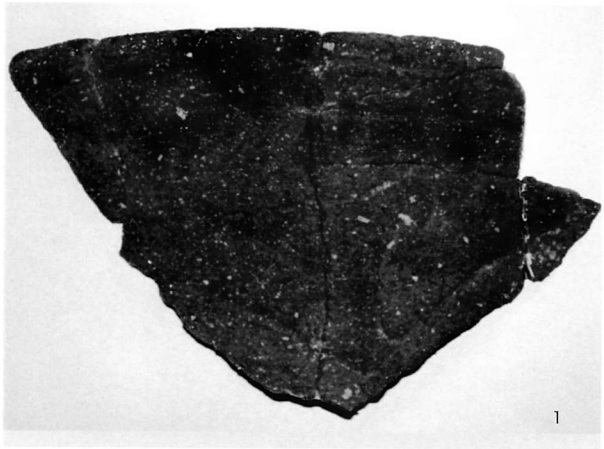
5　B区　土壙 74（西から）

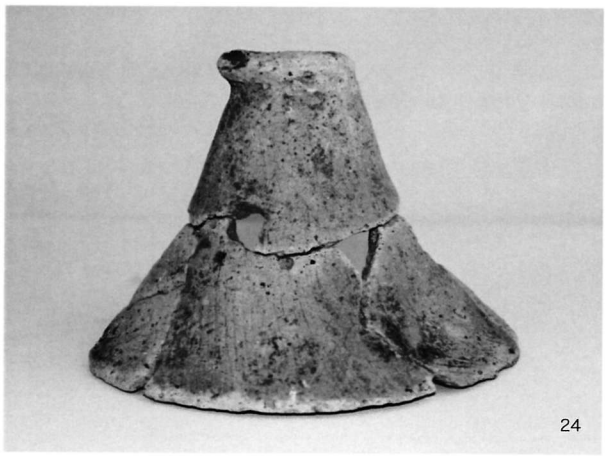


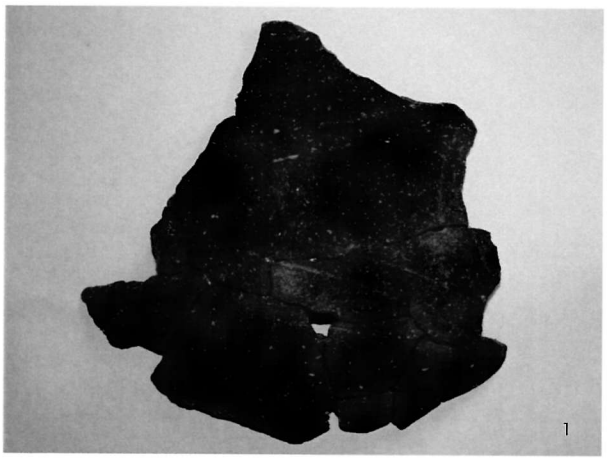
6　B区　土壙 60（竪穴住居 42）（北から）

7　B区　土壙 46（竪穴住居 39）（西から）

8　B区　柱穴 73（竪穴住居 42）断面（東から）





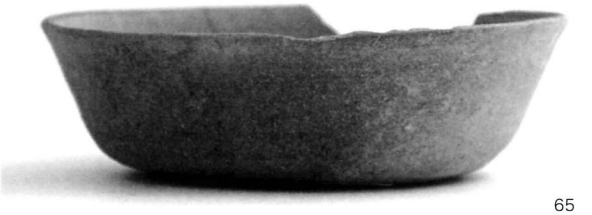


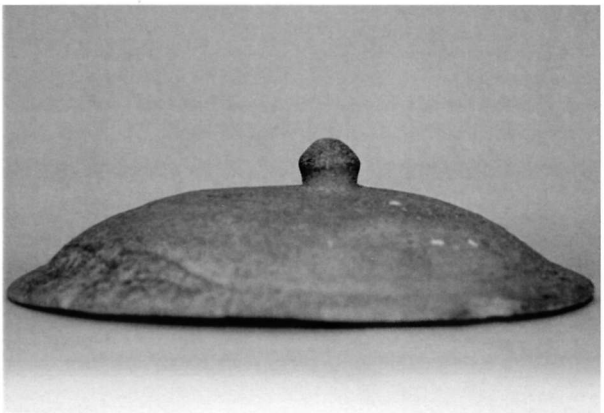
B区　土壙74（1）・A区　縄文土器（2～10）・溝841（24）・竪穴住居171（38）出土遺物

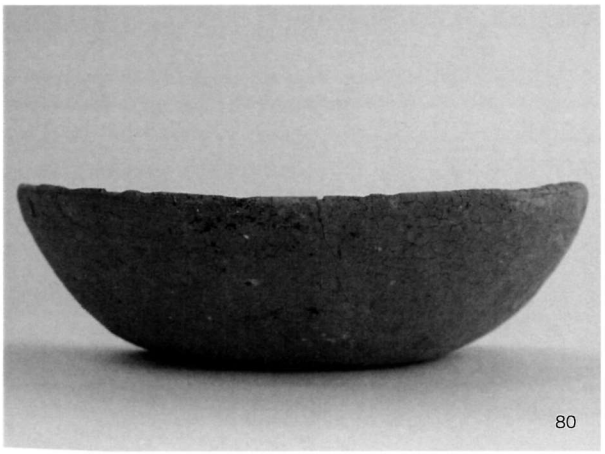
47

59

64


65


76


80

94

95

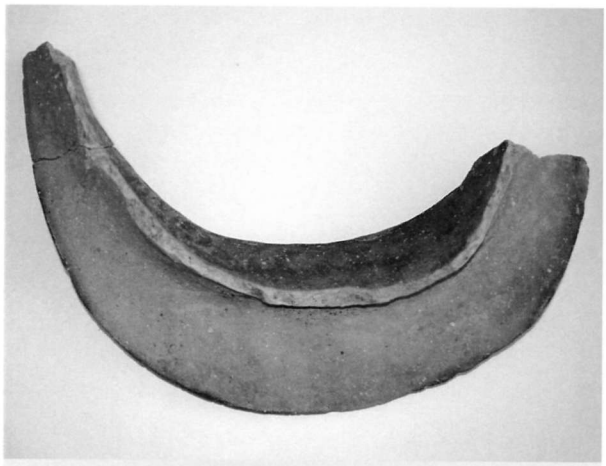
A 区　竪穴住居 260（47）・304（59）・339（64・65）・777（76・80）・土壙 426（94・95）出土遺物

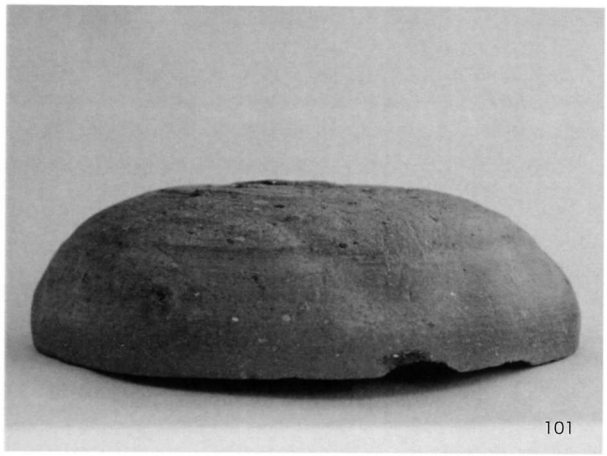
96

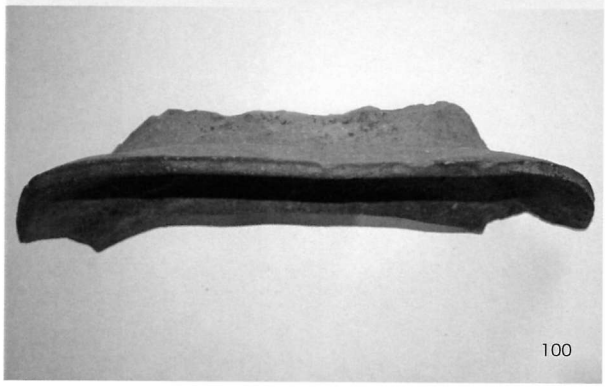
97

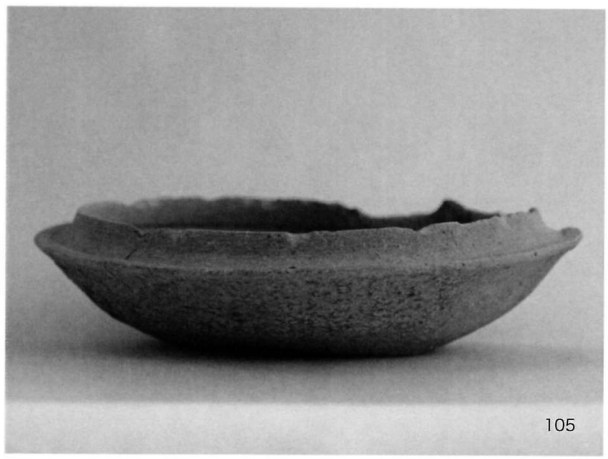
98

99

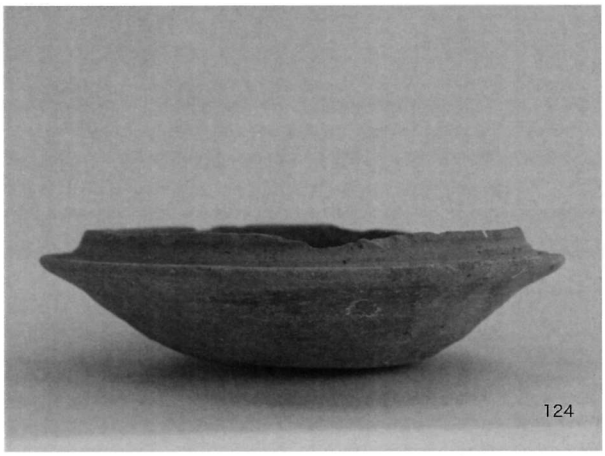


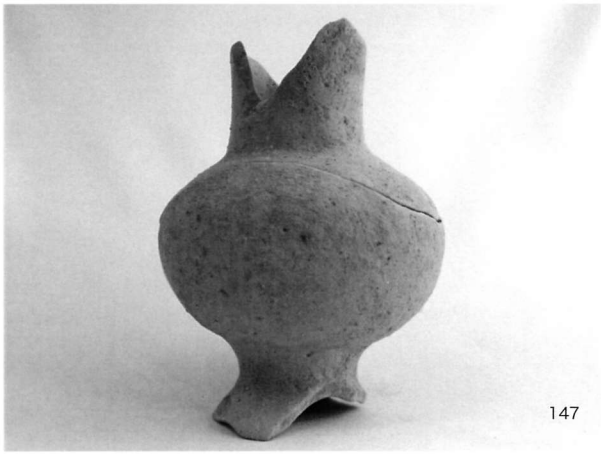

101


100

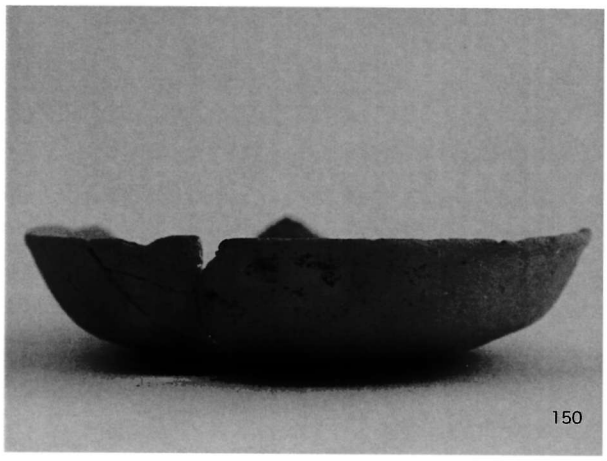

105

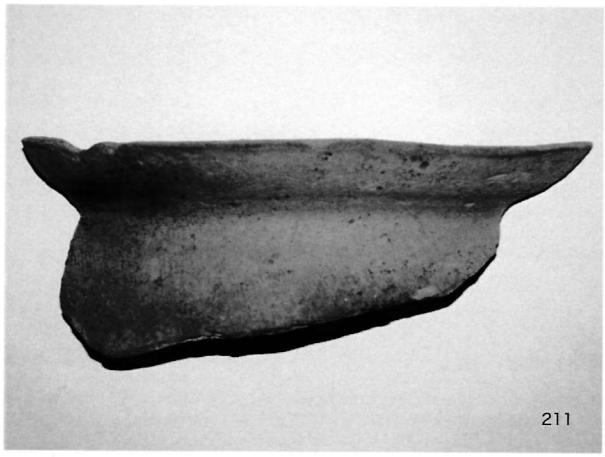
A 区　土壙 426（96 ～ 100）・溝 179（101・105）出土遺物

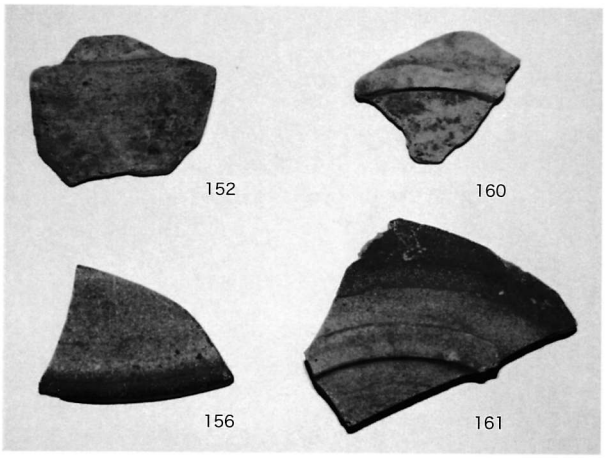


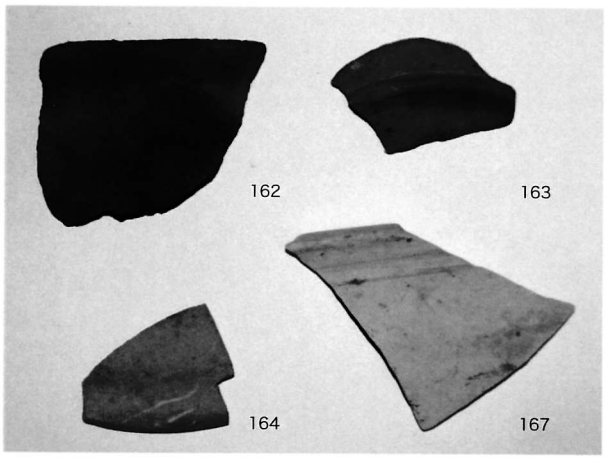


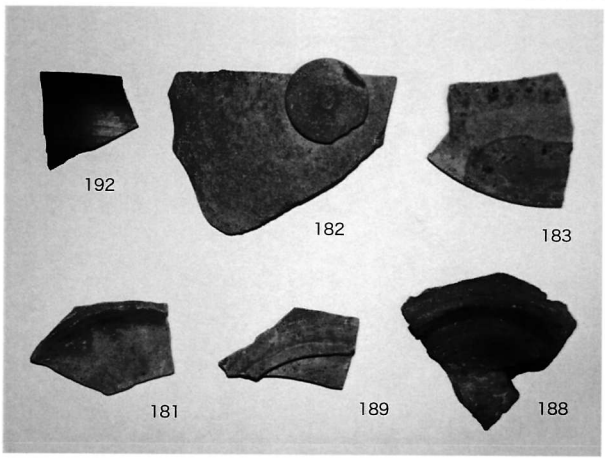
A区　溝179（106・108・114）・795（124・125・129）・317（141）・柵21（147）出土遺物

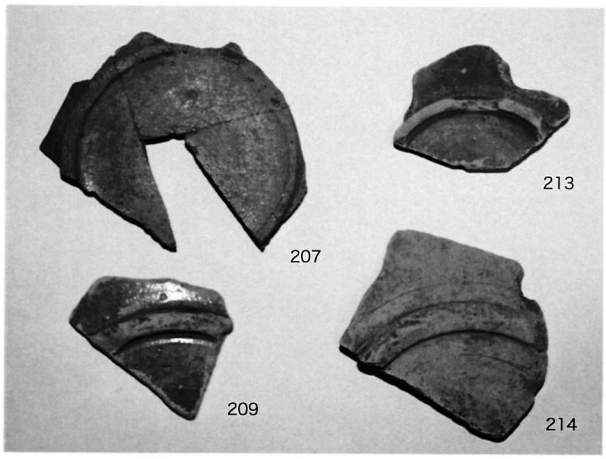




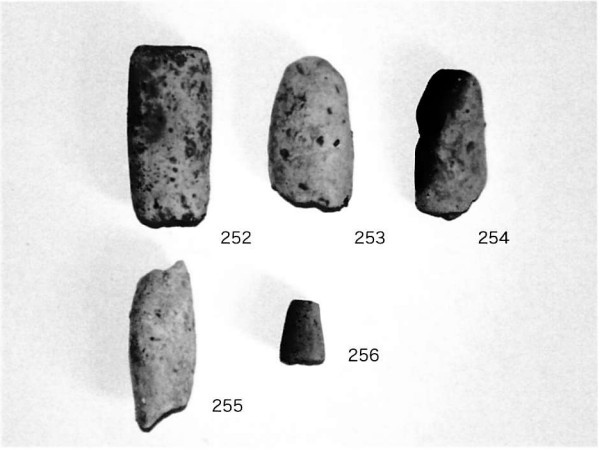


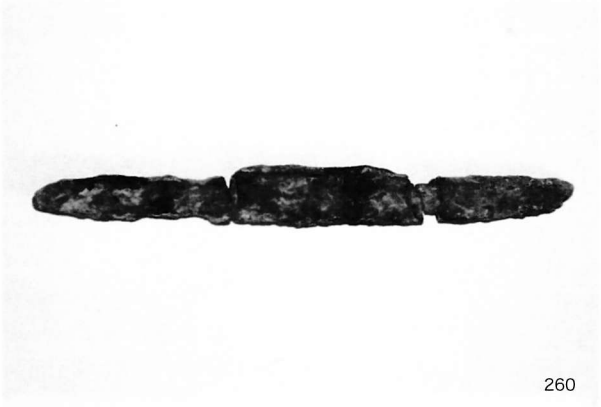


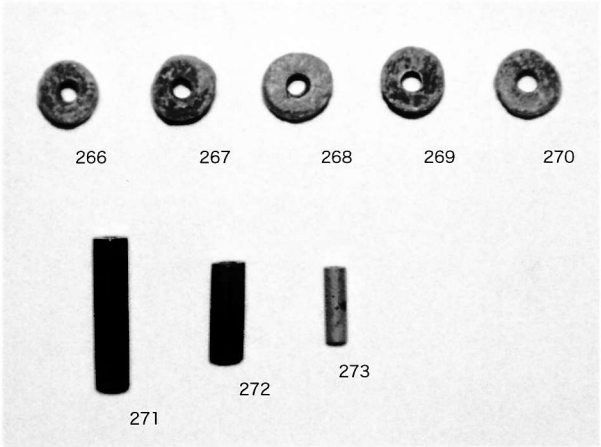


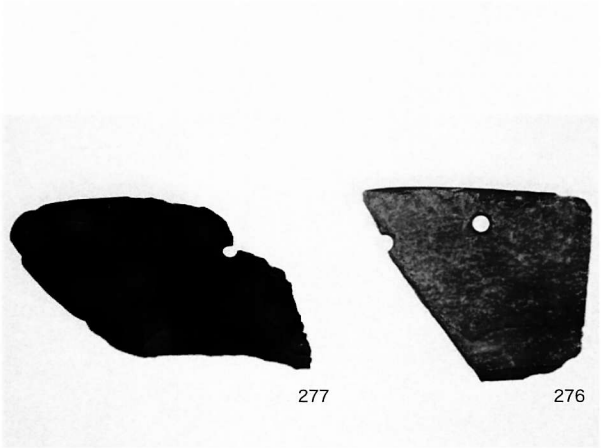


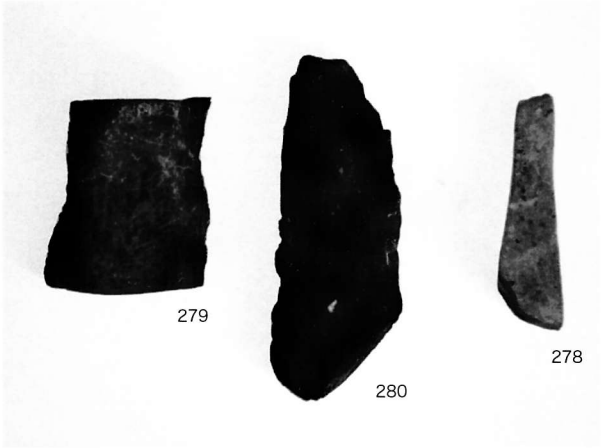
A 区　柱穴 119（150）・建物 1（152・156・160・161）・3（162 ～ 165・167・168）・15（181 ～ 183・188・189・192）・溝 534（207・209・211）・320（213・214）出土遺物











A区　溝795（252）・179（253・279）・247（257）・246（258）・540（275）・841（272）・土壙180（254）・254（255）・395（259）・建物12（256）・竪穴住居743（260）・303（274）・260（266～270・277）・730（273）・746（276）・柱穴119（271）・包含層（280）・B区　竪穴住居42（278）出土遺物

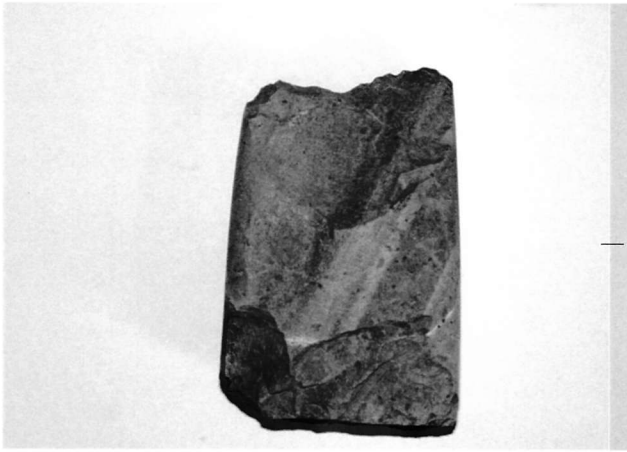
261

262

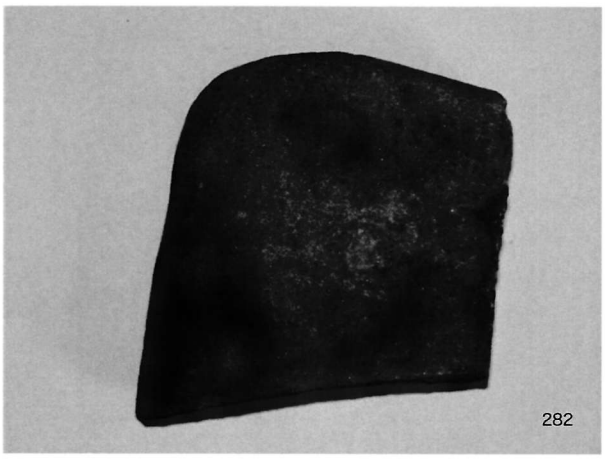
263

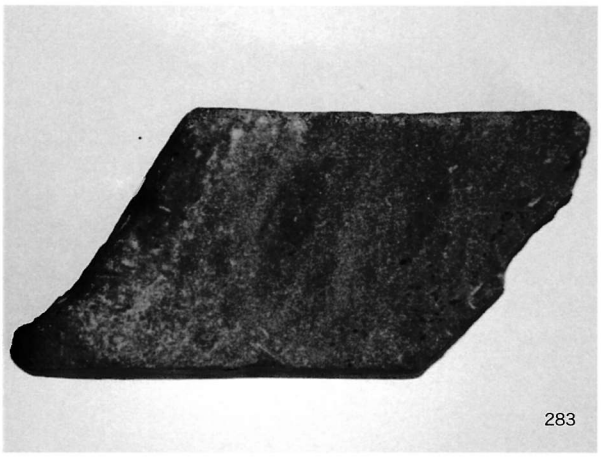
264

265



281


282


283

A 区　包含層（261）・溝 179（262）・841（264）・327（281）・柱穴 107（263）・土壙 825（282）・B 区　竪穴住居 40（265）・39（283）出土遺物

平安京右京五条四坊十二町・西京極遺跡

― 西院月双町の調査 ―

発行日　2010年3月31日

編　集
発　行　古代文化調査会

住　所　〒658－0032　神戸市東灘区向洋町中1－4－125－1404
TEL（078）857－6368

印　刷　（有）京都編集工房
〒612－0868　京都市伏見区深草直違橋南1－524－24
TEL（075）643－6978